

増山城下町における戦国期集落の調査
— 室牧線・鉄塔建替 (No.6.2-1、No.6.2-2) 他工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 —

増山遺跡発掘調査報告

2018年3月
富山県砺波市教育委員会
北陸電力株式会社
株式会社上智

増山遺跡発掘調査報告

二〇一八年三月

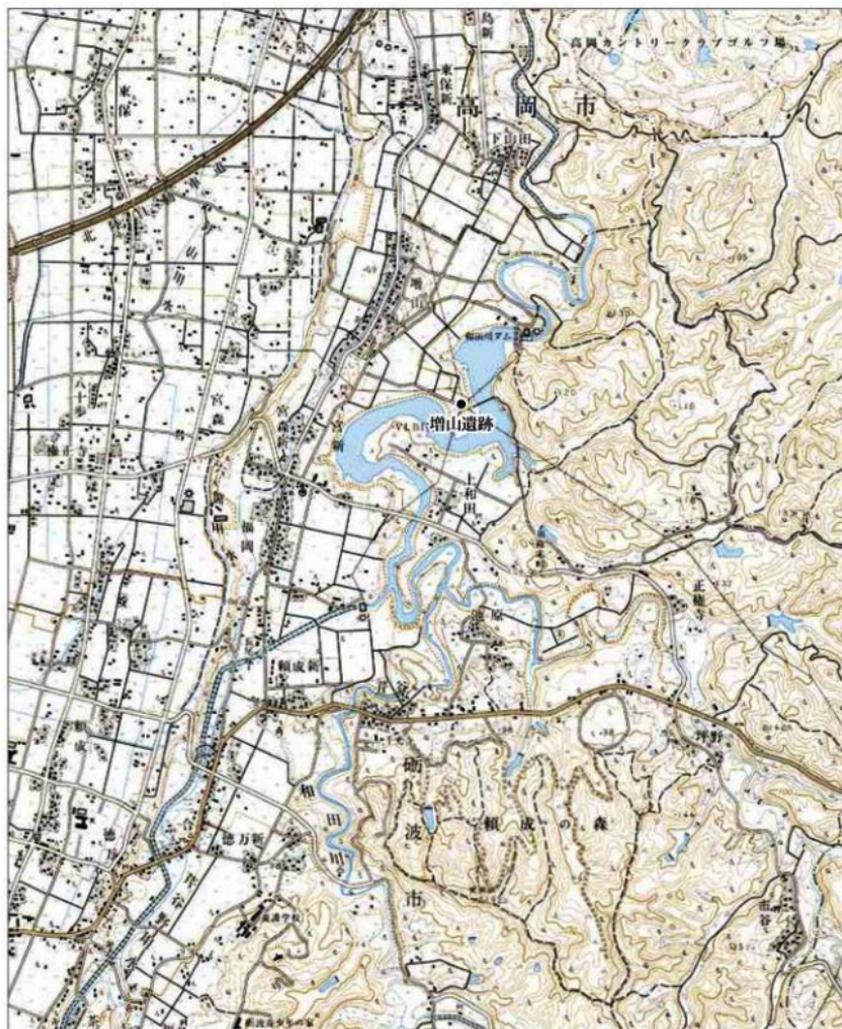
富山県砺波市教育委員会 北陸電力株式会社 株式会社上智

2018年3月
富山県砺波市教育委員会
北陸電力株式会社
株式会社上智

増山遺跡発掘調査報告

増山城下町における戦国期集落の調査

— 室牧線鉄塔建替 (No.62 ~ No.62-2) 他工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 —



2018年3月

富山県砺波市教育委員会 北陸電力株式会社 株式会社上智

序

砺波平野の東縁、和田川段丘帯に位置する増山遺跡は、南北朝時代から幾多の戦乱の舞台となった増山城の城下町として知られています。廃城後、町は衰退の一途を辿り、今は水田景観が広がり、わずかに土塁や塚が往時を偲ばせます。

さて、このたび北陸電力株式会社の鉄塔建設に伴い、本発掘調査を行うことになりました。付近では、昭和50年代に試掘調査が行われており、それ以来の本格的な調査となります。

今回の調査では、16世紀後葉から17世紀前葉までの集落跡が見つかりました。大型の柱穴をもつ掘立柱建物や多数の井戸など、狭い面積にもかかわらず、350基以上の遺構がひしめきあっていました。遺物では、瀬戸美濃の陶器がはるか太平洋側から数多くもたらされたことや体長40-50cmもあるタイ科の魚が内陸部に運ばれ消費されたこと、また稲・蕎麦・茄子・西瓜・大根・蕪などの植物を栽培していたことなどが明らかとなり、戦国時代の人々が増山の城下町で豊かな生活を送っていたことがわかりました。

このような成果をまとめた本書を、地域の歴史資料としてご活用いただければ幸いに存じます。最後になりましたが、地元増山自治会をはじめ、調査にご協力いただきました関係各位に深く感謝申し上げます。

平成30年3月

砺波市教育委員会

教育長 山本 仁史

例 言

- 1 本書は、富山県砺波市増山地区内に所在する増山遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、北陸電力株式会社が事業主体となる室牧線鉄塔建替（No.62～No.62-2）工事に伴うものである。北陸電力株式会社の依頼を受けて、平成29年度に砺波市教育委員会の監視の下、株式会社上智に委託して実施した。
- 3 今回の発掘調査は、本遺跡における第2次調査である。
- 4 発掘調査及び整理作業に際し、下記の諸氏・諸機関に指導協力を頂いた。記して謝意を表します。（敬称略）
新宅輝久 藤田慎一 藤澤良祐 三浦知徳 木村孝一郎 石井啓 森内修造 橋本正博
- 5 本遺跡の略記号は「TM II」（Tonamishi Masuyama 第II次）で、遺物には「TM II」と注記している。
- 6 出土遺物及び原図・写真類は砺波市教育委員会が保管している。
- 7 本書の編集は片山博道（株式会社上智）が行い、執筆・分担は各文末に記した。

凡 例

- 1 本書の方位及び座標は、世界測地系の平面直角座標第VII系を基準とし、標高は東京湾平均海面（T.P.）で表示している。
- 2 遺構記号は、以下のとおりである。
SB: 掘立柱建物（建物の柱穴はPとして単独の柱穴・ピットとは区別する） SP: 柱穴・ピット SE: 井戸
SK: 土坑 SD: 溝 SX: 不明遺構・樹木痕
- 3 引用・参考文献は、註を算用数字で文中に示し、第1～3・5章は各頁の下段に、第4章と第5章2は各節末に掲載している。
章ごとに分けて掲載している。
- 4 本書に掲載した遺物番号はすべて通し番号とし、本文・写真図版の番号はすべて一致している。
- 5 本書で使用する用語は以下のとおりとする。
樹木痕: 通例風倒木痕・倒木痕と呼称されるが、風倒木痕は風で倒れた木を限定し、倒木痕は倒れた、もしくは倒した木を限定する用語である。本調査では倒れた木だけではなく、立ち枯れた木も想定していることから、「樹木痕」と呼称する。遺構の単位: 竪穴建物を1軒、溝・流路を1条、それ以外を1基とする。
- 6 遺構・遺物の網掛けなどは各図に示している。
- 7 写真図版の遺物は約4分の1としている。

目次

序・例言・凡例

第1章 調査の経過	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査・整理体制	5
3 調査・整理の方法と経過	5
第2章 遺跡の位置と環境	9
1 地理的環境	9
2 歴史的環境	10
第3章 調査の成果	13
1 調査区及びグリッドの設定	13
2 基本層序	14
3 遺構と遺物	19
第4章 自然科学分析	57
1 試掘調査 (T7) 出土炭化材の放射性炭素年代測定	57
2 暗渠 (SD010) 出土木材の放射性炭素年代測定	59
3 井戸 (SE213) 出土種子の放射性炭素年代測定	60
4 井戸 (SE213) の花粉分析	62
5 井戸 (SE213) から出土した大型植物遺体	64
6 井戸 (SE213) 出土の魚類遺体	67
7 木製品の樹種同定	70
8 漆器椀の塗膜分析	74
9 井戸 (SE046・131) 出土礫の石材同定	76
第5章 総括	79
1 遺物の様相	79
2 土塁の復元と城下の形成過程	83

写真図版

報告書抄録

図版目次

- 図 1 過去の調査位置と今年度の調査位置図
図 2 鉄塔建替及び座標位置、試掘トレンチ位置図
図 3 試掘トレンチ 平面・断面図、出土遺物
図 4 地形・地質図
図 5 調査地周辺の遺跡分布図
図 6 調査区及びグリッド設定図
図 7 基本層序概念図
図 8 調査区土層断面図
図 9 SX028 平面・断面図
図 10 II層とIII層の分布と土層断面図
図 11 遺構配置図
図 12 建物配置図
図 13 区画 1(SB380) 平面・断面図、出土遺物
図 14 区画 2(SB381・382) 平面・断面図、出土遺物
図 15 区画 3(SB383) 平面・断面図
図 16 区画 3(SB383) 出土遺物
図 17 区画 4(SB384) 平面・断面図、出土遺物
図 18 SE002 平面・断面図、出土遺物
図 19 SE039 平面・断面図、出土遺物
図 20 SE046 平面・断面図、出土遺物
図 21 SE047 平面・断面図、出土遺物
図 22 SE131 平面・断面図、出土遺物
図 23 SE133 平面・断面図、出土遺物
図 24 SE175 平面・断面図、出土遺物
図 25 SE201 平面・断面図
図 26 SE201 出土遺物
図 27 SE213 平面・断面図、出土遺物 (1)
図 28 SE213 出土遺物 (2)
図 29 SE214 平面・断面図、出土遺物
図 30 SK001・173 平面・断面図、出土遺物
図 31 SK212 平面・断面図、出土遺物
図 32 SK216・217・218、SK300 平面・断面図
図 33 樹木痕平面・断面図
図 34 暗渠平面・断面図
図 35 遺構外出土遺物
図 36 暦年較正結果
図 37 暦年較正結果
図 38 暦年較正結果
図 39 SE213 における花粉分布図
図 40 マダイ骨格図と名称
図 41 腹椎左側と名称
図 42 出土魚類遺体と計測箇所及び計測値
図 43 タイ科現生標本群腹椎の形態とサイズ
図 44 中世の越中西部
図 45 越中魚津瓢箪園絵 (天明 5 年)
図 46 塗膜層の赤外分光スペクトル
図 47 遺跡とその周辺の地質図
図 48 器種と生産地の構成図
図 49 城下町の編年図
図 50 ほ場整備事業前土塁断面模式図
図 51 土塁周辺の小地名図
図 52 土塁の復元図
図 53 城下町の復元図
図 54 富山県における城と城下町の分布図
図 55 越中国の中近世建物

表目次

表1	発掘調査及び整理事業の工程表	表17	測定試料及び処理
表2	地形と時代別の遺跡数	表18	放射性炭素年代測定及び暦年校正の結果
表3	増山城と城下町の歴史年表	表19	測定試料及び処理
表4	遺構一覧表(1)	表20	放射性炭素年代測定及び暦年校正の結果
表5	遺構一覧表(2)	表21	産出花粉胞子一覧表
表6	遺構一覧表(3)	表22	産出花粉胞子一覧表
表7	遺物観察表(1)	表23	樹種同定結果
表8	遺物観察表(2)	表24	樹種同定結果一覧表
表9	遺物観察表(3)	表25	分析対象一覧表
表10	遺物観察表(4)	表26	生漆の赤外吸収位置とその強度
表11	遺物観察表(5)	表27	赤色塗膜層のX線分析結果(mass%)
表12	測定試料及び処理	表28	塗膜分析結果
表13	放射性炭素年代測定及び暦年校正の結果	表29	分析試料とその詳細
表14	富山県小矢部市桜町遺跡における串田新式系 土器に伴う ¹⁴ C年代	表30	各遺構の礫の岩石種
表15	縄文時代中期後半～後期前葉の土器型式と ¹⁴ C年代との対応関係	表31	土器・陶磁器編年対応表
表16	縄文時代中期後半～後期前葉における土器型 式と暦年校正年代との対応関係	表32	土器規模の諸元
		表33	歴史年表
		表34	瀬戸美濃を軸とした増山城下町編年表

写真目次

写真1	基準点測量	写真8	SE213から産出した花粉化石
写真2	包含層掘削・遺構検出	写真9	増山遺跡の井戸(SE213)から産出した花粉化石
写真3	遺構掘削	写真10	木製品及び木材の光学顕微鏡写真(1)
写真4	遺構礫平面計測	写真11	木製品及び木材の光学顕微鏡写真(2)
写真5	遺構断面計測	写真12	木製品及び木材の光学顕微鏡写真(3)
写真6	遺物検討(越前)	写真13	漆器塗膜構造
写真7	遺物検討(備前)	写真14	石材の実体顕微鏡写真

写真図版目次

- 写真図版 1 調査地遠景
- 写真図版 2 調査地近景
- 写真図版 3 基本層序
- 写真図版 4 整地層 (SX028)
- 写真図版 5 区画 1 (SB380)
- 写真図版 6 区画 2 (SB381・382)
- 写真図版 7 区画 3 (SB383)
- 写真図版 8 区画 4 (SB384)
- 写真図版 9 井戸 (SE002・039・046)
- 写真図版 10 井戸 (SE047・131)
- 写真図版 11 井戸 (SE131・133)
- 写真図版 12 井戸 (SE175・201)
- 写真図版 13 井戸 (SE213)
- 写真図版 14 井戸 (SE214)
- 写真図版 15 土坑 (SK001・173・212・216 ~ 218)
- 写真図版 16 樹木痕・暗渠
- 写真図版 17 出土遺物 (1)
- 写真図版 18 出土遺物 (2)
- 写真図版 19 出土遺物 (3)
- 写真図版 20 出土遺物 (4)

第1章 調査の経過

1 調査に至る経緯

(1) 過去の調査

増山遺跡は昭和50～52年に試掘調査及び発掘調査が行われており¹、平成7年に工事立会い、平成18年に試掘調査²が行われており、今回の調査は2回目の発掘調査となる(図1)。

発掘調査以前

土塁東側の字下町までが城下町とされていた。

昭和50～52年調査

調査は第一期(6月6日～30日)、第二期(8月1日～9月29日)の2期に分けて行われた。

第一期は調査対象地約61.6ヘクタールを1～6区に分けて試掘調査を行った。試掘トレンチはNo.1地区

に1m×1mを5箇所、No.2地区に1m×3mを4箇所、No.3地区に1m×3mを10～15箇所、No.4地区に1m×3mを約120箇所、No.5地区に1m×3mを36箇所、No.6地区に1m×3mを14箇所設定し遺構・遺物の有無を確認した。その結果、段丘全体に中・近世の遺物が散布することを確認し、また縄文時代と古代の遺物も確認されたことから、縄文・古代・中世・近世の複合遺跡として「増山遺跡」と呼称された。

第二期はNo.4区において圃場整備により破壊される①～⑤地点の発掘調査が行われた。調査成果は、①地点(土坑・溝)、②地点(井戸・竪穴・土坑・柱穴)、③地点(遺構なし)、④地点(井戸・土坑・柱穴)、⑤地点(井戸・竪穴・土坑・溝・柱穴)を検出し、また、遺物は陶磁器(珠洲・肥前系陶磁器・越中瀬戸・瀬戸美濃)、土師器、土師質土器、石臼、煙管等の室町時代から江戸前期の遺物が出土した。この調査成果により、当地域が城下町として初めて明らかにされた。

1 砺波市教育委員会 1978『富山県砺波市柳野遺跡発掘予備調査概要』

2 富山県砺波市教育委員会 2008『増山城跡総合調査報告書』



図1 過去の調査位置と今年度の調査位置図

(2) 今回の調査

北陸電力株式会社（以下、北電）は、平成28年4月4日に鉄塔建替を計画し、平成28年5月13日に増山遺跡内において鉄塔建替計画があることを砺波市教育委員会（以下、市教委）に伝えた（図2）。

これを受けて、市教委は富山県教育委員会（以下、県教委）に対して文化財保護法第93条申請を平成28年5月16日付で提出し、県教委は平成28年5月19日付で北電に通知した。

市教委は平成28年6月13日～15日に試掘調査を行った。調査方法は、調査対象面積1,339㎡の範囲内に試掘トレンチを7箇所（T1～T7）設定した（図2）。まずバックホウにより地山まで掘削し、人力により平面・断面の精査を行った後、堆積状況や遺構・遺物の有無

を確認した。調査成果は以下のとおりである（図3）。

T1 調査対象地の西側、本調査区外に位置する。

土層は耕作土（Ⅰ層）と黒色層（Ⅱ層）と地山（Ⅳ層）からなる。遺物は黒色層から出土していることから、本調査のⅡ層に相当する。

遺構は土坑及び柱穴が6基検出された。

遺物は越中瀬戸内甕皿1点①、土師器1点②が出土した。

①は越中瀬戸内甕皿の口縁部から底部の破片である。釉薬は鉄釉を口縁部から高台まで施釉されているが、一部高台内まで至る。高台接地面は露胎である。底部内面は釉薬を削り取り、磨かれたようになる。断面では胎土と鉄釉の間に白色の部分が見られる。高台は三角形に削り出され低い。その削り出しは体部中央まで施される。これにより体部中央に稜を持つ。口縁部は

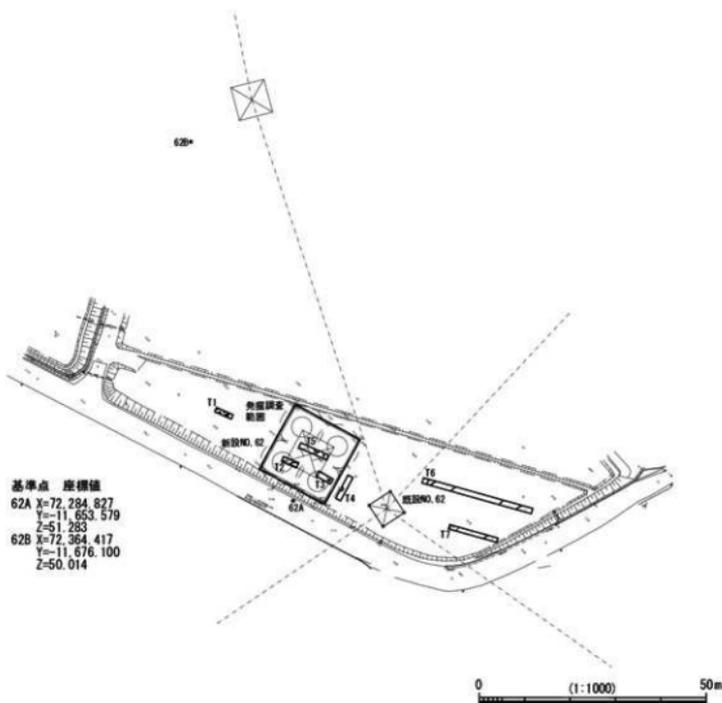


図2 鉄塔建替及び座標位置、試掘トレンチ位置図

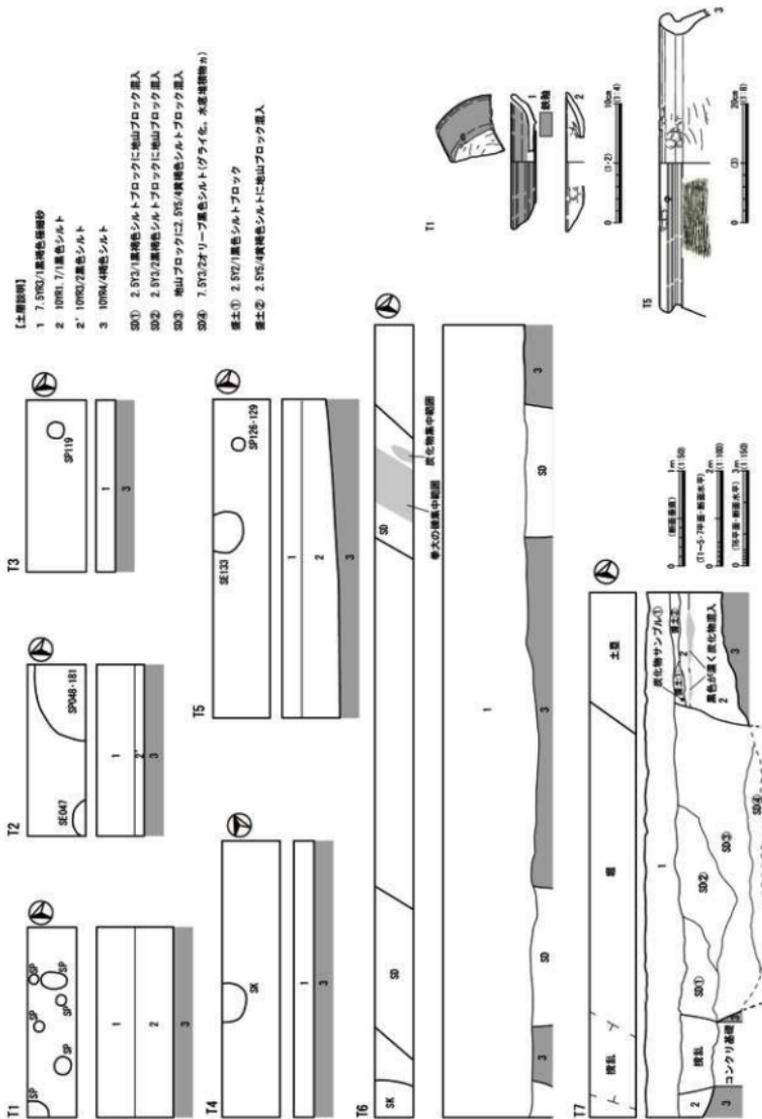


図3 試掘トレンチ 平面・断面図、出土遺物

外反し、端部は内外に稜を持ち三角形を呈する。時期は16世紀末葉から17世紀初頭と推定される。

2は灯明皿の口縁部から底部にかけての破片で、底部の大半は欠損している。口縁部から底部にかけて内湾する。成形は手づくねで、体部から底部は指押え後、口縁部に横ナデを施す。口縁部端部は上方へ強く折り曲げ、内面に浅い溝が生じる。時期は16世紀後半と推定される。

T2 本調査区南西側に位置する。

土層は耕作土(Ⅰ層)と黒色層(Ⅲ層)と地山(Ⅳ層)からなる。黒色層は出土物がないことから、本調査のⅢ層相当と考えられる。

遺構は2基検出され、本調査のSE047とSP048・181に相当する。

遺物は出土しなかった。

T3 本調査区南東側に位置する。

土層は耕作土(Ⅰ層)と地山(Ⅳ層)からなる。黒色層は確認されなかった。

遺構は1基検出され、本調査のSP119に相当する。

遺物は出土しなかった。

T4 鉄塔と本調査区の間、本調査区外の東側に位置する。

土層は耕作土(Ⅰ層)と地山(Ⅳ層)からなる。黒色層は確認されなかった。

遺構は土坑または柱穴が1基検出された。

遺物は出土しなかった。

T5 本調査区の概ね中央に位置する。

土層は耕作土(Ⅰ層)と黒色層(Ⅱ・Ⅲ層)と地山(Ⅳ層)からなる。黒色層は試掘調査時に分けていなかったが、本調査のⅡ層とⅢ層に相当する。

遺構は2基検出され、SE133とSP129またはSP126に相当する。

遺物は珠洲1点(3)が出土した。

3は壺の口縁部から肩部の破片である。口縁部は隅丸方形を呈し、へら状工具により整形される。口縁部から口縁部内面にかけて指圧痕がみられ、これらの指圧痕は口縁部をくの字状に折り曲げる際の痕跡と考えられる。肩部には横方向の平行タタキを施し、頸部との間に稜ができる。頸部から肩部内面は横方向のナデを施す。口縁部端部の丸い孔は焼成後のもので、用途

は不明である。時期は14～15世紀と推定される。

その他、礫が出土しているが、SE133のものと考えられる。

T6 本調査区外、鉄塔より北東側に位置する。約土層は耕作土(Ⅰ層)と地山(Ⅳ層)からなる。黒色層は確認されなかった。

遺構は溝2基と土坑または柱穴1基が検出された。溝は概ね平行し、幅も概ね同様である。二重の堀とも考えられ、土塁に伴う空堀の可能性もある。また、東側の溝は埋土内に拳大の礫が充填され、炭化物集中範囲も確認される。現存する土塁との位置関係や2条の溝の間に土塁の盛土層が認められないことから、土塁は2条の溝の東側に存在した可能性がある。

遺物は出土しなかった。

T7 本調査区外、鉄塔より南東側に位置する。

土層は耕作土(Ⅰ層)と黒色層(Ⅱ層)と地山(Ⅳ層)からなる。黒色層は部分的にみられ、当初は旧表土と考えていたが、不明である。

遺構は2基検出され、堀・土塁と推測される。堀の西端は攪乱を受けているため不明であるが、概ね攪乱の西端と一致すると考えられる。堀の埋土は1～3は斑土状で、短時間に人為的に埋めた可能性が高い。土塁の盛土は基底部のみ残存する。埋土1の中の炭化物について放射性炭素年代測定を行っている。詳細は第4章で説明する。結果は縄文中期と予想外であったが、周辺に縄文中期の遺跡が存在することを示唆する。

遺物は出土しなかった。

市教委は、試掘調査の結果、調査地において遺構・遺物が遺存していることを確認したので、本発掘調査が必要であることを北電に説明した。

北電はこれを受けて民間の調査会社を選定し、平成29年3月10日に株式会社上智(以下、上智)と契約を結ぶこととなった。

21日、北電と市教委と上智の3者で協定を締結した。同日、市教委は文化財保護法第99条申請を3月21日付で富山県教育委員会教育長へ提出し、受理された。

また、同日、北電と上智で、地元関係者(自治会長・増山を守る会・耕作者等)への挨拶を行った。

発掘調査は4月3日から測量や準備等を行うこととなった。

2 調査・整理体制

試掘調査・発掘調査・整理作業・報告書作成期間及び発掘調査面積・調査担当者は、次の通りである。

試掘調査

調査期間：平成28年(2016)6月13～15日

調査対象面積：1,339㎡

調査面積：74.88㎡

調査担当者：砺波市教育委員会 野原大輔

本発掘調査

調査期間：平成29年(2017)4月3日～6月19日

調査面積：485.70㎡(1面:259.04㎡ 2面:226.66㎡)

発注者：北陸電力株式会社富山支店

総務部用地チーム

担当者：泉野慎一(統括課長)

中田哲治(副課長)

監理者：砺波市教育委員会

監理担当者：野原大輔

受注者：株式会社上智

統括責任者：伊藤富男

調査担当者：片山博道

調査補助員：石川貴之

測量員：前田雅成、野村寿子

発掘作業員：伊藤恵美子、上坂清三、工藤勲

大田久美子、齊木和佳、常本啓文

得地登、得能薫、中田和雄

西村敏、松浦華織、湯浅とみこ

林達雄(バックホウ運転手兼務)

整理作業・報告書作成・印刷・製本・発送

整理期間：平成29年6月20日

～平成30年3月30日

発注者：北陸電力株式会社富山支店

総務部用地チーム

担当者：泉野慎一(統括課長)

中田哲治(副課長)

監理者：砺波市教育委員会

監理担当者：野原大輔

受注者：株式会社上智

統括責任者：伊藤富男

整理担当者：片山博道

整理補助員：野村寿子

整理作業員：齊木和佳、片山陽子、松浦華織

3 調査・整理の方法と経過

(1) 発掘調査(表1)

4月4日、北電が送電線の用地測量と基準点測量、と鉄塔用地範囲(調査区)の範囲測量を行った。

4月12日にプレハブ・倉庫・仮設トイレ・資材・バックホウ・発掘道具等を搬入及び設置した。また、バリケード・調査看板の設置も行った。

現地打合せを行い、調査区範囲を確認した。打合せは概ね隔週ごとに行うこととなった。

発掘調査は4月13日～6月16日にかけて行った。

4月13・14日にバックホウ(0.25m相当、平爪、ゴムキャタ)を1台使用して表土掘削を行った。

表土掘削 ここでいう表土とは耕作土と床土を指す。表土厚は15～20cm程度と薄く、調査区南東部では黄褐色の地山を直に確認した。よって、表土掘削は表土のみの15～20cmで止めた。黄褐色の地山範囲は試掘調査で想定したとおり、調査区南東部で確認し、その他の範囲では黒色または斑土層を検出面とした。

表土が15～20cmと薄いこともあり、検出面では現



写真1 基準点測量

代の耕作痕の影響を強く受けていた。特に調査区南側では現市道に沿う東西方向に大きく攪乱を受けていた。

13日から作業員による人力掘削を開始した。新規入場者教育後、重機掘削が終わったところから調査区の壁面整形と断面観察・排水を兼ねた側溝を掘削した。

人力掘削 調査区壁面の整形及び攪乱等を剣スコップ・角スコップ等の大型道具、遺構を移植ゴテ等の小型道具を使用した。当初包含層と考えていたⅡ層は調査を進めていく中で、整地層と判断し、平面と断面を確認しつつ、層ごとにスコップやジョレンで薄くすきとりを行った。遺構検出はジョレン及び両刃鎌(ガリ)による精査を行った(写真2・3)。

排土 一輪車によって運搬し、調査区西側に仮置きした。

排水処理 雨水及び湧水を100V2吋水中ポンプによって近くの排水溝に排水し、その際濁水を直接溝へ排水せず、沈殿槽に一旦溜めた水を排水した。

4月15日～24日にかけて遺構検出を行った。検出面は耕作痕の影響を強く受けていることと、調査区北西部では整地層が検出面となること、また遺構が複数重複しているため、遺構検出が困難であった。24日でも完全に遺構検出を終えなかったが、遺構を2cm程度段差下げし、遺構を確定していった。

段差下げ 攪乱が深くまで及んでいるため、攪乱を除去することと、遺構のほとんどが柱穴と想定されることから、平面で柱痕を検出することを目的とする。

24日以降は段差下げ、半裁、測量・計測、完掘を行った。

測量・計測 平面図・遺物の地点上げ・断面図のセクションポイントをトータルステーション、断面図を手測りで行った。調査区の断面図は4面すべて作成した(写真4・5)。

遺構番号・遺物取り上げ番号 通し番号を付けた。なお、遺物取り上げ番号は頭にdを付け、トータルステーションで測量して座標を持たせて取り上げている。この場合の遺物は特に重要と考えられるものに限る。

遺構掘削は30日まで行った。31日の午前中に掃除と片付けを行い、正午に空中写真撮影(以下、空撮)を行った。空撮はラジオコントロールヘリコプター(以下、RCヘリ)を使用した。撮影後、発掘道具の後片付けを行った。

撮影 遺構と遺物ともにデジタル一眼レフカメラ2450万画素(以下、デジカメ)を使用した。調査区的全景撮影は遺構の完掘後に行い、RCヘリを使用し空撮(デジカメ3600万画素)を行った。

空撮後、調査スタッフ全員で増山城を登り、一の丸から調査区を撮影した。また、建物の柱を想定して柱穴のそばに作業員が立ち、撮影を行った。

下層調査は6月2日から開始し、黒色層の掘削を行った。黒色層は調査区中央から西側が最も深く、40～50cmを測る。黒色層は厚いので、3回に分けて掘削した。掘削途中で上層の遺構を検出した。

黒色層は古代または縄文時代の包含層と想定していたが、遺物は含まれていなかった。

9日、黒色層を完掘した。12日に地山面からは下層の遺構が検出されなかったが、樹木痕が調査区北西部と北東部の2箇所でも重複して検出された。



写真2 包含層掘削・遺構検出



写真3 遺構掘削

表1 発掘調査及び整理作業の工程表

		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月		1月		2月		3月		
		中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
準備計画	契約書関係																											
	測量																											
発掘調査	表土掘削																											
	包含層掘削																											
	遺構検出																											
	遺構掘削																											
	測量																											
	空撮																											
	埋戻し																											
整理作業	洗浄・注記																											
	接合・復元																											
	分装・選別・実測																											
	トレース																											
	遺物撮影																											
	図面整理																											
	写真整理																											
報告書																												
印刷・製本・発送																												

13日、樹木痕の断ち割り調査を行い、断面の図面作成と撮影を行った。

14日、3者による現地掘削完了確認を行った。

15日、午前中に掃除・片付けを行い、正午に空撮を行った。午後からはバックホウ(0.45m相当、平爪、ゴムキャタ)1台を搬入し、埋戻しを行った。埋戻しは16日中に完了した。

16日、プレハブ、倉庫、トイレ、資材、発掘道具等を搬出した。

19日、市教委と北電による完了検査を行った。その後、市教委から北電に調査地の引き渡しが行われ、現地調査が完了した。

(2) 整理作業 (表1)

整理作業は平成29年6月20日～平成30年3月30日にかけて上智の当社及び富山支店(文化財整理室)で行った。

洗浄・注記 豚毛ブラシなどを使用し、遺物を傷つけないように行った。作業は発掘調査の雨天時と6月30日までに完了した。

注記はポスターカラー(白・黒)を使用し、注記後、ニスによって保護を行った。なお、注記は同じ袋に入っているもので接合できるものがある場合、各破片に注記せず、接合したものに1箇所の注記を行っている。作業は7月18日～28日まで行った。



写真4 遺構平面計測



写真5 遺構断面計測



写真6 遺物検討 (越前)



写真7 遺物検討 (備前)

接合・復元 復元は石膏を使用し、実測可能な段階に留めた。作業は7月下旬～9月中旬まで行った。

分類・選別・実測 遺物を焼物、石製品、木製品、金属製品、骨の種類に分け、次に種類ごとに遺構内と遺構外、さらに遺構内は遺構毎に、遺構外は層位ごとに分類した。最後に遺物台帳を作成した。実測対象遺物を選別し、観察表を作成した。実測は手測りによって行った。分類・選別は9月中旬まで、実測は9月中旬～12月下旬まで行った。

トレース 実測図をフォトショップ CS6(adobe)によってスキニング・補正後、イラストレータ CS6(adobe)でデジタルトレースを行った。作業は12月下旬～1月下旬まで行った。

図面・写真整理 平面図は発掘調査時にその都度CADソフトで編集を行った。合わせて、遺構番号の整理を行い、遺構台帳を作成した。

断面図は手図面を整理し、図面台帳にまとめた。平面図と断面図で整合させ、修正を行った後、手図面をスキャンしデジタル化した。その後、フォトショップでデジタル画像を補正した。その後、イラストレータに変換し、トレースを行った。作業は11月末まで行った。

写真はデジタル画像を日付ごとにフォルダに分け、項目ごとにフォルダに再整理した。その後、写真台帳と写真アルバムを作成した。

遺物撮影 1月中旬～2月中旬に、上智富山支店において行った。

執筆・編集 報告書の編集は、インデザイン CS6(adobe)で行った。12月中に前工程で作成した遺構図・遺物実測図・写真を編集し、遺構図版・写真図版を作成した。

報告書の編集と本文執筆は順次行っており、2月末までに校了とした。その間、北電・市教委と校正を3回程度行った。

印刷・製本・発送 3月から300部の印刷・製本を行い、3月20日に本書を発行した。300部中200部を全国の関係機関へ発送した。

遺物検討 越中瀬戸と瀬戸美濃の判別のため、8月17日に三浦知徳氏(上市町)、9月13日に藤澤良祐氏(愛知学院大学教授)よりご教示を頂いた。

越前については、10月11日に木村孝一郎氏(一乗谷朝倉氏遺跡資料館)よりご教示頂いた(写真6)。また、木村氏から出土遺物の中に備前が1点含まれていることをご指摘頂いた。

備前については、10月18日に森内修造氏から石井啓氏(備前市埋蔵文化財管理センター)を紹介して頂いた。石井氏から備前系窯(加賀・作見窯、舞鶴・安久窯、豊岡・山本窯、丹波・大部谷窯、柳井・獄山地区)についてご教示頂き、北陸では加賀・作見窯の可能性についてご指摘を頂いた。

11月21日、橋本正博氏(小松市立博物館)のご協力の下、加賀・作見窯の資料を見実させて頂いた(写真7)。

第2章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

増山遺跡は、富山県砺波市増山地区内に所在し(図4)、芹谷野段丘上を北流する和田川左岸に立地する。標高は約49.7m前後である。

和田川は牛岳北麓の井栗谷と大瀬谷を水源として深くえぐり蛇行しながら北流する。両河川は丘陵から段丘に出た天狗山北麓の字芹谷・池原・頼成新付近で合流し、ここからは丘陵と段丘の境を大きく蛇行する。合流地点には延喜式内社に比定される藪波神社が位置する。本遺跡は、和田川が合流して段丘上を大きく蛇行して形成された舌状の先端部に立地する。

本遺跡の立地する段丘面は西側に段丘崖があり、段

丘下は砺波平野が広がる。一方東側は和田川が形成した段丘崖があり、向い側の丘陵上には増山城が立地する。和田川は段丘と丘陵の境を大きく蛇行し、櫛田神社を横切って射水平野へ北流する。現在は大門大橋付近で庄川に合流して富山湾に注いでいるが、元来庄川は高新大橋付近から北西方向に流れ、小矢部川と合流して富山湾に注いでいたところを、明治期に高新大橋付近で北方向に流れを変えて現在に至っている。また、現在の富山新港は放生津潟を埋め立て、砂州を新湊大橋部分で分断しているため、現在は当時の風景と大きく異なっている。

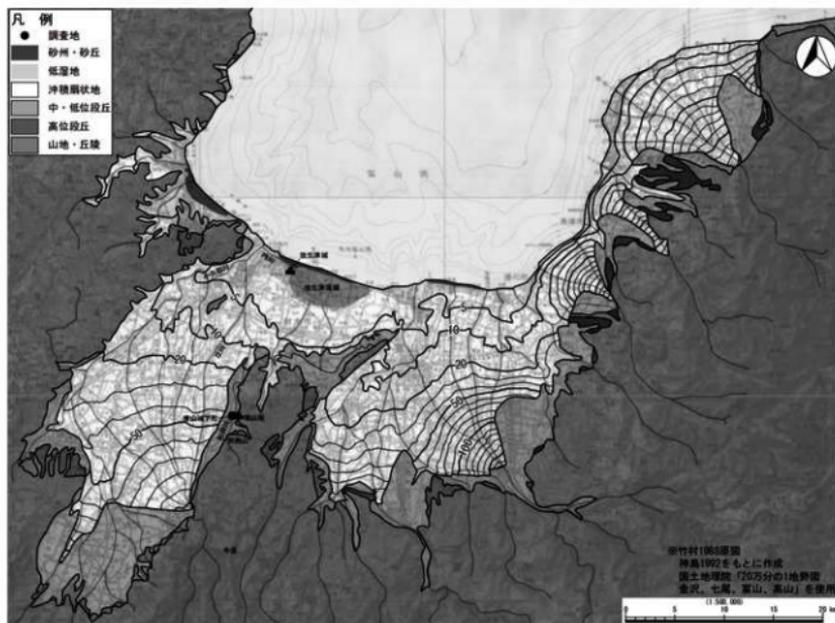


図4 地形・地質図

伝承では増山城麓の和田川に船着場があり、神保氏が和田川を増山城から放生津城との舟運としていたといふ。当時の風景を復元すると、図5のとおりとなる。

以上から、増山城及び城下町は丘陵と段丘と段丘崖を利用した要害の地である。

本遺跡の立地する段丘は砂岩を基盤層とし、本調査区では1面の検出面から約50cm下がった地点までを砂質シルト、約50～130cm地点を粘質シルト、130cm以下を堅緻なシルト(砂岩が風化した層カ)、間に砂礫層が堆積する。詳細は第3章において説明する。

2 歴史的環境

増山遺跡は縄文時代・古代・中世・近世の複合遺跡として周知されている。縄文時代と古代については集落の存在が明らかにされていないが、古代では須恵器の窯跡が北西部の斜面と増山城のある丘陵に分布する。中世から近世については亀山城を含めた増山城に関連する遺跡である。今回の調査は城下町の一端を明らかにできた。

その中で、本節では斧谷野段丘、丘陵、庄川右岸扇状地の地形ごとの遺跡について旧石器時代から近世について概観し(図5・表2)、また、増山城及び城下町については歴史的背景(表3)と合わせてみていくこととする。

図5は庄川右岸から丘陵までの遺跡分布図である。以下では旧石器時代から順に説明する。

旧石器時代 丘陵(86・87・137)と段丘(4)の4遺跡確認され、扇状地では現在のところ未確認である。

縄文時代 丘陵12遺跡、段丘19遺跡、扇状地8遺跡の全域に分布し、合計39遺跡確認されている。

弥生時代 丘陵(2)と扇状地(66)の2遺跡のみ確認され、丘陵では現在のところ未確認である。

古墳時代 段丘(5・38)と扇状地(56・57)の4遺跡のみ確認され、段丘では現在のところ未確認である。

古代 遺跡の数は古代以降になると、大きく増加し、古代では83遺跡と最も多くなる。それには扇状地

表2 地形と時代別の遺跡数

時代	段丘	丘陵	扇状地
旧石器	1	4	0
縄文	19	12	8
弥生	0	1	1
古墳	2	0	2
古代	15	48	20
中世	15	15	30
近世	11	3	3

に荘園の出現と、それに伴って須恵器と鉄製品の窯跡が営まれたことと関係する。増山遺跡内には、亀田窯(6)と妙覚寺坂窯(8)が分布し、増山城域やその周辺において多数の須恵器窯が確認されている(増山支群²)。このことから、増山遺跡には窯を営んだ工人が存在した可能性も推察される。また、増山支群の南には、福山支群が分布する。安川天皇窟(7³)と福山窯(34)は発掘調査が行われ、8世紀中葉と推定される。福山支群は概ね8世紀代、増山支群は概ね9世紀代であることから、福山支群から増山支群へ窯が移行したと推察される。このことは扇状地の集落が徳万遺跡(57)と徳万頼成遺跡(56)を境に南北に2分されることとも一致する。扇状地の集落は荘園の中心に当たり管理していたと考えられ、段丘と丘陵は工人集落や生産地となっていたのであろう。

中世 遺跡数は合計60遺跡で、古代に比べると減少するが、扇状地において半数の遺跡が分布する。その中で、城(2・135)と塚(13・20・24・25・31・48・63・67・72)は室町から戦国期の遺跡として注目される。増山城及び城下町の歴史については表3にまとめた。表3では増山周辺が何度も戦場になっていることが分かり、その痕跡の一つが塚となって現在に残る。

表3では増山城及び城下町について主要な出来事を段階にまとめた。

2 片山博道 2015 「越中における須恵器生産の研究」『大境』第34号 富山考古学会

3 砺波市教育委員会 2005 『安川天皇窟発掘調査報告』

4 砺波市編纂委員会・砺波市文化財審議委員会 1962 『砺波市福山(徳万赤坂)須恵器窯発掘調査報告』

1 砺波市地方資料センター 1994 『富山県の地名』日本歴史地名大系第16巻 (株) 平凡社

【段丘】

- 1 増山遺跡 縄前・中・後、奈、平、中、近
- 2 増山新亀山遺跡 中
- 4 高尾臺1号遺跡 旧石、縄前・中、奈、近
- 5 高尾島宮遺跡 縄、古墳、奈、近
- 6 増山島田遺跡 古代、近
- 7 増山西遺跡 古代、中、近
- 8 増山妙覚寺塚遺跡 古代
- 9 宮新北島2遺跡 縄、中
- 10 宮新遺跡 古代
- 11 宮新北島1遺跡 縄南・中・晩、奈、平、中、近
- 12 大谷島遺跡 縄中・晩、古代
- 13 光明宮遺跡 中
- 14 龍雨寺遺跡 縄中、平安
- 15 鹿野寺境内遺跡 中
- 16 上和田遺跡 縄中・晩、近
- 17 宮跡新天地遺跡 縄
- 18 橘成新遺跡 縄
- 19 岸谷北地寺 縄中
- 20 稲塚 中
- 21 坂野遺跡 中
- 22 正権寺南遺跡 古代
- 23 正権寺南遺跡 古代
- 24 長尾為兼塚 中
- 25 長尾能登塚 中
- 26 岸谷下大田遺跡 中、近
- 27 柳野野神社東遺跡 縄
- 28 三合新岸谷遺跡 縄、中、近
- 29 徳万新遺跡 古代

- 30 三合新遺跡 縄、近
- 31 鹿野塚 近
- 32 三合新遺跡 中
- 33 三合新9号鳥居遺跡 古代、中
- 35 稲山遺跡 古代、中
- 36 安川天皇A遺跡 縄
- 37 安川天皇A遺跡 縄
- 38 安川天皇B遺跡 縄、古墳
- 39 安川天皇C遺跡 縄

- 83 白富宮遺跡 中
- 84 白富宮 中
- 85 千本寺遺跡 中、近
- 86 岸谷遺跡 旧石、縄、古代
- 87 池原遺跡 旧石、縄、古代
- 88 稲成入道跡 縄
- 89 稲成入道跡 縄、古代、中
- 90 稲成入道跡 旧石
- 91 稲成入道跡 縄
- 92 坪野遺跡 中、平安
- 93 藤原丸山遺跡 平安
- 94 藤原丸山塚 室町
- 95 吉谷遺跡 縄晩、近
- 96 漢跡末神A遺跡 平安
- 97 漢跡末神遺跡 古代
- 98 池原向島遺跡 平安
- 99 金クソ山遺跡 古代
- 100 金クソ山西遺跡 古代
- 101 増山赤坂遺跡 古代
- 102 正権寺前山遺跡 古代
- 103 増山四手寺遺跡 古代
- 104 増山石坂遺跡 古代
- 105 正権寺後鳥居遺跡 古代
- 106 増山小塚遺跡 古代
- 76 稲山跡1遺跡 縄
- 77 稲山跡2遺跡 縄
- 78 稲山跡3遺跡 縄
- 79 稲山跡4遺跡 縄
- 80 生玉明神遺跡 中
- 81 生玉明神北遺跡 中
- 82 金尾稲山遺跡 中

- 111 増山外道遺山原跡 古代
- 112 東塚跡野山遺跡 平安
- 113 増山北平遺跡 古代
- 114 増山岩坂遺跡 古代
- 115 西谷No.10遺跡 古代
- 116 西谷No.11遺跡 古代
- 117 西谷No.12遺跡 古代
- 118 西谷No.6遺跡 古代
- 119 西谷No.7遺跡 古代
- 120 西谷No.8遺跡 古代
- 121 西谷No.4遺跡 古代
- 122 西谷No.5遺跡 平安
- 123 西谷No.3遺跡 古代
- 124 西谷A遺跡 古代
- 126 西谷No.2遺跡 古代
- 127 玉宮野遺跡 中
- 128 大上谷遺跡 縄中
- 129 立神上塚遺跡 古代
- 130 立神上塚遺跡 古代
- 131 立神宮跡 古代
- 132 立神宮跡 古代
- 133 立神上塚遺跡 古代
- 134 立神上塚遺跡 古代
- 135 安川城跡 中世
- 136 平等前田遺跡 奈、平、鎌倉、室町
- 137 増山外貝塚山遺跡 旧石

【丘陵】

- 2 増山城跡 縄、奈、古、代、中、近
- 34 稲山遺跡 古代
- 72 三合跡塚 中
- 73 安川天皇1遺跡 古代
- 74 安川天皇1遺跡 古代
- 75 稲山大塚遺跡 縄
- 76 稲山小塚遺跡 古代
- 77 稲山跡1遺跡 縄
- 78 稲山跡2遺跡 縄
- 79 稲山跡3遺跡 縄
- 80 生玉明神遺跡 中
- 81 生玉明神北遺跡 中
- 82 金尾稲山遺跡 中

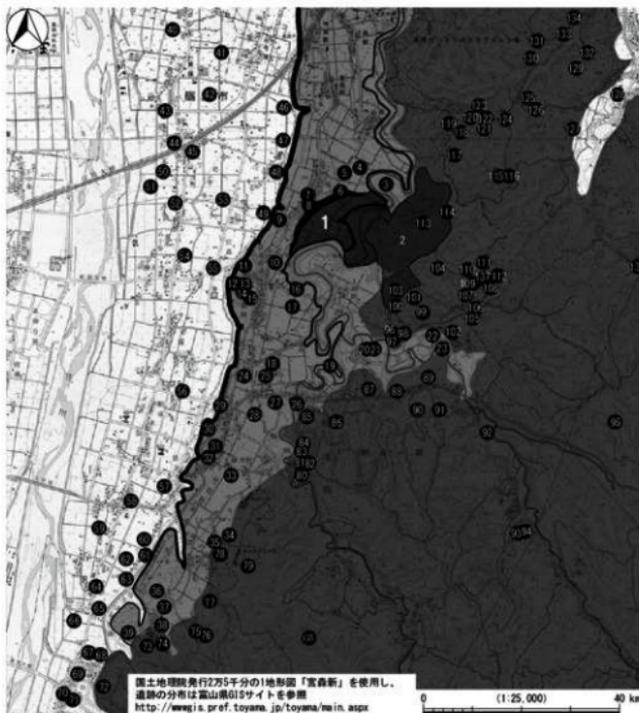


図5 調査地周辺の遺跡分布図

表3 増山城と城下町の歴史年表

段階	西暦	和暦	出来事	城主	城下町
1	1362	貞治元	和田合戦。越中守護桃井直常と幕府方斯波氏との3度にわたる合戦。斯波氏が桃井氏から和田城(富山城)奪う。	斯波氏	
2	1506	永正三	神保長職・康宗、放生津城の支城として和田城を再構築。	神保氏	
	1520	永正十七	芹谷合戦。神保康宗、一向一揆方と敵対。この時、守護方を支援した越後守護代長尾能景討死。		
3			新庄城の戦い。神保康宗、長尾能景に敗れ、自害。	不明	
4	1543	天文十二	神保長職、神保氏を再興し、富山城を築城。同じ頃、増山城は富山城の支城として築城。他に、守山城、火宮城築城。	神保氏	
	1559	永祿二	長尾景虎、神保長職の富山城を攻撃。長職は富山城を捨て、増山城へ逃走。景虎は増山城を攻撃し、長職は逃走。		
5	1562	永祿五	景虎の越後勢は長職の奥穂山城を攻撃し、長職が降伏。	一向宗	
	1568	永祿十一	長職、上杉方となり、増山城を本城とする。		
6	1572	元龜三	長職没す。増山城は一向一揆方によって固められる。	上杉氏	
	1576	天正四	上杉謙信、一向一揆方の増山城を攻め、吉江宗信らが配置される。これより、上杉氏の支城となる。		
7	1578	天正六	謙信没す。	佐々氏 土壘構築か	
	1581	天正九	上杉方、増山城を焼き払い、退去。		
8	1583	天正十一	佐々成政、越中平定。増山城を整備・拡充。孫次山岩等城郭豊大。	前田氏	城下町整備・拡充か。寺院・町屋
	1585	天正十三	成政、羽張秀吉に降伏。増山城、前田利家の城下中川光重が入城。		
9	1611	慶長十六	光重、遁走。	水田	城下町の寺院、富山城下町へ移転。増山城廃城後、増山城と城下町一帯は増山村となる。
	1614	慶長十九	光重没す。増山城廃城か。		
10	1615	元和元	一国一城令。増山城廃城。	水田	
	1663	寛文三	芹谷野用水が開通。用水の両側に家が並ぶ。増山村長は用水沿いへ移転。		
10	1664	寛文四	芹谷野用水沿いの街道に増山新村が村立。		
	1968	昭和四三	和田川にダムと庄東第二発電所建設。城下町の一部がダム湖底に沈む。		

※砺波市教育委員会 2009『新1砺波市』「5周年記念事業 増山城跡フォーラム よみがえれ戦国増山城」

1～3段階は増山城と直接関係する確たる根拠はなく、不明瞭な部分が多い時期である。

増山城は4段階以降明確となり、1543(天文十二)年、神保長職が富山城の支城として増山城を築城する。これ以降、4段階の城主は神保氏、5段階が一向宗、6段階が上杉氏、7段階が佐々氏、8段階が前田氏で、9-10期には廃城となる。このように、増山城は約50年間の短期間にめまぐるしく城主が入れ替わる。城下町がこの中で、いつ形成されたのかは不明である。

増山城の歴史は神保氏・一向宗・上杉氏・佐々氏・前田氏と深く関わっており、県内においても増山城と同様の歴史の中で動いており、それらをまとめると以下のとおりである。①地侍同士の戦い、②一向宗との戦い、③上杉氏との戦い、④佐々氏との戦い、⑤前田氏との戦いの構図は県内の大きな流れである。

近世 段丘11遺跡、丘陵3遺跡、扇状地3遺跡の合計17遺跡と大幅に減少するが、近世は遺跡が現代につながっていることが多く、このため少なくなっ

ていると考えられる。

増山城及び城下町では1615(元和元)年の一国一城令まで、前田氏の城として中川光重氏が居城していた。廃城後は増山村となり、1663(寛文3)年に芹谷野用水が貫通すると、増山村は用水沿いに移動し、増山新村が村立され、現在の風景となる。

第3章 調査の成果

1 調査区及びグリッドの設定

調査区は鉄塔建替予定地 259.04㎡と基準点の座標データを北電から提供を受け、このデータを基に調査区の設定を行った。調査区は基準点の 62A と 62B の 2 点を使用した(図 2)。これら 2 点の他に調査の際使用する仮 BM1 点を旧鉄塔の下に設置した。これは遺構の断面図を作成する際の水準点である。

グリッドは、増山遺跡全体に対して大・中・小グリッドをそれぞれ設定した(図 6)。座標は X・Y で、X 座標は南北方向に南から北へ、Y 座標は東西方向に西から東へ数値が大きくなる。

大グリッドは 100m 四方を 1 区画とした。中グリッドは大グリッドを 100 分割し、10m 四方を 1 区画とし

た。小グリッドは中グリッドを 4 分割し、5m 四方を 1 区画とした。

本調査では、小グリッドを使用し、X 軸をアルファベット、Y 軸を算用数字で表示した。グリッドの基準は北西端とし、X 軸は北から南へ A～F、Y 軸は西から東へ 1～6 とした。グリッドは X を優先し、XY で表示する(例 A-1)。

本調査では、任意のグリッドを使用した。今後の調査を想定し、大グリッドと中グリッドの設定を行った。また、増山城及び城下町の調査が進み、城下町域が明確になることを期待する。

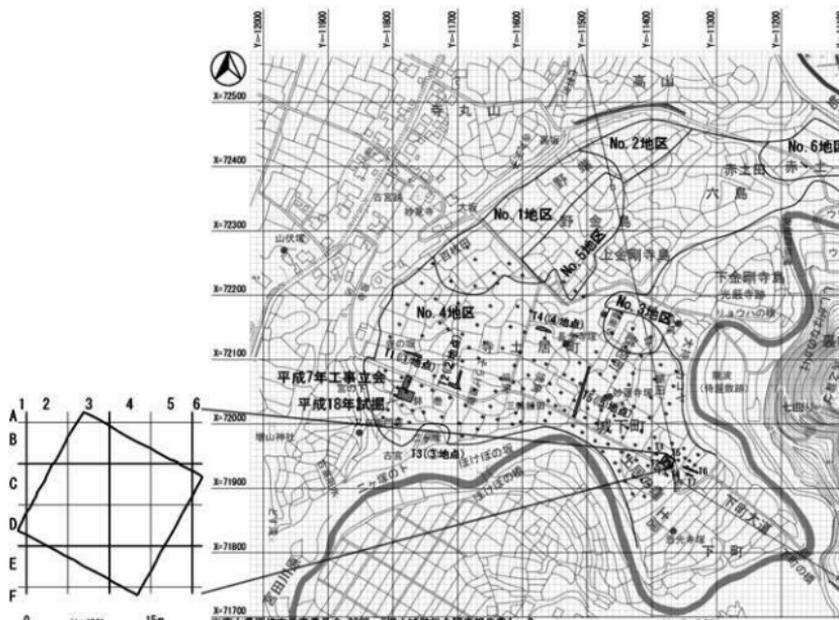


図 6 調査区及びグリッド設定図

2 基本層序

基本層序は図7・8、写真図版3に示したとおり、大きく4層に分けることができる。図7には基本層序の概念図と土層説明を記した。土層説明は図8の調査区土層断面図に対応する。

I層 昭和50年代の圃場整備以降の耕作土と床土。耕作土をI a層、床土をI b層と細分できる。平均厚は、I a層が15cm、I b層が5cmである。

II層 城下町に伴う整地層。II a～II l層の12層に細分できる。黒褐色シルトを主体とし、粗粒砂・黄褐色粘質シルトブロック・炭化物粒・土器片等が多量混入する。整地層は場所によって異なり、併行関係を求めるのは困難を要するが、遺構の検出面を手掛かりとして4面確認でき、整地層を1～4の4つに分けた。

整地層1はII a・II b層である。耕作の影響を強く受け、また圃場整備により削平を受けている。整地層上面からの遺構は確認できず、17世紀中葉以降に堆積したと推測される。

整地層2はII c・II d・II l層(検出面1)である。II c層は調査区北東側のみに確認できるが、II d層は調査区の整地範囲内には概ね均一に確認できる。遺構は調査区断面に少数確認でき、SP303では礎石が掘方より露出することを特徴とする。時期は概ね17世紀前葉と推測される。

整地層3はII j・II h層(検出面2)である。調査区西壁のみ確認でき、部分的な整地層と考えられる。よって、整地層4との差もほとんどないと考えている。SP291の礎石は浅く掘削した底面に据えることを特徴とする。時期は16世紀末葉と推測される。

整地層4はII f・II e・II k・II g・II i(検出面3)である。II e層とII k層は部分的な整地層で、II f・II g・II i層が概ね均一に敷かれている。遺構は断

面で確認できる範囲において礎石を確認できず、礎石を伴わない掘立柱を特徴とする。時期は16世紀後葉～末葉と推測される。

検出面4は整地層を敷かず、III層またはIV層に直に掘り込まれた遺構群である。ただし、調査区南東側の整地層を確認できない部分は検討を要する。城下町形成初期の遺構と考えられ、時期は16世紀中葉と推測される。

次に、整地層を一部平面的に捉えることができたので、SX028と関連整地層について説明する。

I a	耕作土
I b	耕作土
II a	I層
II b	
II c	II層
II d	
II e	III層
II f	
II g	IV層
II h	
II i	遺構層
II j	
II k	遺構層
II l	
III a	遺構層
III b	
III c	遺構層
III d	
III e	遺構層
III f	
III g	遺構層
III h	
III i	遺構層
III j	
III k	遺構層
III l	
III m	遺構層
III n	
III o	遺構層
III p	
III q	遺構層
III r	
III s	遺構層
III t	
III u	遺構層
III v	
III w	遺構層
III x	
III y	遺構層
III z	
III aa	遺構層
III ab	
III ac	遺構層
III ad	
III ae	遺構層
III af	
III ag	遺構層
III ah	
III ai	遺構層
III aj	
III ak	遺構層
III al	
III am	遺構層
III an	
III ao	遺構層
III ap	
III aq	遺構層
III ar	
III as	遺構層
III at	
III au	遺構層
III av	
III aw	遺構層
III ax	
III ay	遺構層
III az	
III ba	遺構層
III bb	
III bc	遺構層
III bd	
III be	遺構層
III bf	
III bg	遺構層
III bh	
III bi	遺構層
III bj	
III bk	遺構層
III bl	
III bm	遺構層
III bn	
III bo	遺構層
III bp	
III bq	遺構層
III br	
III bs	遺構層
III bt	
III bu	遺構層
III bv	
III bw	遺構層
III bx	
III by	遺構層
III bz	
III ca	遺構層
III cb	
III cc	遺構層
III cd	
III ce	遺構層
III cf	
III cg	遺構層
III ch	
III ci	遺構層
III cj	
III ck	遺構層
III cl	
III cm	遺構層
III cn	
III co	遺構層
III cp	
III cq	遺構層
III cr	
III cs	遺構層
III ct	
III cu	遺構層
III cv	
III cw	遺構層
III cx	
III cy	遺構層
III cz	
III da	遺構層
III db	
III dc	遺構層
III dd	
III de	遺構層
III df	
III dg	遺構層
III dh	
III di	遺構層
III dj	
III dk	遺構層
III dl	
III dm	遺構層
III dn	
III do	遺構層
III dp	
III dq	遺構層
III dr	
III ds	遺構層
III dt	
III du	遺構層
III dv	
III dw	遺構層
III dx	
III dy	遺構層
III dz	
III ea	遺構層
III eb	
III ec	遺構層
III ed	
III ee	遺構層
III ef	
III eg	遺構層
III eh	
III ei	遺構層
III ej	
III ek	遺構層
III el	
III em	遺構層
III en	
III eo	遺構層
III ep	
III eq	遺構層
III er	
III es	遺構層
III et	
III eu	遺構層
III ev	
III ew	遺構層
III ex	
III ey	遺構層
III ez	
III fa	遺構層
III fb	
III fc	遺構層
III fd	
III fe	遺構層
III ff	
III fg	遺構層
III fh	
III fi	遺構層
III fj	
III fk	遺構層
III fl	
III fm	遺構層
III fn	
III fo	遺構層
III fp	
III fq	遺構層
III fr	
III fs	遺構層
III ft	
III fu	遺構層
III fv	
III fw	遺構層
III fx	
III fy	遺構層
III fz	
III ga	遺構層
III gb	
III gc	遺構層
III gd	
III ge	遺構層
III gf	
III gg	遺構層
III gh	
III gi	遺構層
III gj	
III gk	遺構層
III gl	
III gm	遺構層
III gn	
III go	遺構層
III gp	
III gq	遺構層
III gr	
III gs	遺構層
III gt	
III gu	遺構層
III gv	
III gw	遺構層
III gx	
III gy	遺構層
III gz	
III ha	遺構層
III hb	
III hc	遺構層
III hd	
III he	遺構層
III hf	
III hg	遺構層
III hh	
III hi	遺構層
III hj	
III hk	遺構層
III hl	
III hm	遺構層
III hn	
III ho	遺構層
III hp	
III hq	遺構層
III hr	
III hs	遺構層
III ht	
III hu	遺構層
III hv	
III hw	遺構層
III hx	
III hy	遺構層
III hz	
III ia	遺構層
III ib	
III ic	遺構層
III id	
III ie	遺構層
III if	
III ig	遺構層
III ih	
III ii	遺構層
III ij	
III ik	遺構層
III il	
III im	遺構層
III in	
III io	遺構層
III ip	
III iq	遺構層
III ir	
III is	遺構層
III it	
III iu	遺構層
III iv	
III iw	遺構層
III ix	
III iy	遺構層
III iz	
III ja	遺構層
III jb	
III jc	遺構層
III jd	
III je	遺構層
III jf	
III jg	遺構層
III jh	
III ji	遺構層
III jj	
III jk	遺構層
III jl	
III jm	遺構層
III jn	
III jo	遺構層
III jp	
III jq	遺構層
III jr	
III js	遺構層
III jt	
III ju	遺構層
III jv	
III jw	遺構層
III jx	
III jy	遺構層
III jz	
III ka	遺構層
III kb	
III kc	遺構層
III kd	
III ke	遺構層
III kf	
III kg	遺構層
III kh	
III ki	遺構層
III kj	
III km	遺構層
III kn	
III ko	遺構層
III kp	
III kq	遺構層
III kr	
III ks	遺構層
III kt	
III ku	遺構層
III kv	
III kw	遺構層
III kx	
III ky	遺構層
III kz	
III la	遺構層
III lb	
III lc	遺構層
III ld	
III le	遺構層
III lf	
III lg	遺構層
III lh	
III li	遺構層
III lj	
III lk	遺構層
III ll	
III lm	遺構層
III ln	
III lo	遺構層
III lp	
III lq	遺構層
III lr	
III ls	遺構層
III lt	
III lu	遺構層
III lv	
III lw	遺構層
III lx	
III ly	遺構層
III lz	
III ma	遺構層
III mb	
III mc	遺構層
III md	
III me	遺構層
III mf	
III mg	遺構層
III mh	
III mi	遺構層
III mj	
III mk	遺構層
III ml	
III mm	遺構層
III mn	
III mo	遺構層
III mp	
III mq	遺構層
III mr	
III ms	遺構層
III mt	
III mu	遺構層
III mv	
III mw	遺構層
III mx	
III my	遺構層
III mz	
III na	遺構層
III nb	
III nc	遺構層
III nd	
III ne	遺構層
III nf	
III ng	遺構層
III nh	
III ni	遺構層
III nj	
III nk	遺構層
III nl	
III nm	遺構層
III nn	
III no	遺構層
III np	
III nq	遺構層
III nr	
III ns	遺構層
III nt	
III nu	遺構層
III nv	
III nw	遺構層
III nx	
III ny	遺構層
III nz	
III oa	遺構層
III ob	
III oc	遺構層
III od	
III oe	遺構層
III of	
III og	遺構層
III oh	
III oi	遺構層
III oj	
III ok	遺構層
III ol	
III om	遺構層
III on	
III oo	遺構層
III op	
III oq	遺構層
III or	
III os	遺構層
III ot	
III ou	遺構層
III ov	
III ow	遺構層
III ox	
III oy	遺構層
III oz	
III pa	遺構層
III pb	
III pc	遺構層
III pd	
III pe	遺構層
III pf	
III pg	遺構層
III ph	
III pi	遺構層
III pj	
III pk	遺構層
III pl	
III pm	遺構層
III pn	
III po	遺構層
III pp	
III pq	遺構層
III pr	
III ps	遺構層
III pt	
III pu	遺構層
III pv	
III pw	遺構層
III px	
III py	遺構層
III pz	
III qa	遺構層
III qb	
III qc	遺構層
III qd	
III qe	遺構層
III qf	
III qg	遺構層
III qh	
III qi	遺構層
III qj	
III qk	遺構層
III ql	
III qm	遺構層
III qn	
III qo	遺構層
III qp	
III qq	遺構層
III qr	
III qs	遺構層
III qt	
III qu	遺構層
III qv	
III qw	遺構層
III qx	
III qy	遺構層
III qz	
III ra	遺構層
III rb	
III rc	遺構層
III rd	
III re	遺構層
III rf	
III rg	遺構層
III rh	
III ri	遺構層
III rj	
III rk	遺構層
III rl	
III rm	遺構層
III rn	
III ro	遺構層
III rp	
III rq	遺構層
III rr	
III rs	遺構層
III rt	
III ru	遺構層
III rv	
III rw	遺構層
III rx	
III ry	遺構層
III rz	
III sa	遺構層
III sb	
III sc	遺構層
III sd	
III se	遺構層
III sf	
III sg	遺構層
III sh	
III si	遺構層
III sj	
III sk	遺構層
III sl	
III sm	遺構層
III sn	
III so	遺構層
III sp	
III sq	遺構層
III sr	
III ss	遺構層
III st	
III su	遺構層
III sv	
III sw	遺構層
III sx	
III sy	遺構層
III sz	
III ta	遺構層
III tb	
III tc	遺構層
III td	
III te	遺構層
III tf	
III tg	遺構層
III th	
III ti	遺構層
III tj	
III tk	遺構層
III tl	
III tm	遺構層
III tn	
III to	遺構層
III tp	
III tq	遺構層
III tr	
III ts	遺構層
III tt	
III tu	遺構層
III tv	
III tw	遺構層
III tx	
III ty	遺構層
III tz	
III ua	遺構層
III ub	
III uc	遺構層
III ud	
III ue	遺構層
III uf	
III ug	遺構層
III uh	
III ui	遺構層
III uj	
III uk	遺構層
III ul	
III um	遺構層
III un	
III uo	遺構層
III up	
III uq	遺構層
III ur	
III us	遺構層
III ut	
III uu	遺構層
III uv	
III uw	遺構層
III ux	
III uy	遺構層
III uz	
III va	遺構層
III vb	
III vc	遺構層
III vd	
III ve	遺構層
III vf	
III vg	遺構層
III vh	
III vi	遺構層
III vj	
III vk	遺構層
III vl	
III vm	遺構層
III vn	
III vo	遺構層
III vp	
III vq	遺構層
III vr	
III vs	遺構層
III vt	
III vu	遺構層
III vv	
III vw	遺構層
III vx	
III vy	遺構層
III vz	
III wa	遺構層
III wb	
III wc	遺構層
III wd	
III we	遺構層
III wf	
III wg	遺構層
III wh	
III wi	遺構層
III wj	
III wk	遺構層
III wl	
III wm	遺構層
III wn	
III wo	遺構層
III wp	
III wq	遺構層
III wr	
III ws	遺構層
III wt	
III wu	遺構層
III wv	
III ww	遺構層
III wx	
III wy	遺構層
III wz	
III xa	遺構層
III xb	
III xc	遺構層
III xd	
III xe	遺構層
III	

SX028と関連整地層(図9・写真図版4)

調査区北西角において検出された。検出面はⅢ層上面で、上層には10～15cm程度の整地層があり、Ⅲ層まで掘削して、平面形が隅丸方形を呈するSX028を確認した。調査当初には不明遺構としていたが、調査区壁断面を検討した結果、整地層の一部と判断した。SX028のような整地層の掘り込みは、SX028の西隣と調査区北東側に確認できる。このことから、整地層の掘り込みは概ね調査区北半に確認でき、またその範囲は概ねⅢ層の範囲と重なる。

SX028西隣の落ち込みは基本層序Ⅱf・Ⅱg層に対応する。SX028はSD010によって基本層序との対応はできない。調査区北壁を観察すると、SD010の西と東で異なり、西にはⅡf・Ⅱg層が堆積するが、東にはみら

れなくなる。SX028はその境に位置し、Ⅱf・Ⅱg層に対応すると考えられる。また、調査区西壁を観察すると、SP241・242を境として、北と南へⅢ層を掘り込んでいる状況を確認できる。北側の落ち込みはSX028西隣の落ち込みで、南側の落ち込みは別の落ち込みである。

Ⅲ層 主に黒色及び黒褐色粘質シルトで、4層に細分できる。Ⅲa～d層へ色が薄くなるグラデーションを呈する。

Ⅲ層はⅣ層の凹んだ部分に堆積したもので、本調査区では調査区西壁で最も厚く堆積し、北と東ではやや薄くなる。また、本調査区の西側の試掘トレンチ(T1)ではⅢ層が厚く堆積する。このことから、Ⅳ層の凹みは東から西へ傾斜する浅い谷状を呈しており、Ⅲ層はこの浅い谷に堆積したものと考えられる。

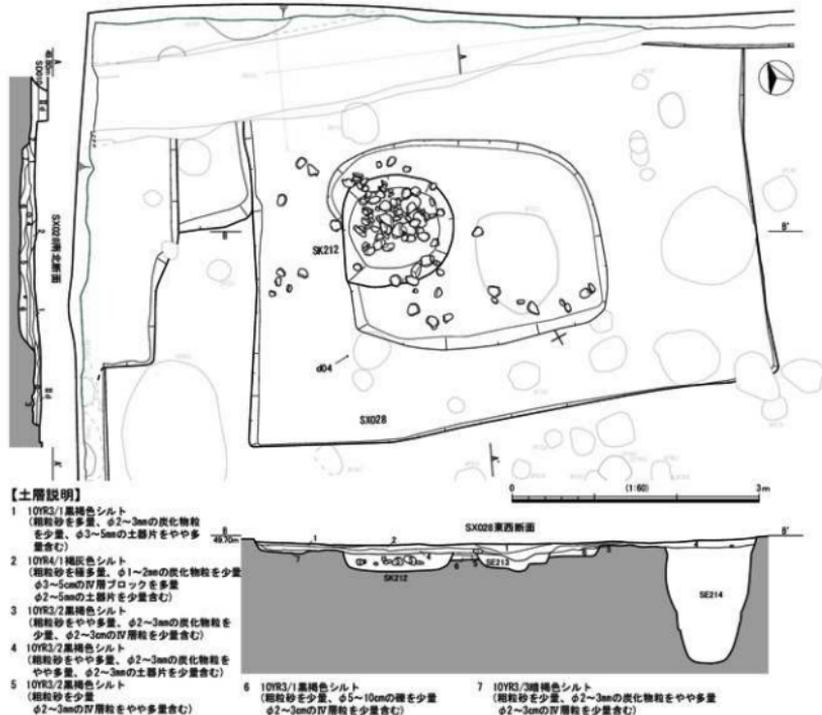


図9 SX028平面・断面図

Ⅲ層にはほとんど含有物がなく、遺物は皆無であった。よって、考古学的手法ではⅢ層がいつどのように形成されたのか解明できないため、試掘トレンチ(T7)からその手掛かりとなる分析を第4章において行っている(第4章1)。

T7では土塁と堀が確認されており、分析試料は土塁底面の薄い黒色層から採取した炭化物である。分析結果の詳細は第4章1を参照されたいが、炭化物を放射性炭素年代測定を行った結果、縄文中期末葉といった結果が得られた。

この結果を考慮すると、土塁底面の黒色層はⅢ層と対応すると考えられ、Ⅲ層の形成時期が縄文中期末葉と推察される。また、浅い谷の底面には樹木痕が多数検出されたことから、Ⅲ層は樹木等の有機物が谷部に堆積し、土壌化したものと推察される。

Ⅳ層 芹谷野段丘を形成する土層である。シルト・粘質シルト・砂質シルト・細粒砂・粗粒砂・砂礫等が互層状に堆積する。本調査区ではⅣa～Ⅳm層の13層に細分できる。

本調査区では井戸の底面が最深部となり、井戸側面の観察から、調査区中央付近の土層はⅣa層、Ⅳb層、Ⅳf層、Ⅳl層、Ⅳm層と確認できる。和田川の段丘崖ではⅣl層またはⅣm層が露出しており、Ⅳl層ないしⅣm層は芹谷野段丘の基盤層と考えられる。以上から、図7の模式図のとおりまとめることができる。

本調査区では南西から北東方向の谷状地形のⅣ層が存在し、その谷の中にⅢ層が堆積した。本調査区では北半にⅢ層が堆積し、調査区西側中央付近で最も厚く堆積する。

整地層は調査区南半において薄く、北半において厚く堆積する。これは既述したとおり、Ⅱ層とⅢ層の堆積範囲・濃度が概ね一致し、Ⅲ層はしまりが弱く軟弱地盤であったものと考えられる。よって、Ⅲ層部分では方形に浅く掘削し、地盤改良したと推察される。Ⅱa層は薄く、また調査区壁面には確認できない遺構埋土もあることから、Ⅱa層は削平を受け、その上層に1層以上あつたと推察される。

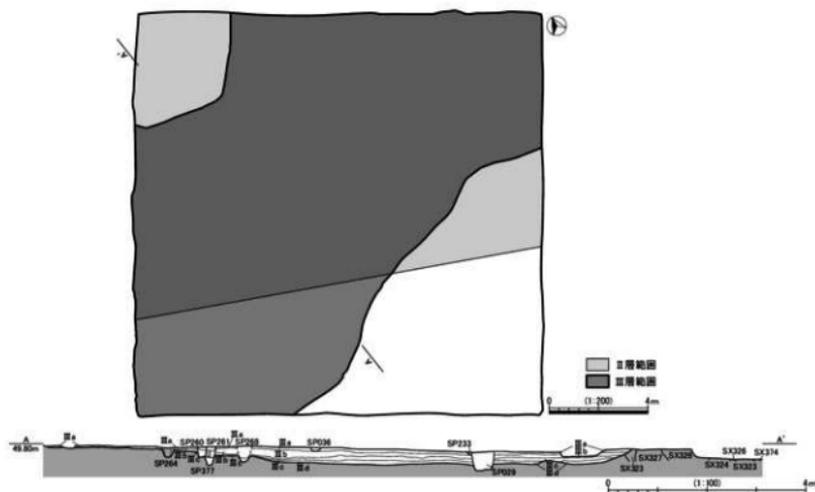


図10 Ⅱ層とⅢ層の分布と土層断面図

3 遺構と遺物

(1) 概要

本節では本調査において検出した遺構と出土した遺物について説明する。

本調査では、16世紀後葉から17世紀前葉の遺構と遺物が確認された。この時期は神保氏、上杉氏、一向宗、佐々氏、前田氏が増山城に関わった時期で、城下町の形成から衰退、村落へと移行していく時期に相当する。本調査区は、南に城への道、東に御土居がある一角に位置する。

遺構 遺構は、16世紀後葉から17世紀前葉の掘立柱建物4棟以上(柱穴338基)・土坑8基・井戸10基の合計356基と整地層、時代不明の樹木痕15基、現代の暗渠1条が確認された(図11、表4～6)。

柱穴は単独のものもあるが、多くは3～4基重複し、少しずつ位置を変えているものと、ほとんど同じ場所につくっているものの2通り確認された。また、井戸は2～3基のまとまりを確認でき、整地層も多数確認されている。これらのことから、建物の建替えと整地を何度も行いながら生活していることが分かる。

当初の井戸は井戸として機能し、廃棄後の埋没過程の分類は4つに分かれる。①栗石伏礫と礎石伏礫、②白色粘質シルトと礫、③礫のみ、④礫なし。これについては礫の用途により異なるが、本報告では礫を井桁の基礎と考える。それには本調査区から検出された井戸の上部が浅くなっていることにある。しかし、①については柱穴の可能性も捨てきれない。

遺物 各遺構や整地層からは14世紀から17世紀前葉の陶磁器(碗・皿・搦鉢・壺・甕等)、土師質土器(搦鉢)、土師器(灯明皿)、石製品(石臼・砥石等)、木製品(漆器、箸、下駄、板、杭等)、鉄製品(和釘・鉢等)、その他種子等、8世紀から9世紀の須恵器(杯)が確認された(表7～11)。

ほとんどが破片であり、全体を復元できるものは少量だが、陶磁器の生産地は越中瀬戸、瀬戸美濃、越前、珠洲、肥前、備前、中国と多くの生産地から本遺跡に搬入されている。各生産地の割合については第5章1

で詳述する。

次に、本報告で使用する用語について説明する。

越中瀬戸焼の“焼”は省略する。以下すべての焼物も同様とする。

瀬戸美濃は瀬戸か美濃かどちらかについて消費地では判別困難なため、瀬戸美濃と呼称する。

越前は陶器のみでなく、越前を模倣した土師質の搦鉢がみられ、本報告の分類では土師質土器とした。越前を模倣した土師質搦鉢については木村孝一郎氏にご指導を頂いた。

肥前は陶器と磁器があり、生産地も広範囲にわたることから肥前系と呼称する。本遺跡では陶器のみで、所謂唐津である。

中国は青磁・白磁・青花がみられる。これらの総称として中国と呼称する。

備前は搦鉢片が1点出土している。この備前は現在の岡山県備前市周辺窯跡の製品ではなく、加賀市作見窯産の搦鉢片の可能性が高いが、これについては石井啓氏と橋本正博氏のご指導を頂き、作見窯の資料は橋本氏と実見して比較した結果、概ね作見窯産と判断できるが、本報告では作見窯に言及せず、備前系と呼称する。

遺物の時期については第5章において編年を行っており、瀬戸美濃を軸として時期を推定している。ここでは各土器・陶磁器の時期について参考文献をあげておく²。

- | | |
|------|---|
| 1 | 上野与一・宮下幸夫 1982 『作見窯について』『研究紀要』第19集 小松市立博物館 |
| 2 | 土器・陶磁器の編年の参考文献は以下のとおりである。
瀬戸美濃 愛知県 2007 『愛知県史 別冊 窯業2 中世・近世 瀬戸系』 |
| 越中瀬戸 | 宮田進一 1997 『越中瀬戸の変遷と分布』『中・近世の北陸-考古学が語る社会史-』 |
| 珠洲 | 珠洲市立珠洲焼資料館 1989 『珠洲の名陶』 |
| 越前 | 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2016 『越前焼総合調査事業報告』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター所報6 陶磁学会10周年記念-』 |
| 土師器 | 宮田進一 1997 『越中国における土師器の編年』『中・近世の北陸-考古学が語る社会史-』 |

その他・時代不明 以前の調査や試掘調査では縄文時代と古代の遺物が確認されているが、今回の調査では古代の須恵器を確認したのみで、縄文時代・古代の遺構と縄文時代の遺物は確認できなかった。ただし、下層調査では浅い谷地形と樹木の痕跡を確認し、調査区周辺が森林であったと想像される。

以上から、本調査は戦国期から近世への移行期に形成・衰退・村落化した城下町の貴重な調査で、今回は狭い調査区であったものの、約400基近くの遺構が検出されたことはそのことをよく物語っており、その重要性が指摘される。

以下では、各遺構の調査成果を説明し、最後に遺構一覧表及び遺物観察表を掲載する。

(2) 上層

上層はⅡ層及びⅢ層において検出された遺構で、掘立柱建物(柱穴群)・井戸・土坑について説明する(図12)。図12をみると、調査区北東側では柱穴の規模が大きく、多数重複する。これに対して、南西側では柱穴の規模が小さく、単独の柱穴が検出される傾向にある。このことは整地層の分布範囲(図10)とも一致しており、建物と整地層の関連性を窺い知ることができる。井戸は概ね4箇所にとまり、次に説明する区画の中におさまる。なお、調査区南端の掘乱は現道路と概ね平行し、城下町から城への道跡とも考えられるが、ここでは耕作痕等の掘乱に伴ってコンクリ片やタイル等近代以降のものが含まれていたこともあり、本調査では掘乱と判断したが、城下町から城への道跡の可能性は捨てきれないので、今後の調査成果を待ちたい。

(A) 掘立柱建物

建物の配置は、柱穴と井戸のまとまりによって4つに分かれる(図12)。図12では調査区を4つの区画に分け、区画1～4とした。区画は柱穴のまとまりを示しており、必ずしも敷地を示していないことを断っておく。しかし、多少の誤差はあるものの、概ね一致していると想定している。よって、掘立柱建物の柱穴以外の柱穴から出土した遺物に関しても区画内出土遺物として区画の時期を知る参考遺物とする。



図12 建物配置図

区画1・SB380(図13、写真図版5・17)

建物が1棟確認できる。SB380は北辺2間、西辺3間、東辺4間、南辺2間で、主柱は各4間とSP037・SP174・SP155、東柱はSP283・SP036・SP003・SP163・SP271である。各四間の主柱は北西隅4基、その他2基の重複が確認でき、2～4回の建替えが推測される。

間取りは北と南に分かれ、北は東柱で支えていることから板間、南は土間と考えられる。土間にはSP048・181とSE047が確認できる。SP048・181は柱穴としているが、土間に設置された施設の可能性もある。SE047は建物内井戸の可能性もあるが、建物との時期差が不明なため、可能性を指摘するに留める。

出土遺物は、SP020から石製品1点(4)である。

石製品 4は砥石と考えられる。表面は研磨痕が多数みられる。砥面は3面である。裏面は割れたままである。石は鉄分が多いため赤褐色で、他の石より重い。遺構の時期は、SP160がSE175に切られていることから、16世紀後葉と推定される。

区画2・SB381・382(図14、写真図版6・17)

比較的大型の柱穴が多数重複し、SP050、SP200の1群は8基、SP178の1群は8基、SP030の1群は3基、SP007の1群は5群である。ここでの建物は東辺のみ確認できているにすぎず、全体は調査区西側にある。

建物は2棟以上が重複する。SB381はSP050・SP200

の1群・SP178の1群・SP030の1群の3間、北辺はSP242の1群、南辺はSP049付近を通る。SP050とSP049は底面に礎石状の礎があり、堆積状況では明確にできなかったが、いくつかの柱穴が重複していると考えられることから柱穴と判断した。

SB382はSP200の1群・SP178の1群・SP017・SP005・SP007の1群の4間、北辺は西壁面のSP290(SP291)、南辺はSP292(SP180)の1間分確認できる。建物は、SB381→SP382の順となる。

出土遺物は、SP007・023から瀬戸美濃1点(5)、SP008から肥前系1点(6)、SP023・SP034・SP049・SP179から土師器各1点(8～11)、SP210から越中瀬戸1点(7)、SP050から珠洲1点(12)と中国1点(13)、SP242から木製品1点(14)である。

越中瀬戸 7は折縁皿である。内面と体部外面上半に灰釉を施す。体部下半にロクロケズリを施す。

瀬戸美濃 5は志野丸碗である。両面に厚く長石釉を施し、表面は気泡が多数みられる。時期は大窯4段階である。

珠洲 12は壺の胴部の細片のため、径を復元できない。両面にナデを施す。

肥前系 6は陶器丸皿である。内面と体部外面に灰釉を施す。体部下半は露胎で、胎土は鉄分が多いためか赤褐色である。高台はケズリ出しで、内部は頭巾状を呈する。

中国 13は青花皿の細片のため、径を復元できない。口縁部内面に文様が描かれる。焼成はやや不良で、胎土はやや軟質になる。

土師器 8～11は灯明皿である。すべての口縁部に油・煤が付着する。口縁部は横ナデ、体部から底部は指圧痕がみられる。口縁部の形状は8・11が丸、9は外面に稜を持つ三角形、10は外面に稜を持ち反外する。

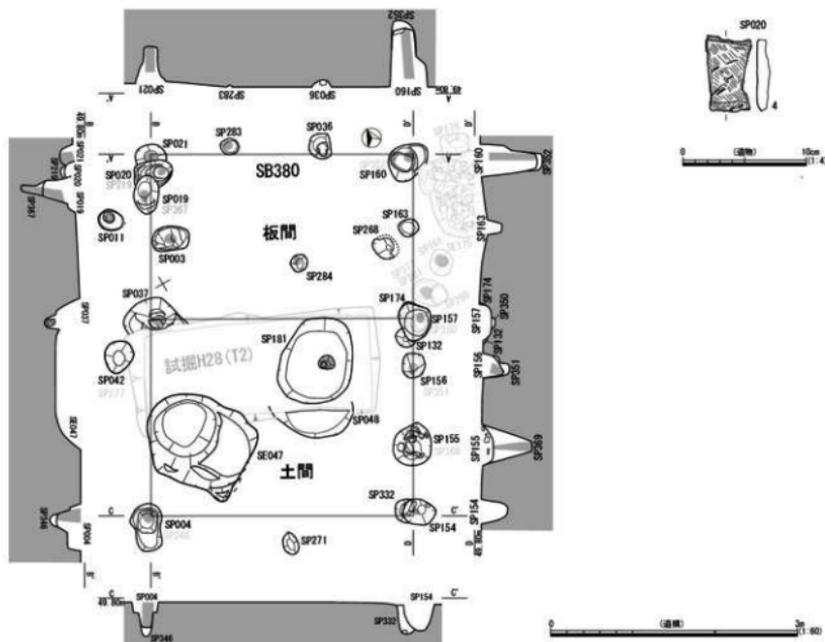


図13 区画1 (SB380) 平面・断面図、出土遺物

11は被熱を確認できるが、他は肉眼で確認できない。時期は16世紀後半と推定される。

木製品 14は柱材の根である。底面は平らに加工され、側面はやや粗く加工される。上部は柱を抜き取る際に切断したと考えられる。

遺構の時期は、SP007・023から志野丸碗が出土していることから、16世紀末葉から17世紀初頭と推定される。

区画3・SB383(図15・16、写真図版7・17)

建物はSB383の1棟以上確認できる。SB383は北辺5間以上、南辺8間以上、西辺は2間で、東辺は調査区外に続く。間取りは北西隅に土間、土間の南と東に廊下がつく。南の廊下は東端まで延びる。北東側に板間、北東隅に土間が確認できる。土間に相当する部分にはSX028のような掘り込み後に整地する。このことから区画2の北側にある掘り込み後の整地も土間の可能性

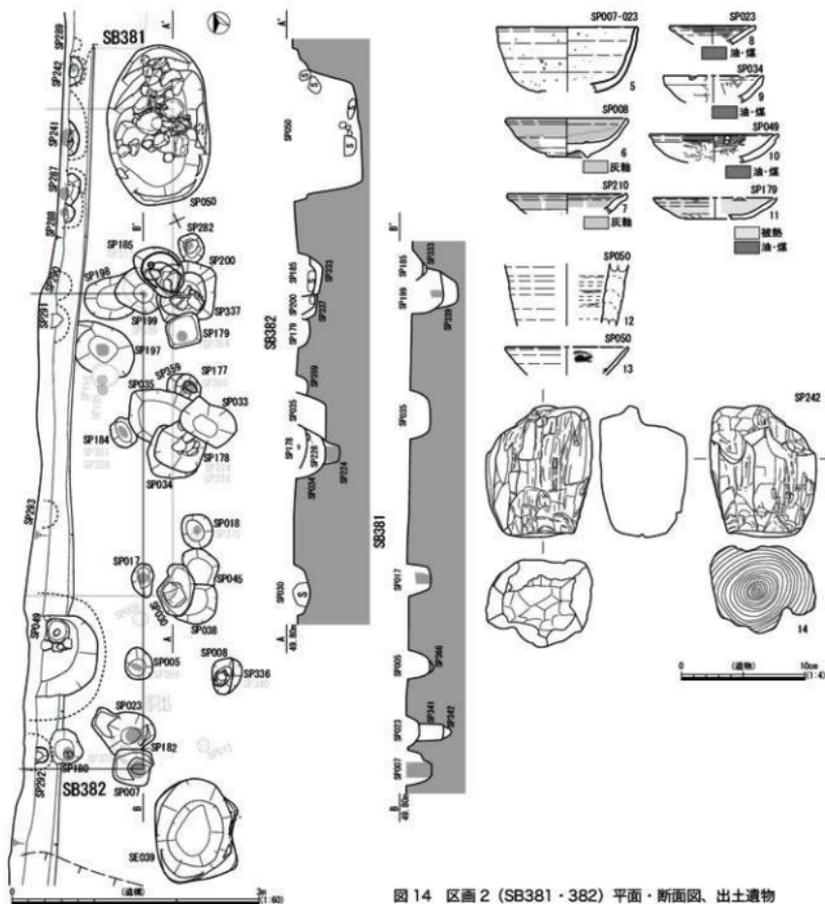


図14 区画2 (SB381・382) 平面・断面図、出土遺物

がある。

東と西の土間には井戸が各2基礎認できる。SK212は土間に伴う施設の可能性が考えられる。

出土遺物はSP025から瀬戸美濃1点(15)、SP026・SP191から珠洲各1点(16・17)、土師器1点(18)、SP138から中国1点(20)、SP079から土師器1点(34)、SP027・SP043・SP044から金属製品各1点(21~23)、SP192から石製品1点(24)である。

瀬戸美濃 15は皿の底部である。全面に灰釉を施す。高台はケズリ出しで、低い三角形を呈する。高台内に竈道具の軸着がみられる。時期は大窯2・3段階(16世紀中葉~後葉)である。

珠洲 16・17は裏の胴部である。両者とも、外面に平行タタキ、内面に無文当具痕がみられる。16のタタキは綾杉文状で、内面の当具痕も明瞭に残る。全面に研磨による摩耗がみられ、後世に砥石として使用されていたと考えられる。

土師器 18・19は灯明皿である。18は口縁端部は丸くなる。口縁部に横ナデ、体部に指圧痕がみられる。

19は口縁部外面に稜を持ち、断面形は三角形を呈する。口縁部は横ナデ、体部から底部は指圧痕がみられる。

中国 20は青花皿である。高台は中央を粗くケズリ出される。文様は全面に描かれる。見込部には菊、体部と見込部の境に2重圏線、体部に唐草文、外面には口縁部に2重圏線とその間に波カ、体部に鋸歯文とその下に圏線を描く。

金属製品 21・22は椀状鉄滓である。上面が平らで、下部がやや丸くなる。表面には気泡が多数みられる。

23は和製鉄釘である。頭部は潰れ、先端は欠損する。断面は四角形を呈する。

石製品 24は砂質泥岩製の下白で、受部が付く。上

面と側面は研磨で丁寧に仕上げ、底面はノミ等の工具痕が残る。中央の穿孔はわずかに残り、四角形を呈する。残存は概ね2分の1程度で、欠損面は加工し、一部研磨で平らに仕上げられており、再利用されたと考えられる。最終的に礎石に転用された。

遺構の時期は、井戸が付属することを前提とするが、SE213が16世紀後葉、SE214が16世紀後半、SE002・201が16世紀末葉から17世紀初頭で、西側の土間のほうがやや古い様相を示す。柱穴からは16世紀中葉から後葉の遺物が出土していることから、16世紀中葉から17世紀初頭と推定される。

また、SX028や建物の西側の柱穴から鉄滓、鉄製釘、砥石、周辺整地層から埴輪、井戸からは曲物の一部と考えられる細片、枝・竹をカットした細片が多量に出土していることから、何らかの作業場の可能性が指摘される。

区画4-5B384(図17、写真図版8・17)

ここでは、柱穴の規模が比較的小さく、小規模な小屋のような建物が想定される。SB384は北辺4間、西辺4間、東辺3間、南辺2間で、平面形は台形を呈し、不整形である。

出土遺物は、SP126から越中瀬戸1点(25)である。

越中瀬戸 25は皿である。見込部に菊花文を線刻する。体部と見込部の境には軸留めがみられ、軸は体部のみ、外面は高台まで灰釉を施す。高台はケズリ出しで、体部中央まで施される。このため、体部は稜を持つ。胎土は精緻で、焼成は磁器のように白く硬質である。時期は16世紀末葉から17世紀初頭と推定される。

遺構の時期は遺物から16世紀末葉から17世紀初頭と推定される。

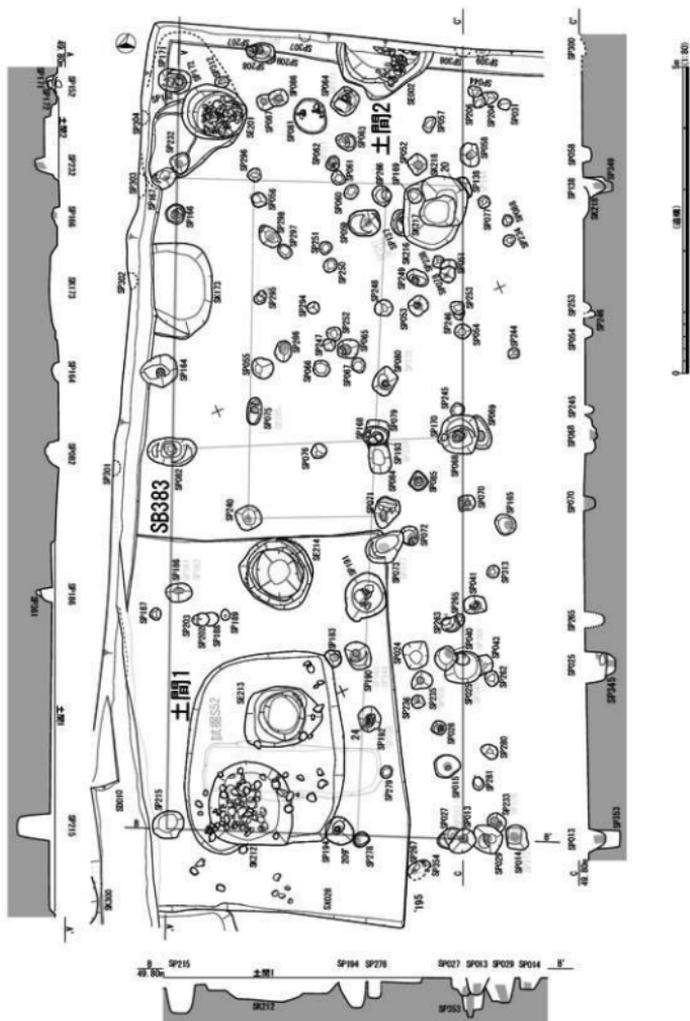


図15 区画3(SB383)平面・断面図

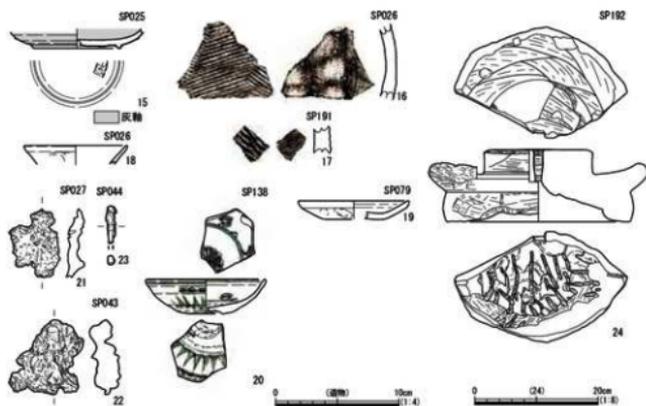


図16 区画3(SB383)出土遺物

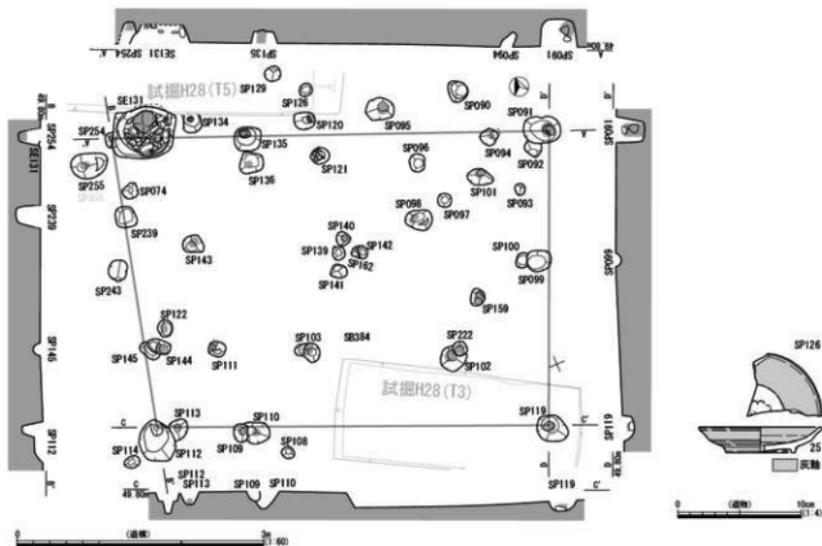


図17 区画4(SB384)平面・断面図、出土遺物

(B) 井戸

井戸は計10基検出された。これら10基は概ね2~3基が隣接して分布する。調査区北西にSE213・214、調査区北東にSE002・201、調査区中央にSE175・131・133、調査区南西にSE039・046・047の4箇所に分かれる。また、前項で既述したとおり、井戸は埋没過程の分類により、①SE046・131、②SE039・047・133、③SE002・175・201、④SE213・214となる。これについて礫の用途は井桁の基礎であった石組みを井戸の中に廃棄したと推測している。ただし、上面に礎石状の礫を置くこと、上層に白色粘質シルトと礫で蓋をすること等、単なる地固めのためか、井戸を埋める際の風習なのか、いずれにせよ課題が多く残る。

SE002 (図18、写真図版9-17)

C-D-5グリッドに位置し、II層中で検出された。平面形は不整形円形を呈し、調査区内に概ね2分の1程度検出された。断面形は上部が浅い皿状で、いくつかのテラスがみられる。そこから下部はほぼ垂直である。浅い部分では礫が多量に出土した。礫は南側に集中し、北側には確認できなかった。礫は6層に切られる。礫は主に8層中において出土したが、図の破線より下部は湧水もあり、壁面が崩落したため、これ以上の調査は中止した。図18の下場はピンボールで地山を確認しながら記録した。底面が平坦なのは井戸の中心を通っていないためと推測される。

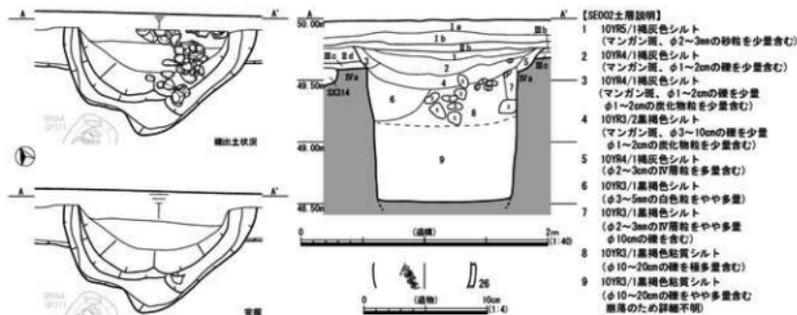


図18 SE002平面・断面図、出土遺物

出土遺物は中国1点(26)である。

中国 26は青花碗の体部である。外面に植物文がみられ、両面に透明釉を施す。時期は16世紀代と推定される。

遺構の時期は遺物と層位から16世紀後葉から17世紀前葉と推定される。

SE039 (図19、写真図版9-17)

D-2グリッドに位置し、IV層上面で検出された。平面形は不整形円形を呈し、SE002と同様に、上部は浅く、テラスがみられる。これより下部はやや内傾して底面に至り、底面は丸くなる。

埋土は上層と下層で大きく異なる。上層は白色粘質シルトを主体とし、下層は灰色粘質シルトを主体とする。上層には礫がやや多量含まれ、少量の陶磁器も出土した。下層には有機物がやや多量含まれる。側面にはいくつか凹んだ部分がみられる。

出土遺物は、越中瀬戸1点(27・28)、土師器2点(29・30)、木製品4点(31~34)が出土した。

越中瀬戸 27は内壳皿である。釉は鉄釉を体部の両面に施し、見込部は釉をケズリ取り、磨いたような滑らかな仕上がりである。焼成が悪く、生焼けである。時期は大濠4段階併行と推定される。

28は壺または甕の胴部である。釉は鉄錆釉を両面に施す。ロクロ成形後、外面下半にロクロケズリを施す。

土師器 29・30は灯明皿である。部分的に被熱を受け、表面が剥離する。30の口縁端部は内側に段を持ち、

29は内面に弱い稜がみられる。30の口縁端部には油・煤がみられる。成形は手づくねで、体部から底部には指押え、口縁部には横ナデを施す。時期は16世紀後半と推定される。

木製品 31は曲物の一部で、厚さ1mm程度の薄い板で、横に何条かの筋がみられる。

32・33は枝の一部をカットしたもので、32は側面と先端、33は縦半分にカットしている。

34は竹の枝をカットしたもので、先端を斜めにカットし、節も取り除いている。

遺構の時期は遺物から16世紀末葉から17世紀初頭と推定される。

SE046 (図20、写真図版9-17)

D-2グリッドに位置し、掘乱の下からで、IV層上面で検出された。検出時には多量の礫が出土した。北側には扁平な礫がみられ、その下には拳大を主体とした礫が多量みられる。このような状況から、扁平な礫が礎石で、下の礫が根石と推測される。礫は井戸の底面まで確認でき、下層へいくほど礫が少なくなり、大きくなる傾向がみられる。側面には凹凸がみられ、底面はやや丸くなる。

遺物は上面において肥前系陶器1点(35)が礫の間から出土した。下層において、SE002・039のように有機物はみられず、礫が目立っていた。

肥前系 37は丸皿である。釉は灰釉で、内面と外面の

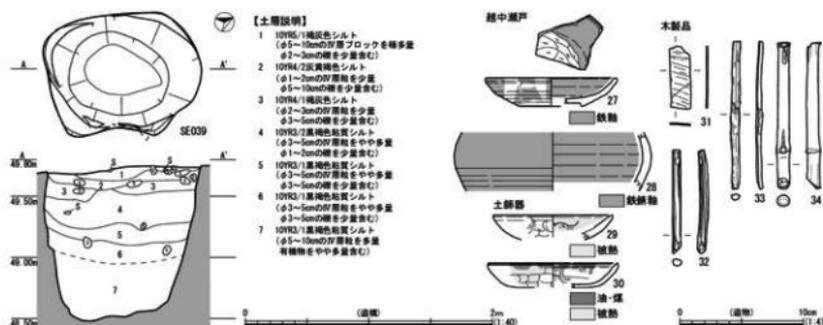


図19 SE039 平面・断面図、出土遺物

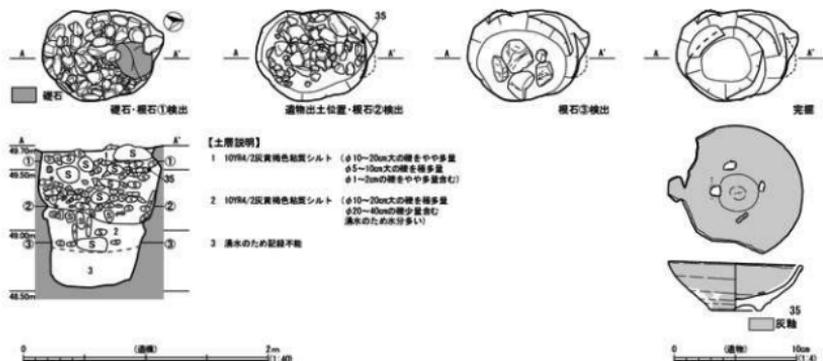


図20 SE046 平面・断面図、出土遺物

体部から底部に施される。見込部には4箇所胎土目が見られる。高台はケズリ出しで、中央に頭巾がみられる。時期は大橋1-2期(16世紀末葉から17世紀初頭)と推定される。

遺構の時期は遺物から16世紀末葉から17世紀初頭と推定される。

SE047 (図21、写真図版10・17)

D-2・3グリッドに位置し、Ⅲ層上面で検出された。試掘トレンチT2に遺構の一部が当たっており、北半の約20cm程度が削平されている。平面形は不整楕円形で、断面は有段である。検出時には上面において礫が多量に出土し、礎石とその下に根石が確認された。根石は白色粘質シルトで間を埋める。根石を取り除いた最下面において石臼(36)が出土した。白色粘質シルトは1～10層まで確認でき、6～10層では互層状に堆積する。11・12層は灰色粘質シルトで、有機物が多量に含まれる。11層を取り除くと段差が生じ、12層の部分は径が約半分になる。段差は東側半分にあり、西側に円形の落ち込みが確認できる。検出面から段差までは約1m、段差から底面までは約50cmを測る。遺構の南側には小さなテラスと側面に凹凸がみられる。これらは掘削時の昇降の際に使用したと推測され、他の側面の凹凸も同様と考えられる。

出土遺物は、石製品2点(36・37)、木製品13点(38～50)である。

石製品 36は砂岩製土臼である。中心には方形の孔を穿ち、側面に加工痕が残る。前面に加工痕と研磨した痕跡がみられる。元は円形であるが、破損して半分になり、破損面も加工・研磨していることから再利用された可能性がある。断面形は左下が大きく欠損しているが、この部分にも再加工痕がみられる。最終的に栗石状礫として再々利用されたか、廃棄されたと推察される。

37は縁辺に2次加工ある礫である。右側縁は両面剥離、下側縁は表面剥離である。右側縁は刃部状を呈する。

木製品 38・39は箸である。側面を縦方向にケズリ、整形する。38は完形で、上部と下部は加工が細かく、細く整形し、中央は大きく加工し、太く整形する。

40～43は部材の一部と考えられる。40は両面とも

同様の加工で、上部と下部は尖り、右側縁はU字状に抉る。表面は「×」、裏面「-」を線刻する。43は板材で、枝の節がみられる。41・42は樹皮を板材に差し込み、接合したものと推察される。41は表面に漆を塗布した薄い板で、曲物のようなものと考えられる。

44～49は曲物の一部で、50は薄い板を作る際に生じたものと推測される。これらは製作に関連するものか、破損したものを破棄したものか考えられるが、50はケズリ片と考えられるので、近くで曲物を製作していた可能性も推察される。

遺構の時期は時期判別可能な遺物が出土していないため、不明であるが、箸や薄い板は他の井戸においても出土していることから、16世紀後葉から17世紀前葉と推定される。

SE131 (図22、写真図版10・11・18)

D-4グリッドに位置し、Ⅲ層上面で検出された。平面形は試掘トレンチT5により上場を欠損するが、南側は隅丸方形を呈する。断面形は寸胴状で、底面はやや丸くなる。

埋土は1～3層、4層、5層、6層の大きく4つに分かれる。1～3層は主に白色粘質シルトで、小型の礫をやや多量含んでいる。4層は20～30cm大の礫を極多量含んでいる。北側には礎石状礫が栗石状礫の上に置かれ、この状況はSE046と同様である。5層は井戸の径とほぼ同じ礫が4層直下にみられ、同じ所から石臼(63)が出土した。大きな礫の下にも拳大の礫が多量に含まれ、その間隙にもう1つの石臼(62)が出土した。6層は拳大の礫を主体として、人頭大の礫も少量含まれる。

重複関係はSP254を切る。

出土遺物は、越中瀬戸2点(51・52)、瀬戸美濃1点(53)、珠洲1点(54)、越前6点(55～60)、土師器1点(61)、石製品5点(62～66)、木製品(67)である。

越中瀬戸 51は丸碗の腹部である。両面に灰釉を施す。

52は播鉢の体部下半である。内面には体部と底部の一部に播目がみられるが、使用痕により大部分が播り減っている。

時期は16世紀末葉から17世紀初頭と推定される。

瀬戸美濃 53は丸皿である。体部の両面に灰釉を施す。高台はケズリ出しで、低い三角形を呈する。時期は大窩3段階(16世紀後葉)と推定される。

珠洲 54は壺胴部である。外面に平行タタキ、内面に当具痕がみられる。平行タタキのタタキ目は幅が大

きく粗い。時期は吉岡V・VI期(15世紀)と推定される。

越前 55～57は播鉢である。55は内面に9条1単位の播目をやや密に右回りに施す。ロク口成形で、外面に斜め方向のナデを施す。口縁部の内側に面を持つ。56は体部下半である。内面に8条1単位の播目を

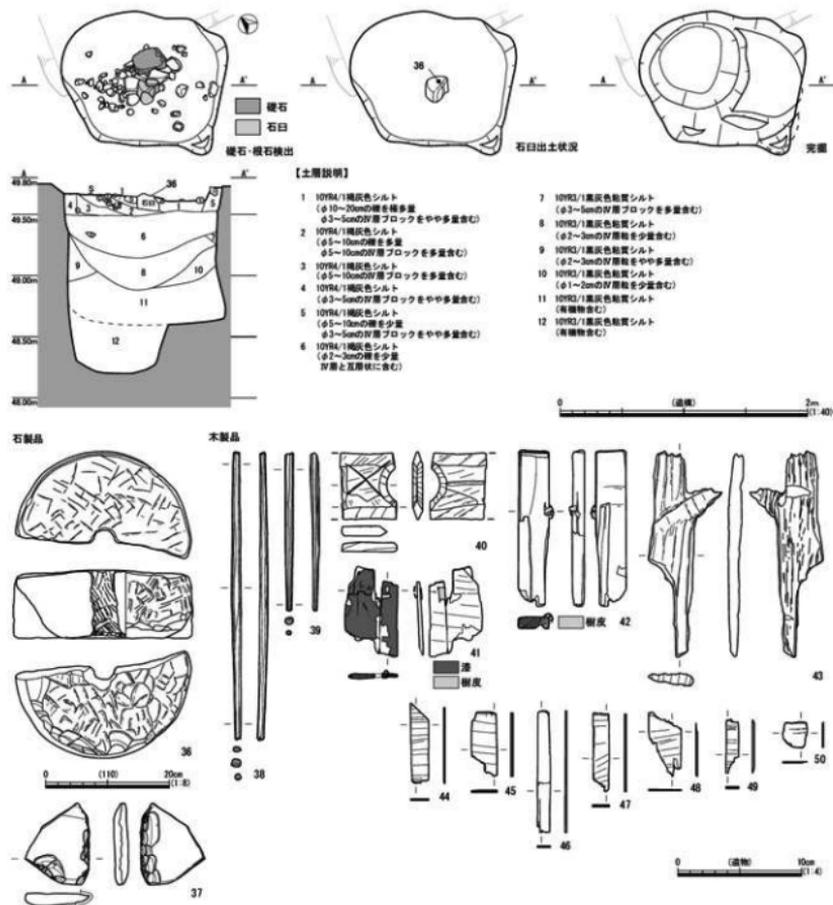


図21 SE047平面・断面図、出土遺物

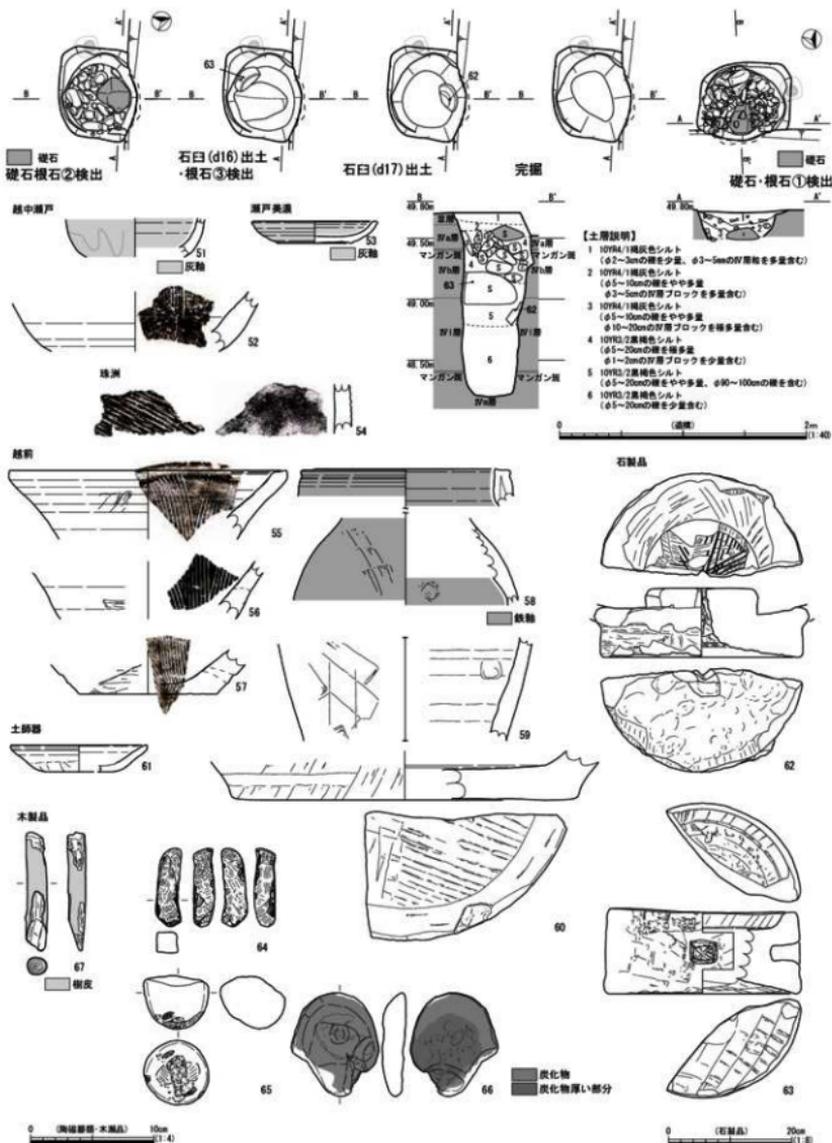


図22 SE131 平面・断面図、出土遺物

左回りに施す。57は底面である。焼成は硬質である。内面に8条1単位の掃目を右回りに施す。体部下半には工具痕などがみられる。

58～60は裏である。58は接合しないが、同一と考えられる。両面に鉄軸を施す。口縁部は上端に面を持ち、胎土内では火ぶくれがみられる。胴は内面に指圧痕、外面に斜めナデ上げを施す。59は胴部で、概ね58と同様の成形である。施軸はない。60は底部である。胴部外面は斜めナデ上げ、底部外面には縁辺にケズリを施し、中央に圧痕が残る。時期は16世紀後半と推定される。

土師器 61は灯明皿である。口縁部は横ナデ、体部から底部は指圧痕、ナデ上げを施す。時期は16世紀後半と推定される。

石製品 62・63は石臼である。63は砂岩製上臼、62は礫岩製の受部を有する下臼である。63は全体の4分の1程度で、欠損部分は再加工される。全面に加工痕・研磨痕がみられる。側面には把手棒を差し込むための方形の孔が1箇所穿たれている。62は全体の2分の1程度で、欠損部分は再加工される。掃り面には掃目がわずかに残る。中央には孔が底まで穿たれる。底面と孔には加工痕が明瞭に残る。

64は砥石である。側面4面を砥面とする。剥離痕もみられることから、砥面を加工しながら使用していると考えられる。

65は叩き石である。割れ石を利用し、敲打痕は丸い部分にみられることから、割れた部分を手持ち使用していたと推測される。

66は扁平な円礫で、全面に煤が付着し、礫自体も熱

を受けている。礫の中央はやや凹む。煮炊き等の台石か、火災等により熱を受けた礫かと推察される。

木製品 67は枝の先端を斜めカットしたもの、またはカットされた枝である。

遺構の時期は遺物から16世紀末葉から17世紀初頭と推定される。

SE133 (図23、写真図版11・18)

C-4グリッドに位置し、Ⅲ層上面で検出された。試掘トレンチT5に切れ、上面はほとんど確認できない。確認できる範囲では概ね円形を呈するが、SE131と同様の平面形とも考えられる。断面形は寸胴状で、底面はやや丸くなる。

埋土は、1・2層が白色粘質シルト、3層が礫、4～6層が灰色粘質シルトの大きく3つに分かれる。白色粘質シルトは固く締まる。礫は南側に確認でき、北側の一部には確認できない。礫の間には陶器片1点(69)が出土した。礫を含まない部分は4層で何もみられない。5・6層は有機物を含んでいる。

出土遺物は、瀬戸美濃2点(68・69)、土師器1点(70)、木製品1点(71)である。

瀬戸美濃 68は天目茶碗の口縁部である。口縁部は弱く外反する。

69は丸碗である。SE201と接合する。高台はケズリ出で、方形を呈する。軸は内面と外面の口縁部から高台の一部に施される。時期は大塚4段階である。

土師器 70は灯明皿である。口縁部と底部を欠損する。体部は両面とも不定方向のナデを施し、内面には油

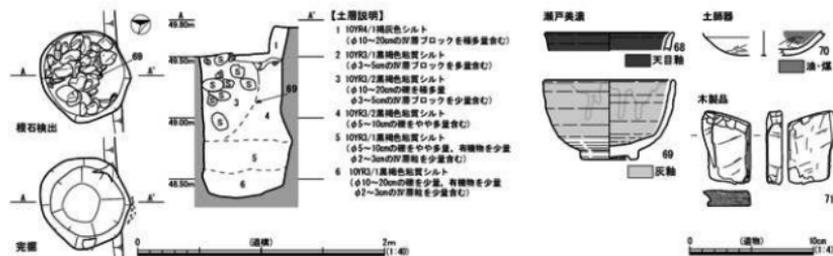


図23 SE133 平面・断面図、出土遺物

煤が付着する。時期は16世紀代と推定される。

木製品 71は加工痕のある木材で、何らかの部材の一部と考えられる。

遺構の時期は遺物から16世紀末葉から17世紀初頭と推定される。

SE175 (図24、写真図版12・18)

C・D-3グリッドに位置し、Ⅲ層上面で検出された。平面形は概ね隅丸方形を呈するが、北西隅と南西隅に飛び出た部分が見られる。また、南側以外には2～3段の小さなテラスが見られる。

埋土は1層が白色粘質シルト、2層が礫、3・4層が黒褐色粘質シルトの大きく3つに分かれる。白色粘質シルトは小型の礫をやや多量含み、SE131と類似する。この部分にテラスが生じる。礫は拳大の礫を主体として、人頭大の礫もやや多量含まれる。灰色粘質シルトは3層と4層の2層に分かれ、3層は拳大から人頭大の礫をやや多量含み、陶器播鉢1点(72)が出土した。4層は礫がほとんどみられず、有機物を多量に含んでいる。

重複関係はSP160・175を切る。

出土遺物は、越中瀬戸1点(72)、珠洲1点(73)、越前2点(74・75)、土師質土器1点(76)、須恵器1点(77)、木製品8点(78～85)である。

越中瀬戸 72は播鉢の底部である。内面に14条1単位の播目が密に施される。内面には使用痕がみられ、播目の一部は使用痕で薄くなる。底部外面は糸切痕がわずかに残る。体部外面にはロクロナデを施し、底部との境付近に指圧痕が残る。時期は16世紀末葉から17世紀前葉と推定される。内外面の鉄錆軸は摩耗によりほとんどみられない。

珠洲 73は甕の胴部である。外面に平行タタキ、内面に横ナデを施す。時期は吉岡編年Ⅳ～Ⅴ期(14～15世紀)と推定される。

越前 74・75は甕の胴部である。両者とも径は復元できない。74は内面にケズリを施し、上部に屈曲する部分が見られることから肩部付近と考えられる。外面は降灰のため不明である。75は内面に横ナデ、外面は斜めのナデ上げが施される。両者とも内面に煤が付着する。

土師質土器 76は越前を模倣した播鉢である。播目は8条1単位である。口縁部は内傾する面を持ち、その下に凹線が1条みられる。口縁部は横ナデ、外面の体部下半は斜めナデ上げを施す。時期は16世紀代と推定される。

須恵器 77は甕胴部である。外面に平行タタキ、内面に同心円文当具がみられる。全面に研磨痕がみられ、後世に砥石として転用されたと考えられる。

木製品 78は角材をケズリ出した容器と考えられる。内面は粗いケズリの痕跡が残り、外面は丁寧にケズリ整形される。

79は曲物の一部である。

80・81はケズリ片で、81は何らかの付着物がみられる。

82は部材の一部である。縦方向に孔を穿つ。

83～85は枝や節をカットした自然木である。

遺構の時期は遺物から16世紀末葉から17世紀前葉と推定される。

SE201 (図25・26、写真図版12・19)

C-5グリッドに位置し、Ⅲ層上面で検出された。検出状況は、整地層の浅い凹みの中で確認でき、この整地層はSX028と同様と考えられる。整地層上では確認が困難であったので、Ⅲ層まで掘削したレベルで明確に検出することができた。検出時には整地層内に礫を含んでおり、井戸との関連は不明である。1～3層は別遺構としてとらえていたが、整地層の堆積の中で、堆積したものと判断した。井戸は整地層が堆積している中である時期に埋没したと考えられる。

平面形は楕円形で、南から西縁辺に礫が並ぶが、上面のみである。断面形は上部が有段で、下部が寸胴状である。

埋土は1～10層、11層、12層の3つに分かれる。10層までは褐灰色シルト、11層は礫、12層は礫と有機物である。遺物は礫直下から陶器小杯(86)、木製品鍬(96)は有機物の中に含まれていた。

重複関係はSP312を切る。

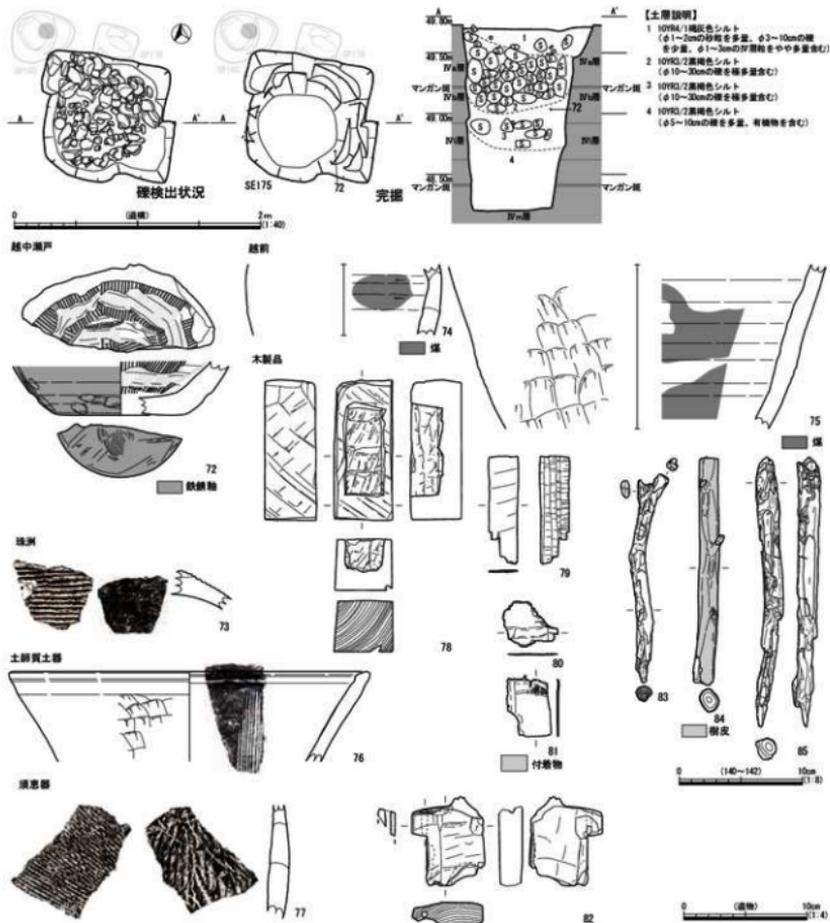
出土遺物は、越中瀬戸1点(86)、瀬戸美濃1点(87)、土師器1点(89)、土師質土器1点(88)、土製品1点(90)、石製品4点(91～94)、木製品12点(95～106)である。

越中瀬戸 86 は小杯である。内面と体部外面上半に鉄軸を施す。体部中央よりやや上から底部にかけてロクロケズリを施し、低い方形の高台をケズリ出す。時期は16世紀末葉から17世紀初頭と推定される。

瀬戸美濃 87 は皿の口縁部である。体部中央より下にロクロケズリを施すことにより稜が生じる。両面に鉄軸を施す。時期は大濠4段階と推定される。

土師器 89 は灯明皿である。口縁部は摩耗により不明瞭であるが、両面に横ナデを施す。時期は16世紀後半と推定される。

土師質土器 88 は越前模倣の播鉢である。7～8条1単位の播目を施し、1単位はやや間隔をあける。口縁部は内傾した面を持ち、その下に凹線がみられる。体部外面は斜めナデ上げを施す。時期は16世紀代と推定



される。

土製品 90は手づくねのつぼである。口縁部の上端に面を持つ。体部には指圧痕がみられ、口縁部は横ナデを施す。

石製品 91は甲台である。上面は平らに、下面は舟底状に加工・整形する。上面には敲打痕が多数みられる。

92は円盤状石製品である。円盤状に加工し、粗く研磨して整形する。用途は不明である。

93は泥岩製の砥石である。目は細かい。全面が砥面である。

94は砂岩製の砥石である。目はやや粗い。表面は研磨痕が多数みられ、裏面は板状に整形する際の工具痕が残る。

木製品 95は漆器碗の口縁部である。両面に漆を塗布する。

96は鎌である。両面はやや粗く加工痕が残る。頭部は何かで叩いた痕跡がみられ、柄に装着した際の調整

のための痕跡と推測される。柄の装着部は方形を呈する。使用部分は耕作のために欠損している。

97は加工材である。左右をカットし、中央よりやや下に横方向の穿孔がみられる。

98は容器の一部と考えられる。両面を薄くケズリ出す。

99・100は曲物の一部と考えられる。99は孔を穿つ。

101は先端を斜めにカットした枝である。

105はケズリ細片である。

102・103・106は竹を薄くケズリ取ったものである。

105も含めて何らかの加工がこの周辺で行われていたことを示唆する。

遺構の時期は遺物から16世紀末葉から17世紀初頭と推定される。

SE213 (図27・28、写真図版13・19)

B-3・4グリッドに位置し、Ⅲ層上面で検出された。検出状況は、整地層(SX028)に覆われ、SE213部分にお

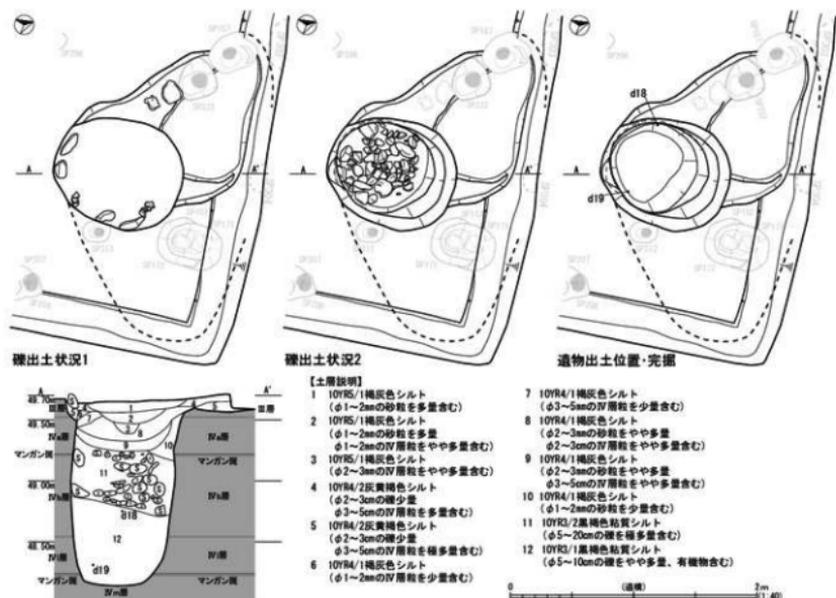


図25 SE201 平面・断面図

いて整地層が落ち込む。その状況は整地層の砂層において明瞭に確認される。調査時はこの落ち込みを遺構と考えていたが、井戸土(SE201・SE214)には同様の落ち込みが確認されることから、整地層が井戸埋没途中の穴に堆積したと判断した。

平面形は楕円形で、断面形は上部にテラスを持ち、下部は寸胴状を呈する。側壁はいくつか凹凸がみられる。

理土は1～6層、7～12層、13～16層の3つに大きく分かれる。1～6層まではテラス部分で、整地層の堆積が含まれる。7～12層までは12層底面において炭焼木炭(117)と人頭大の礫が出土した。13～16層は有機物が多量に含まれ、種子、自然木等、魚骨もここから出土した。第4章では魚骨と13～16層から土壌サンプルを採取し、分析を行っている。

出土遺物は、土師器2点(107・108)、土製品1点(109)、

石製品3点(110～112)、木製品34点(113～146)である。

土師器 107・108は灯明皿である。107は両面に油・煤が付着する。口縁部は横ナデ、体部から底部は指圧痕がみられる。口縁端部は両面をつまむことにより尖る。時期は16世紀後半と推定される。

土製品 109は被熱した土壁である。胎土内にはサヤや砂粒が混入する。正面はケズリが施され平坦である。建物の壁、カマド等の壁かは不明である。

石製品 110は扁平な円礫で、全面に研磨痕がみられる。

111は加工後研磨される。側面は剝離痕を残す。

112は泥岩製の仕上げ砥石である。全面が砥面として使用されている。

木製品 113～116・119は付け木と考えられる。いずれも先端が炭化する。113は加工材を使用し、その他は自然木を使用する。115・116は先端をカットした

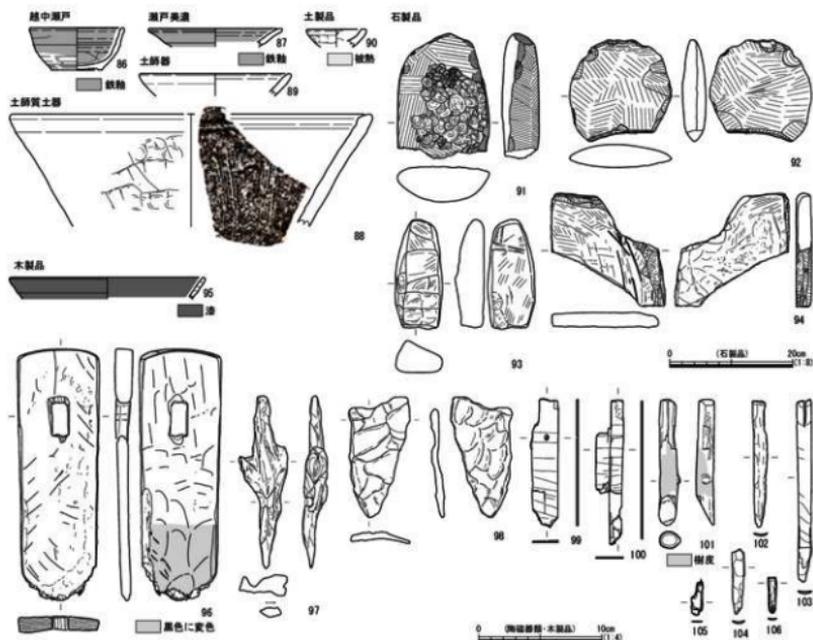


図26 SE201出土遺物

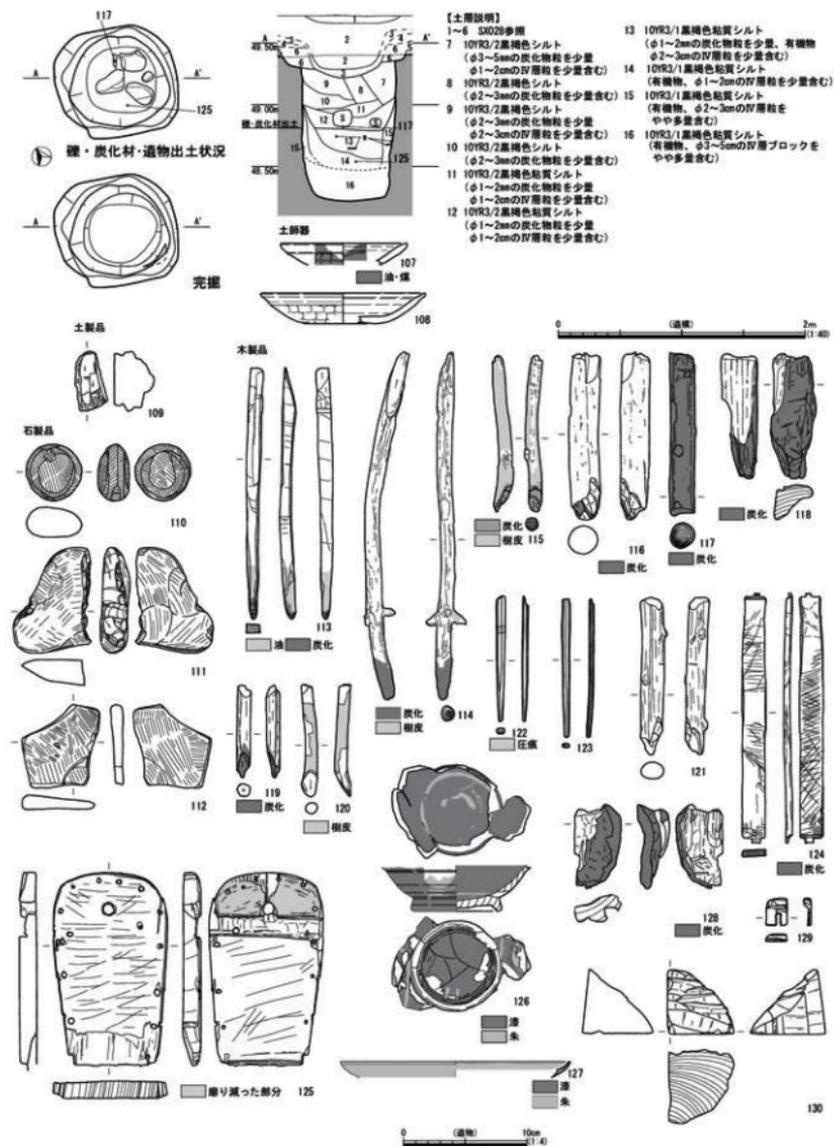


図 27 SE213 平面・断面図、出土遺物 (1)

部分が炭化する。

117 は炭焼きの木炭である。硬質に焼成され、手に角の粉が付かない。

118 は角材の杭であったと考えられる。側面の一部が炭化する。先端はカットする。

120・121 は枝の先端をカットしたものの、またはカットされた枝である。

122・123 は箸である。122 は何らかの圧痕がみられる。

124 は細長い板材である。両端をカットする。両面ともケズリ痕の筋が多数明瞭に残る。

125 は陰印下駄で、かかと部分を欠損する。全面に丁寧なケズリ整形が施される。指部分に円形の孔と縁辺に小さな孔が穿たれる。裏面には歯を留めるほぞがみられる。

126 は漆器椀で、口縁部を欠損する。高台はややハの字状を呈し、器厚は椀と同様である。全面に黒漆を塗布し、体部外面・見込み・高台内に文様を朱書きする。時期は16世紀と推定される。

127 は漆器皿で、口縁部のみである。全面に朱を塗布し、口縁部外面の沈線部分と端部は漆のままである。

128 は容器の一部と考えられる。表面の一部は炭化する。内面は丁寧にケズリ整形され、外面はやや粗くケズリ整形される。外面には高台がケズリ出される。

129 は小型の部材と考えられる。全面に丁寧なケズリ整形が施され、U字状の挟りがみられ、何かを接合するための部材とも考えられる。

130 は楔と考えられる。三角形の面が4面あり、粗いケズリ痕が残る。

131～141 は曲物の一部である。142～146 は一端を斜めにカットする。

遺構の時期は、SX028 が最終的にSE213を覆っているので、本遺跡における初期の遺構とも考えられ、また遺物から16世紀後葉と推定される。

SE214 (図29、写真図版14・20)

B・C-4グリッドに位置し、皿層上面で検出された。検出状況はSE213と同様である。平面形は楕円形で、断面形は上面の幅が広く、下方へ狭くなる。側面にテラスや凹凸がみられる。

埋土は2～5層、6～11層、12・13層の大きく3つに分かれる。2～5層は褐灰色シルト。6～11層は6層が炭化物層で、平面的に捉えることができる。12・13層は黒褐色粘質シルトで、有機物を多く含んでおり、遺物では下駄(163)、蓋(162)、蓋・棒・杭(164～166・168)等が出土した。164～166・168は蓋を側面に立て掛けて杭と棒で抑えている状況で出土した。

出土遺物は、瀬戸美濃1点(147)、中国1点(148)、土師器3点(149～151)、金属製品1点(152)、木製品18点(153～170)である。

瀬戸美濃 147 は天目茶碗の体部である。体部外面

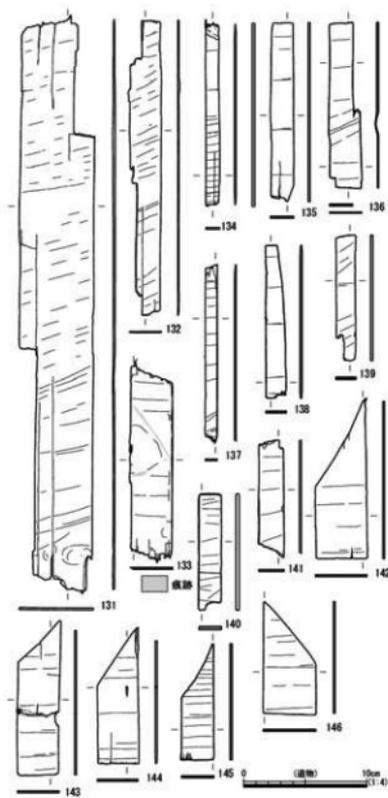


図28 SE213出土遺物(2)

の軸下端に軸溜りがみられる。

中国 148 は白磁の皿である。口縁部は大きく外湾する。

土師器 149～151 は灯明皿である。口縁部は横ナデ、体部から底部は指圧痕がみられる。

金属製品 152 は鉄製和釘である。頭部は潰れて形状はJ字状に曲がる。

木製品 150・155 は付け木と考えられる。150 は自然木で、先端が炭化する。155 は丸木を半切したもので、先端を斜めにカットする。カットした部分に煤が付着する。

154 は部材の一部である。全面に漆を塗布するが、重なっていた部分は漆がみられない。角は丁寧に削られている。木釘が5箇所にみられ、何かに接合していたものと推測される。

156～158 は箸である。156 は先端の加工を細かくする。157 は指圧痕がみられる。157 は太く、158 は細くなる。

159 は先端を斜めにカットした枝である。

160 は加工材である。細かく削られる。

161 は桶の把手である。両面とも平らにケズリ整形が施される。両側面とも加工が施され、何らかの部材の一部と考えられる。

162 は蓋と考えられる。表裏は丁寧にケズリ整形され、薄く仕上げられる。角は丸くなり、原形は円形であった可能性がある。

163 は連歯下駄である。丸木から歯をケズリ出し、孔を穿つ。孔は前に1つ、後ろに2つみられる。前の孔から先端が欠損しており、前の形状は不明である。前の孔から前の歯を貫通する孔が穿たれる。裏側はやや粗くケズリ出されているが、表側は遺存状態が悪く、加工状況は不明瞭となる。

164 は松明と考えられる。上部は欠損し、下半分には樹皮が一部残存することから自然木の可能性が高い。また、下部には2次焼成を受けて炭化していることから、松明の可能性が考えられる。

165 は播粉木である。側面は丸く整形され、下部は細かくやや丸く整形される。上部は粗く加工痕が残る。

166 は丸木を加工した杭と考えられる。上部は紐を結びつけるような袢りを加工する。下部は欠損後に、2

次焼成を受け炭化する。

167 は板材である。両面とも平らにケズリ整形が施される。

168 は円形の蓋と考えられる。元は板材を円形に加工しており、不足分を別の板材で補っている。別々の板材を接合するため、接合面に2箇所の孔をお互いの板材に穿ち、小さな接合部材をそれぞれの板材の孔を通して接合する。表面は平らにケズリ整形を施すが、裏面は加工痕が明瞭に残る。

169・170 は曲物の一部、またはケズリ片と考えられる。

遺構の時期は、遺物から16世紀後半と推定され、17世紀には入らないと考えられる。

(C) 土坑

土坑は、SK001・173・212・216・217・218・300・329の8基検出された。特徴として、SK001・212は埋土内に礫を多数出土していることをあげることができる。また、共通点として、平面形が楕円形で、大きく、浅い。出土遺物に乏しく、時期を明確にすることは困難である。機能や用途も不明瞭であり、第5章において考察したい。

以下では、SK001・173・212・216・217・218・300の7基を説明し、SK329は壁面のみのため、ここでは省略する。

SK001 (図30、写真図版15-20)

D・E-5グリッドに位置し、IV層上面で検出された。検出状況は調査区内に約3分の2程度で、調査区東壁の外に約3分の1程度続くと推定される。遺構内西端をSP117に切れ、SK001との関連は不明である。

平面形は不整形である。遺構縁辺が浅く、約10～20cmのテラスを有し、中央では浅い椀状を呈する。調査区東壁ではオーバーハングする。

埋土は7層に分層でき、主に黒褐色シルトである。埋土内には礫が多数確認でき、上層より底面付近に多数確認された。これらの礫は人為的に並んでおらず、礫の大きさも適当であることから、機能時よりも廃棄時に混入されたと推察される。

出土遺物は、土師質土器1点(171)である。

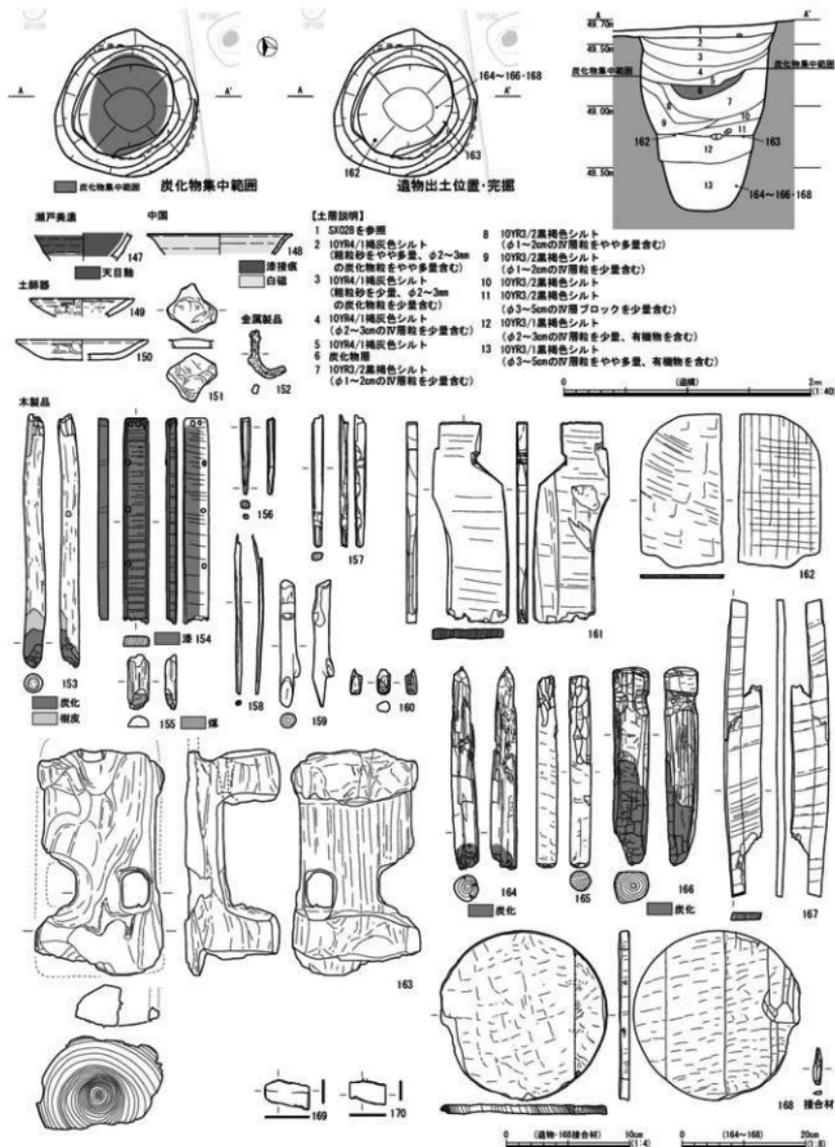


図 29 SE214 平面・断面図、出土遺物

171は越前模倣の土師質搦鉢の体部である。表面は剝離し凹凸が目立つ。これらの凹凸剝離から被熱を受けた可能性も考えられる。よって、調整等は不明瞭であるが、内面に6条の搦目をわずかに確認できる。時期は16世紀後半と推定される。

遺構の時期は遺物から16世紀後半と推定される。

SK173 (図30、写真図版15・20)

B・C-5グリッドに位置し、Ⅲ層上面で検出された。Ⅱ層上面及びⅡ層中では明確に検出できなかったため、Ⅲ層上面で検出した。遺構は北側溝により切れ、調査区北壁に確認できないことから、遺構は調査区内におさまる。

平面形は楕円形を呈する。遺構の北西側では1段テラスを有し、他は浅い椀状を呈する。

埋土は3層に分層でき、主に黒褐色シルトである。

出土遺物は土師器1点(172)である。

172は灯明皿である。口縁部は外面に稜を有する三角形を呈する。口縁部は横ナデで、体部は指圧痕がみられる。口縁部と体部の境の稜線はこの指圧痕によるもので、指押えによる成形痕である。時期は16世紀後

半と推定される。

遺構の時期は遺物から16世紀後半と推定される。

SK212 (図31、写真図版15・20)

B-3グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出された。遺構はSX028とした整地内の2段目の西端を同じくして検出された。断面ではSX028埋土中に掘方を確認できる。SX028内ではSK212を中心として礫が散乱していた。検出状況から、SX028内の礫はSK212に帰属すると考えられる。

平面形は概ね円形を呈し、西側はやや直線的である。断面形は浅い椀状を呈する。

埋土は1層に分層でき、主に黒褐色シルトである。埋土内には拳大の礫が多数検出され、礫は周辺にも散乱する。

出土遺物は、土師器1点(173)である。

173は灯明皿である。他の灯明皿とは胎土等が異なり、 ϕ 1mm未満の砂粒がやや多量含み、器面の色調も赤みが強く、被熱を受けていると考えられる。器面は摩耗により調整等は不明である。口縁部から体部は内湾し、口縁端部は丸く収まる。時期は16世紀後半と推

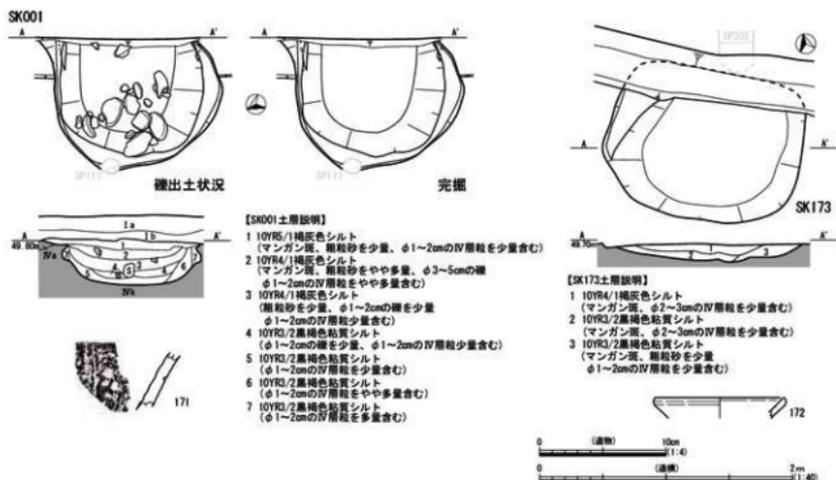


図30 SK001・173平面・断面図、出土遺物

定される。

遺構の時期は遺物から16世紀後半と推定される。

SK216・217・218 (図32、写真図版15)

C-5グリッドに位置し、Ⅲ層上面で検出された。検出状況はSK216・217・218の3基が重複しており、古い順に、SK216→SK218→SK217である。その他の重複遺構は、SK216がSP137・SP169を切り、SK218がSP138を切る。

平面形はいずれも楕円形で、断面形は皿状を呈する。

埋土はいずれも1層に分層でき、概ね黒褐色シルトである。

出土遺物はなく、遺構の時期は単独では不明である。しかし、SP138が16世紀後半と推定されることから、16世紀後半以降と推定される。

SK300 (図32)

A-3グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出された。調査区北壁土層断面では掘方がⅡf層から掘り込まれている

ことを確認できる。遺構の大半は調査区外にあるので、井戸の可能性も考えられる。また、東隣にはSK329があり、これはSD010に切られ、残りは調査区外にある。

平面形は円形または楕円形と推測される。

埋土は2層に分層でき、主に黒褐色シルトである。

出土遺物はなく、遺構の時期は基本層序から検出面3の遺構であり、16世紀後半から末葉と推定される。

(3) 下層

下層調査は、調査区北半のⅢ層掘削後に、Ⅳ層上面において遺構検出を行った。Ⅲ層からは遺物が出土せず、当初Ⅲ層を遺物包含層と想定していたが、本調査区では遺物包含層と判断する根拠がなく、自然堆積層と判断する。ここでは、下層調査として遺構検出を行った結果を記述する。

遺構検出の結果、遺構は確認されなかったが、樹木痕が15基検出された。調査は、主だった樹木痕を選別し、トレンチによる断面観察を行った。以下、樹木痕

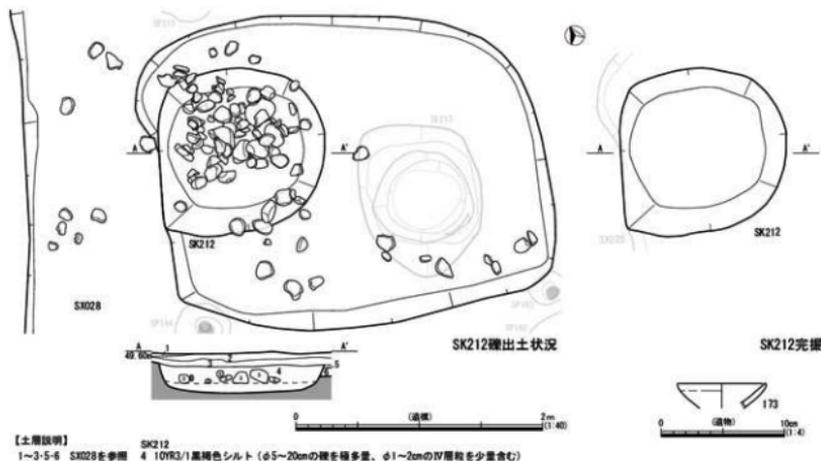


図31 SK212平面・断面図、出土遺物

について記述する。

樹木痕 (図33、写真図版16)

B-2～4、C-4～6グリッドに位置し、IV層上面で検出された。SX323～328・374、SX321・322、SX314～320がそれぞれ重複する。新旧関係は古い順に、SX323～328がSX323→SX374→SX327→SX328→SX326→SX324→SX325、SX321・322がSX322→SX321、SX314～320がSX314・317→SX316→SX315、SX317・320→SX318→SX319である。

トレンチ観察は、SX324～326・328、SX319、SX321、SX314、SX315の5箇所で行い、図33に掲載した。

また、SX324・325・374・321・314・315は図33の北・西・東壁土層断面図に掲載した。SX324～328とSX315・320・321の平面は黄褐色で、中央がやや盛り上がり、周囲が黒色の典型的な倒木痕である。断面では、黒色が黄褐色を抱きかかえているような状態である。これに対して、SX314は、黒色が浅く、底が波打っているような状態で、倒木ではなく、立ち枯れたか、もしくは樹種が異なるのか、どちらかであろう。

時期は、Ⅲ層中に遺物が出土していないので不明である。樹木痕の分布が調査区の北半にあり、北へ広がっていると推察される。しかし、調査区の南半の高い所にはないのなぜか、樹木痕とⅢ層、谷とⅢ層の関係についても課題である。

(4) 暗渠SD010 (図34、写真図版16)

A-3、B-3・4グリッドに位置し、I層直下で検出された。I層から掘り込まれているようにもみえるが、耕作の際、I層と攪拌されているので判別不可能である。

北西-南東方向に走る溝で、幅1.04m、検出長8.83m、深さ1.06mを測る。

埋土は大きく上層と下層に分かれる。上層は白色粘質シルトと黒褐色粘質シルトの混じる層で固く締まっている。中に人頭大の角礫が混入する。下層は灰色粘質シルトで締まりがなく、下へいくほど湿気が高くなる。埋土から遺物は出土しなかったが、底面において、杉の丸太半材(樹皮有)・枝・葉等が溝の方向に沿って並んで敷かれているような状態で出土した。底面では湧水が多く、いつも木材が隠れるくらいの約20cmは溜まる。また、水が木材等の間を流れる様子も観察できた。上層が固く締まり、底面に木材を敷き並べていることから、調査時、下層は暗渠で、上層は塀のような構造物があったと考えた。

時期はこのように上層と下層の埋土構造は井戸にもみられるので、同じ時期だと推測していたが、時期判別可能な遺物がなかったため、木材の放射性炭素年代測定を行った。その結果は第5章に詳述しているが、木材は1950年代または1990年代であった。

分析結果から、この溝は戦後以降に伐採された杉材を底面に敷き並べた暗渠であると推察される。しかし、埋土の状況が他の遺構と類似していることに違和感を

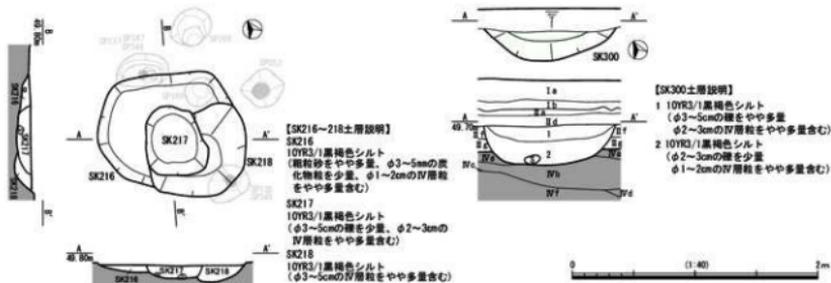


図32 SK216・217・218、SK300平面・断面図

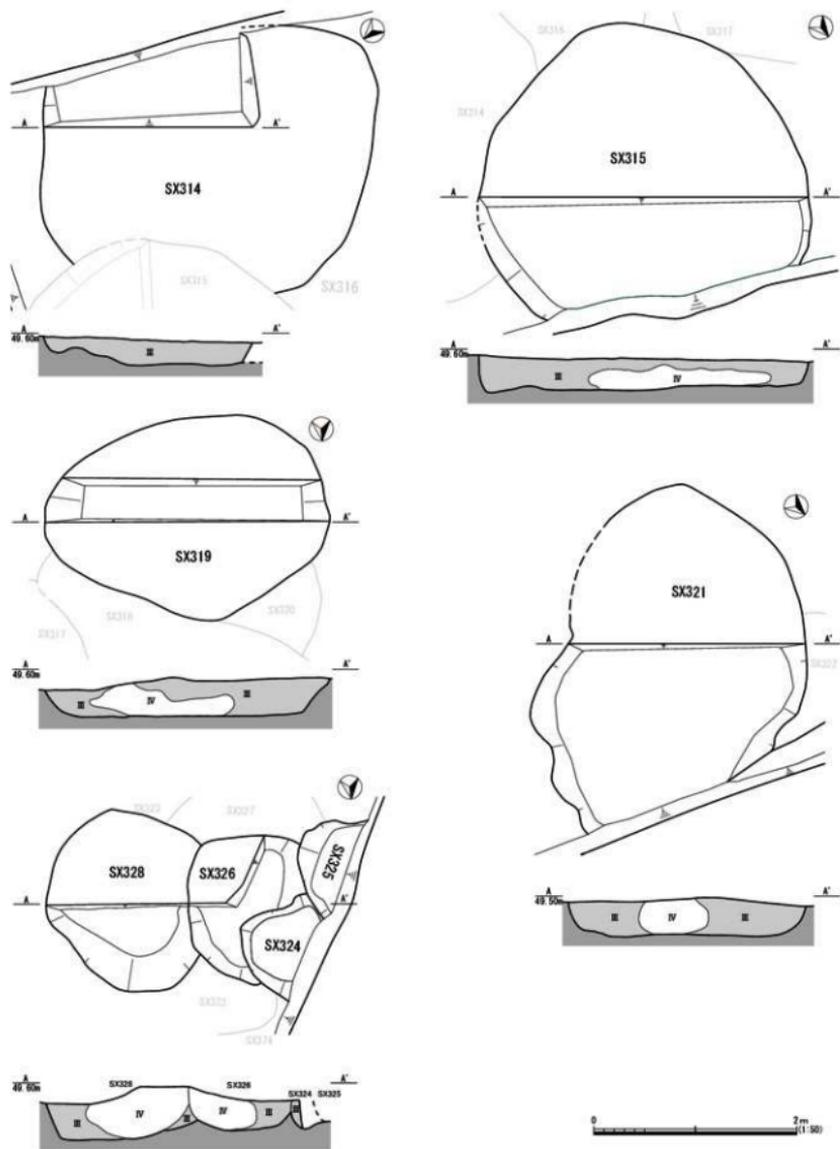


図 33 樹木痕平面・断面図

覚える。

(5) 遺構外出土遺物 (図35、写真図版20)

出土遺物は、越中瀬戸 12点 (174～185)、瀬戸美濃 5点 (186～190)、越前 3点 (191～193)、珠洲 1点 (194)、肥前系 1点 (195)、備前系 1点 (196)、中国 5点 (197～201)、土師器 5点 (202～206)、土製品 2点 (207・208)、石製品 1点 (209)、金属製品 2点 (210・211)、須恵器 1点 (212)である。

越中瀬戸 174・176～178は丸皿である。174は鉄軸、176～178は灰軸を施す。177・178は見込部に軸止めがみられる。178は焼成不良である。177の見込部には菊花文が線刻される。177・178の高台はケズリ出して、他も同様と考えられる。

175・179・180は内壳皿である。175は低い高台を貼り付け、179・180はケズリ出し高台である。180は高台中央をケズリ出す。175は鉄軸、179・180は灰軸を施す。180の見込部には軸止めがみられる。

185は筒形香炉である。口縁部上面に面を持ち、体部は蛇行する。ロクロ成形で、全面に鉄軸を施す。

181～184は擂鉢である。すべてに鉄錆軸を施しているが、183・184は摩耗によりわずかにみられる程度である。183・184は内面に擂目がみられ、183は8条1単位、184は10条程度1単位である。底部には糸切り後、縁辺にケズリを施す。181の口縁部は内傾した面をもつ。182は端部を上方と下方につまみ出し、やや外傾した面を持つ。

時期は16世紀末葉から17世紀前葉と推定される。

瀬戸美濃 188～190は皿である。188は丸皿で、内面と体部外面上半に灰軸を施す。189は高台からのケズリが体部中央までおよび縁を持つ。両面に灰軸を施す。190は見込部縁辺に軸止めがみられ、中央は露胎である。高台は中央をケズリ込む。

186・187は天目茶碗である。186は小天目で、腰部に鉄錆軸を施す。時期は大窯1段階と推定される。187は腰部が露胎である。軸は口縁部で褐色、下方へ濃くなり、軸端では軸溜まりが生じる。

越前 191は擂鉢である。内面に6条以上1単位の擂目がみられる。

192・193は糞胴部の細片のため、径を復元できない。

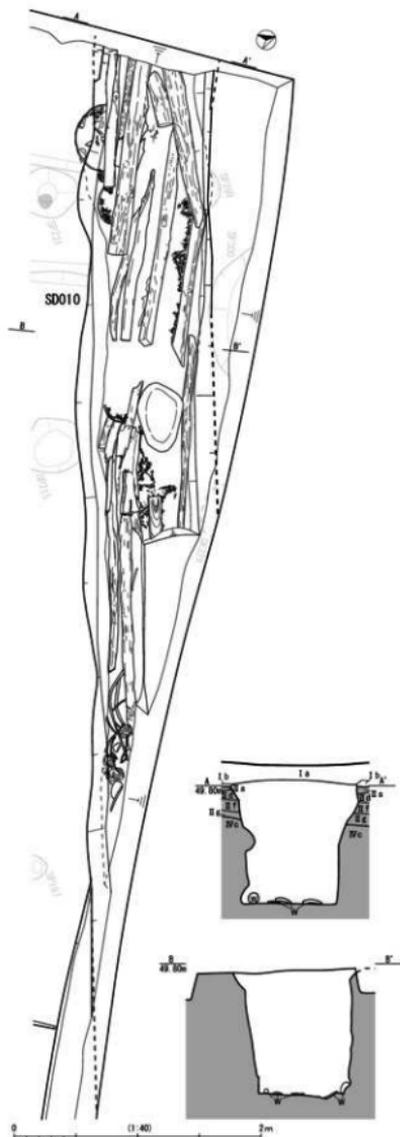


図34 暗室平面・断面図

両者とも外面に斜めのナデ上げ、内面に斜め上方への指圧痕がみられる。193の内外面に鉄軸が施される。両者とも断面に漆接の痕跡が残る。また、内面には研磨痕がみられ、内面の凹凸を砥石として使用していたと考えられる。

珠洲 194は喪胴部である。外面に平行タタキ、内面に無文当具痕がみられる。

肥前系 195は陶器筒形碗である。見込部に烏カの鉄絵を描く。内面と体部外面に灰釉を薄く施す。高台はケズリ出して、中央が頸巾状に残る。

備前系 196は播鉢である。胎土等から加賀作見窯産と推定される。内面に3条以上の播目がみられる。両面にロクロ目が明瞭に残る。時期は16世紀末葉から17世紀初頭と推定される。

中国 197は青花碗の口縁部の細片のため、径は復元できない。口縁部内面に1条の圈線がみられる。

198は青磁碗の腰部である。

199～201は白磁である。口縁部は大きく外反する。

199は見込部に軸止めがみられ、見込部は露胎である。

また、断面には漆接の痕跡がみられる。

土師器 202～206は灯明皿である。口縁部内面は202・204～206で共通し、凹線が巡る。203は外面に稜をもつ三角形を呈する。口縁部は横ナデ、体部から底部は指圧痕がみられる。202は口縁部に、204は口縁部から底部の一部に油・煤が付着する。204の口縁部外面には段を持つ。

土製品 207・208は増場である。てづくね成形である。207の口縁部には気泡がみられる。

石製品 209は板状砥石である。全面砥面として使用される。やや粗い砂岩製である。

金属製品 210は鉄製和釘である。頭部は潰れている。断面形は平らな板状である。

211は鋼製鉢と考えられる。口縁部の上面に面を持ち、内側に伸びる。体部はやや内湾する。

須恵器 212は杯の細片であるため、径は復元できない。体部はやや外傾する。器種は杯Aまたは杯B身である。時期は8世紀から9世紀と推定される。



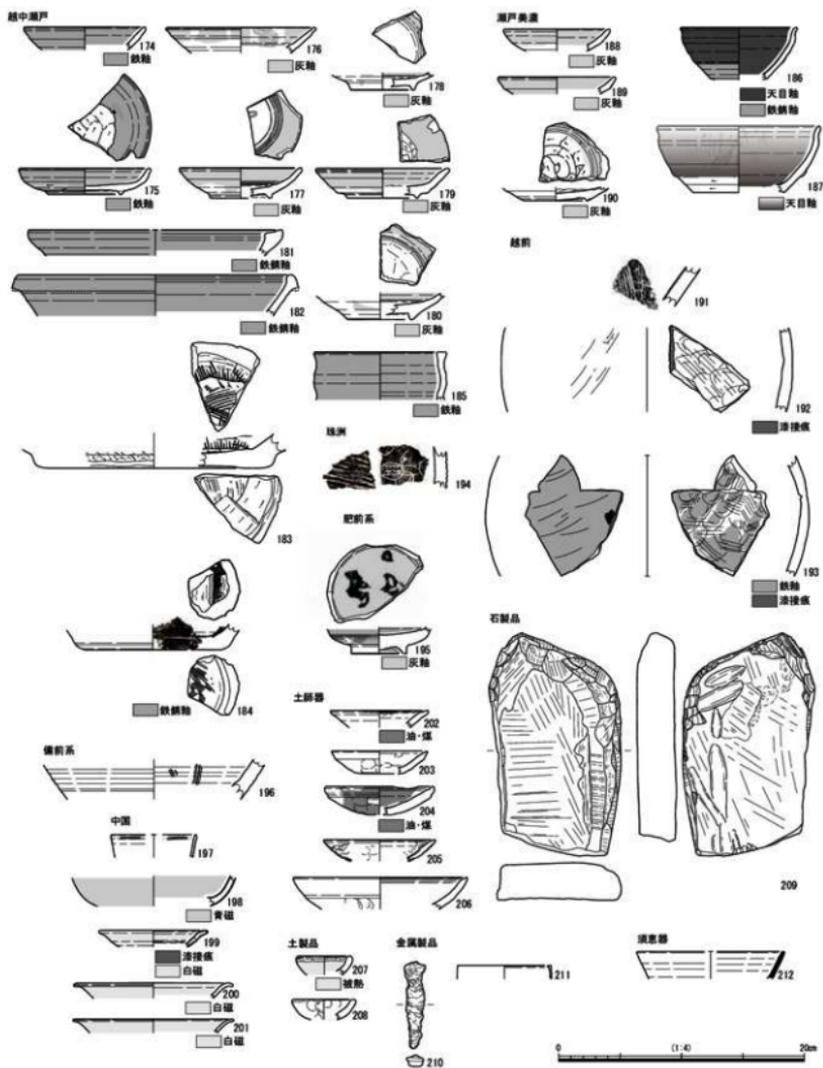


図35 遺構外出土遺物

表4 遺構一覧表(1)

井戸

遺構名	グリッド	規模(m)			出土遺物 ※ 陶磁器・土器 石・瓦製品 骨・角製品 金・銀製品 鉄・銅製品	備考
		長軸	短軸	深さ		
SE 002	C-D-5	1.56	0.99	1.26	陶	
SE 039	D-2	1.29	0.93	1.28	陶、木	
SE 046	D-2	0.98	0.72	1.16	陶	
SE 047	D-2-3	1.29	1.09	1.55	石、木	
SE 131	D-4	0.73	0.62	1.51	陶、石	
SE 133	C-4	0.74	0.72	1.40	陶、石	
SE 175	D-3	1.04	1.02	1.53	陶、石、木	
SE 201	C-5	1.04	0.87	1.53	陶、石、木	
SE 213	B-3-4	1.12	0.98	1.18	陶、石、木	
SE 214	B-C-4	1.19	1.09	1.51	陶、金、木	

土坑

遺構名	グリッド	規模(m)			出土遺物 ※ 陶磁器・土器 石・瓦製品 骨・角製品 金・銀製品 鉄・銅製品	備考
		長軸	短軸	深さ		
SK 001	D-E-5	1.27	1.03	0.35	陶	
SK 173	B-C-5	1.02	0.94	0.15	陶	
SK 212	B-3	1.33	1.33	0.15	陶	
SK 216	C-5	1.09	0.90	0.09	—	
SK 217	C-5	0.56	0.50	0.13	—	
SK 218	C-5	0.76	0.75	0.16	—	
SK 300	A-3	1.08	0.43	0.34	—	
SK 329	A-3	0.56	—	0.15	—	

樹木痕

遺構名	グリッド	規模(m)			出土遺物 ※ 陶磁器・土器 石・瓦製品 骨・角製品 金・銀製品 鉄・銅製品	備考
		長軸	短軸	深さ		
SX 314	C-B-5	3.25	2.67	0.29	—	
SX 315	B-C-5	3.27	2.99	0.37	—	
SX 316	C-5	2.53	1.97	—	—	
SX 317	C-4-5	3.36	2.51	—	—	
SX 318	C-4	3.34	1.71	—	—	
SX 319	C-4	2.80	2.01	0.39	—	
SX 320	C-4	0.72	0.98	—	—	
SX 321	B-4	3.37	2.34	0.37	—	
SX 322	B-4	1.38	1.34	—	—	
SX 323	B-3	3.51	2.00	—	—	
SX 324	B-3	0.97	0.39	0.36	—	
SX 325	B-2-3	1.12	0.62	0.33	—	
SX 326	B-3	1.47	1.17	0.43	—	
SX 327	B-3	1.57	0.83	—	—	
SX 328	B-3	1.78	1.42	0.56	—	
SX 374	B-3	1.17	1.05	—	—	

暗渠

遺構名	グリッド	規模(m)			出土遺物 ※ 陶磁器・土器 石・瓦製品 骨・角製品 金・銀製品 鉄・銅製品	備考
		長軸	短軸	深さ		
SD 010	A-B-3,B4	8.83	1.04	1.06	—	1900年以降

掘立柱建物

遺構名	グリッド	規模(m)			備考
		長軸	短軸	柱間	
SB 380	C-E-2-3	4.90	3.25	0.85~2.60	区画1
SB 381	D-C-2-3	5.90	(1.35)	1.90~2.15	区画2
SB 382	C-2-3	5.90	(1.90)	1.15~1.90	区画2
	D-2				
	B-3-4				
SB 383	C-3~5	(13.00)	5.30	0.70~3.80	区画3
	D-4-5				
	D-3~5				
SB 384	E-3-4	5.45	3.45	0.90~3.20	区画4

柱穴(1)

遺構名	グリッド	規模(m)			出土遺物 ※ 陶磁器・土器 石・瓦製品 骨・角製品 金・銀製品 鉄・銅製品	備考
		長軸	短軸	深さ		
SP 003	C-3	0.45	0.39	0.35	—	柱・礎石
SP 004	D-2	0.57	0.38	0.29	—	柱
SP 005	C-2	0.39	0.32	0.28	—	柱
SP 007	D-2	0.45	0.42	0.32	陶	柱
SP 008	D-2	0.44	0.24	0.14	陶	
SP 009	C-2	0.19	0.16	0.23	—	
SP 011	C-2	0.30	0.25	0.25	—	柱
SP 012	D-2	0.15	0.14	0.06	—	
SP 013	C-3	0.45	0.32	0.30	—	柱

柱穴(2)

遺構名	グリッド	規模(m)			出土遺物 ※ 陶磁器・土器 石・瓦製品 骨・角製品 金・銀製品 鉄・銅製品	備考
		長軸	短軸	深さ		
SP 014	C-3	0.39	0.33	0.21	—	
SP 015	C-3	0.41	0.37	0.14	—	柱
SP 017	C-2	0.41	0.27	0.28	—	柱
SP 018	C-0	0.42	0.37	0.40	—	柱
SP 019	C-5	0.46	0.30	0.39	—	柱
SP 020	C-3	0.46	0.33	0.17	—	柱・礎石
SP 021	C-3	0.37	0.29	0.46	石	柱
SP 023	D-2	0.77	0.55	0.28	陶	柱
SP 024	C-3-4	0.43	0.39	0.14	—	
SP 025	C-3	0.59	0.51	0.36	陶	柱・礎石
SP 026	C-3	0.22	0.21	0.22	陶	柱
SP 027	C-3	0.41	0.30	0.33	陶	柱
SP 029	C-3	0.46	0.43	0.39	—	
SP 030	C-2	0.19	0.17	0.19	—	
SP 031	D-5	0.19	0.19	0.11	—	
SP 033	C-2	0.65	0.47	0.24	陶	
SP 034	C-2	0.62	0.57	0.36	陶	
SP 035	C-2	0.65	0.65	0.36	—	
SP 036	C-3	0.31	0.26	0.12	—	礎石
SP 037	D-2	0.60	0.56	0.30	—	柱
SP 038	C-2	0.49	0.46	0.15	—	
SP 040	C-3	0.49	0.34	0.32	—	柱
SP 041	C-4	0.35	0.29	0.46	—	
SP 042	D-2	0.40	0.33	0.20	—	
SP 043	C-3	0.28	0.20	0.28	—	
SP 044	D-5	0.21	0.17	0.18	—	
SP 045	C-2	0.46	0.40	0.12	—	
SP 048	D-3	0.92	0.33	0.25	—	
SP 049	C-2	1.56	0.83	0.67	陶	
SP 050	B-2-3	1.94	1.22	0.84	陶	
SP 051	C-5	0.26	0.15	0.22	—	
SP 052	C-5	0.29	0.28	0.16	—	柱
SP 053	C-5	0.22	0.20	0.18	—	柱
SP 054	C-4	0.26	0.23	0.14	—	
SP 055	C-5	0.35	0.31	0.10	—	
SP 056	C-5	0.25	0.22	0.33	—	
SP 057	C-B-5	0.26	0.16	0.09	—	
SP 058	D-5	0.38	0.28	0.32	陶	柱
SP 059	C-5	0.51	0.41	0.40	—	
SP 060	C-5	0.25	0.20	0.09	—	
SP 061	C-5	0.22	0.20	0.11	—	
SP 062	C-5	0.23	0.20	0.21	—	柱
SP 063	C-5	0.33	0.28	0.15	—	柱
SP 064	C-5	0.44	0.39	0.16	—	礎石
SP 065	C-4-5	0.35	0.30	0.21	—	
SP 066	C-4-5	0.26	0.23	0.14	—	
SP 067	C-4	0.24	0.22	0.18	—	
SP 068	C-4	0.62	0.60	0.24	陶	柱
SP 069	C-4	0.55	0.33	0.26	—	柱
SP 070	C-4	0.27	0.23	0.22	—	柱
SP 071	C-4	0.50	0.39	0.59	—	柱
SP 072	C-4	0.31	0.26	0.24	—	
SP 073	C-4	0.68	0.47	0.22	—	
SP 074	D-4	0.19	0.19	0.20	—	
SP 075	C-4	0.44	0.23	0.24	—	
SP 076	C-4	0.25	0.22	0.36	—	
SP 077	D-5	0.20	0.20	0.10	—	
SP 078	C-5	0.26	0.25	0.16	—	
SP 079	C-4	0.28	0.38	0.25	陶	柱
SP 080	C-4	0.43	0.34	0.29	—	柱
SP 081	C-5	0.57	0.51	0.10	—	
SP 082	B-4	0.79	0.46	0.22	—	
SP 083	D-5	0.26	0.25	0.25	陶	柱
SP 084	C-4	0.46	0.34	0.22	—	
SP 085	C-4	0.26	0.27	0.16	—	柱
SP 086	C-5	0.31	0.26	0.27	—	柱
SP 087	C-5	0.25	0.20	0.24	—	柱
SP 088	D-5	0.18	0.16	0.12	—	
SP 089	D-5	0.32	0.30	0.39	—	
SP 090	D-5	0.23	0.26	0.48	—	
SP 091	D-5	0.44	0.32	0.34	—	柱
SP 092	D-5	0.20	0.18	0.14	—	
SP 093	D-5	0.14	0.12	0.07	—	
SP 094	D-5	0.19	0.19	0.18	—	柱

表5 遺構一覧表(2)

遺構名	グリッド	規模(m)			出土遺物 陶器類・土器類 瓦・瓦片類 鉄器類・銅器類 石・石片類 骨・骨片類 土・土製品	備考
		長軸	短軸	深さ		
SP 095	D-4	0.33	0.29	0.25	—	柱
SP 096	D-4	0.21	0.18	0.25	—	柱
SP 097	D-4	0.16	0.16	0.12	—	柱
SP 098	D-4	0.32	0.25	0.20	—	柱
SP 099	D-5	0.29	0.25	0.12	—	柱
SP 100	D-5	0.18	0.12	0.35	—	柱
SP 101	D-4・5	0.31	0.20	0.33	—	柱
SP 102	D-4	0.31	0.30	0.26	—	柱
SP 103	D-4	0.30	0.23	0.29	—	柱
SP 104	E-4	0.19	0.16	0.12	—	柱
SP 105	E-4	0.19	0.19	0.10	—	柱
SP 106	E-4	0.22	0.21	0.21	—	柱
SP 107	E-4	0.29	0.24	0.09	—	柱
SP 108	D-4	0.15	0.14	0.11	—	柱
SP 109	D-4	0.22	0.16	0.20	—	柱
SP 110	D-4	0.33	0.25	0.22	陶	柱
SP 111	D-4	0.20	0.18	0.12	—	柱
SP 112	D-3・4	0.53	0.41	0.12	—	柱
SP 113	D-4	0.28	0.22	0.15	—	柱
SP 114	D-4	0.19	0.14	0.07	—	柱
SP 115	D-E-4	0.21	0.16	0.10	—	柱
SP 116	D-3	0.34	0.28	0.31	—	柱
SP 117	E-5	0.15	0.12	0.17	—	柱
SP 118	D-5	0.16	0.13	0.06	—	柱
SP 119	E-4	0.40	0.32	0.10	—	柱・礎石
SP 120	D-4	0.25	0.20	0.26	—	柱
SP 121	D-4	0.21	0.20	0.24	—	柱・礎石
SP 122	D-4	0.20	0.18	0.19	—	柱
SP 123	E-3	0.31	0.23	0.07	—	柱
SP 124	E-3	0.16	0.12	0.08	—	柱
SP 125	E-3	0.21	0.18	0.12	—	柱
SP 126	D-4	0.17	0.15	0.26	陶	柱
SP 127	D-3	0.23	0.22	0.10	—	柱
SP 128	D-3	0.22	0.11	0.09	—	柱
SP 129	D-4	0.19	0.19	0.12	—	柱
SP 130	E-3	0.41	0.36	0.12	—	柱
SP 132	D-3	0.26	0.24	0.22	—	柱
SP 134	D-4	0.22	0.22	0.13	—	柱
SP 135	D-4	0.32	0.28	0.18	—	柱
SP 136	D-4	0.29	0.27	0.13	陶	柱
SP 137	C-5	0.41	0.28	0.45	—	柱・杭
SP 138	C-D-5	0.35	0.27	0.34	陶	柱
SP 139	D-4	0.17	0.16	0.08	—	柱
SP 140	D-4	0.17	0.17	0.18	—	柱
SP 141	D-4	0.19	0.16	0.26	—	柱
SP 142	D-4	0.15	0.10	0.09	—	柱
SP 143	D-4	0.26	0.21	0.21	—	柱
SP 144	D-4	0.29	0.16	0.17	—	柱
SP 145	D-4	0.26	0.13	0.12	—	柱
SP 146	D-3	0.26	0.23	0.22	—	柱
SP 147	D-3	0.27	0.24	0.22	—	柱
SP 148	D-3	0.29	0.23	0.11	—	柱
SP 149	E-3	0.25	0.20	0.08	—	柱
SP 150	D-E-3	0.23	0.23	0.11	—	柱
SP 151	D-3	0.25	0.21	0.14	—	柱
SP 152	C-6	0.34	0.28	0.14	—	礎石
SP 153	D-3	0.32	0.29	0.16	—	柱
SP 154	D-3	0.48	0.29	0.35	—	柱
SP 155	D-3	0.52	0.45	0.30	—	礎石
SP 156	D-3	0.29	0.27	0.25	—	柱
SP 157	D-3	0.27	0.20	0.14	—	柱
SP 158	D-3	0.32	0.27	0.23	—	柱
SP 159	D-4	0.21	0.16	0.22	—	柱
SP 160	C-D-3	0.52	0.39	0.60	—	柱
SP 161	D-3	0.31	0.27	0.20	—	柱
SP 162	D-4	0.14	0.12	0.09	—	柱
SP 163	D-3	0.23	0.20	0.18	—	柱
SP 164	H-5	0.59	0.51	0.38	陶	柱
SP 165	C-4	0.35	0.31	0.24	—	柱
SP 166	C-6	0.32	0.31	0.12	—	柱
SP 167	C-5	0.40	0.29	0.21	—	柱
SP 168	C-4	0.40	0.30	0.18	—	礎石
SP 169	C-5	0.23	0.23	0.14	—	柱
SP 170	C-4	0.23	0.17	0.26	—	柱

柱穴(4)

遺構名	グリッド	規模(m)			出土遺物 陶器類・土器類 瓦・瓦片類 鉄器類・銅器類 石・石片類 骨・骨片類 土・土製品	備考
		長軸	短軸	深さ		
SP 171	C-6	0.36	0.36	0.23	—	柱
SP 172	C-6	0.38	0.36	0.16	—	柱・礎石
SP 174	D-3	0.23	0.17	0.30	—	柱
SP 176	D-3	0.33	0.26	0.40	—	柱
SP 177	C-2	0.32	0.30	0.20	—	柱・礎石
SP 178	C-2	0.58	0.58	0.20	—	柱
SP 179	C-2	0.40	0.38	0.13	陶	柱
SP 180	D-2	0.41	0.36	0.24	—	柱・礎石
SP 181	D-3	1.06	0.87	0.38	—	柱
SP 182	D-2	0.41	0.30	0.21	—	柱
SP 183	C-4	0.28	0.24	0.11	—	柱
SP 184	C-2	0.35	0.26	0.25	—	柱
SP 185	C-2	0.68	0.49	0.43	—	礎石
SP 186	H-4	0.42	0.30	0.22	—	柱
SP 187	H-4	0.18	0.17	0.18	—	柱
SP 188	H-4	0.21	0.21	0.18	—	柱
SP 189	H-4	0.17	0.14	0.09	—	柱
SP 190	C-4	0.46	0.37	0.10	—	柱
SP 191	C-4	0.81	0.68	0.77	陶石	柱・礎石
SP 192	C-3	0.38	0.34	0.24	—	柱
SP 193	C-4	0.41	0.31	0.18	—	柱
SP 194	H-3	0.47	0.42	0.49	—	柱
SP 195	C-2	0.15	0.11	0.20	—	柱
SP 196	C-2	0.34	0.28	0.19	—	柱
SP 197	C-2	0.86	0.60	0.42	—	柱
SP 198	C-2	0.55	0.51	0.35	—	柱
SP 199	C-2	0.57	0.45	0.41	—	柱
SP 200	C-2	0.54	0.52	0.27	—	礎石
SP 202	H-4	0.20	0.18	0.19	—	柱
SP 203	H-4	0.17	0.09	0.19	—	柱
SP 204	H-5	0.25	0.19	0.23	—	柱
SP 205	E-4	0.54	0.31	0.78	—	柱
SP 206	D-5	0.22	0.21	0.12	—	柱
SP 207	C-6	0.20	0.19	0.36	—	柱・杭
SP 208	C-5-6	0.37	0.30	0.40	—	柱・杭
SP 209	C-5-6	0.18	0.17	0.57	—	柱
SP 210	C-3	0.50	0.31	0.11	陶	柱
SP 211	C-3	0.61	0.58	0.11	—	柱
SP 215	C-3	0.49	0.43	0.52	—	柱
SP 219	C-3	0.39	0.25	0.26	—	柱
SP 220	C-3	0.41	0.31	0.29	—	柱
SP 221	C-3	0.29	0.27	0.26	—	柱
SP 222	D-4	0.17	0.17	0.23	—	柱
SP 223	C-5	0.35	0.29	0.12	—	柱
SP 224	C-2	0.41	0.32	0.22	—	柱
SP 225	H-3	0.28	0.26	0.16	—	柱
SP 226	C-5-6	0.25	0.24	0.26	—	柱・杭
SP 227	H-3	0.58	0.34	0.39	—	柱
SP 228	C-2	0.39	0.31	0.30	—	柱
SP 229	H-3	0.23	0.19	0.16	—	柱
SP 230	H-3	0.22	0.18	0.10	—	柱
SP 231	H-3	0.44	0.39	0.30	—	柱
SP 232	C-5	0.31	0.31	0.30	—	柱
SP 233	C-5	0.31	0.25	0.16	—	柱
SP 234	D-5	0.20	0.17	0.10	—	柱
SP 235	C-5	0.33	0.31	0.14	—	柱
SP 236	C-5	0.22	0.21	0.28	—	柱
SP 237	C-5	0.20	0.17	0.11	—	柱
SP 238	C-5	0.18	0.16	0.12	—	柱
SP 239	H-4	0.26	0.23	0.22	—	柱
SP 240	H-4	0.20	0.27	0.17	陶	柱
SP 241	H-2	0.74	—	0.42	—	柱
SP 242	H-2	0.37	—	0.58	木	柱材
SP 243	D-4	0.25	0.21	0.18	—	柱
SP 244	C-4	0.19	0.18	0.14	—	柱
SP 245	C-4	0.23	0.20	0.09	—	柱
SP 246	C-4	0.18	0.14	0.13	—	柱
SP 247	C-5	0.19	0.19	0.40	—	柱
SP 248	C-5	0.29	0.27	0.09	—	柱

表6 遺構一覧表(3)

柱穴(5)

遺構名	グリッド	規模(m)			出土遺物 銅 銅線・土器 瓦 瓦片類 鉄 鉄釘類, 瓦・木製品	備考
		長軸	短軸	深さ		
SP 249	C-5	0.36	0.23	0.16	—	柱
SP 250	C-5	0.24	0.20	0.12	—	
SP 251	C-5	0.20	0.19	0.08	—	
SP 252	C-5	0.23	0.21	0.10	—	
SP 253	C-4-5	0.22	0.21	0.12	—	
SP 254	D-4	0.18	0.16	0.10	—	柱
SP 255	D-4	0.44	0.31	0.32	—	柱
SP 256	D-4	0.18	0.18	0.08	—	
SP 257	D-3-4	0.20	0.19	0.10	—	
SP 258	D-3	0.21	0.15	0.14	—	
SP 259	D-3	0.16	0.15	0.22	—	
SP 260	D-3	0.18	—	0.20	—	
SP 261	D-3	0.20	—	0.22	—	柱
SP 262	C-5	0.24	0.21	0.13	—	
SP 263	C-3	0.28	0.22	0.28	—	
SP 264	D-3	0.27	0.24	0.19	—	柱
SP 265	C-3	0.19	0.18	0.06	—	
SP 266	C-5	0.35	0.29	0.22	—	
SP 267	C-3	0.38	0.23	0.20	—	柱
SP 268	D-3	0.20	—	0.33	—	
SP 269	D-3	0.21	0.21	0.08	—	
SP 270	D-2	0.17	0.17	0.09	—	
SP 271	D-2-3	0.27	0.18	0.10	—	
SP 272	D-2	0.29	0.25	0.07	—	
SP 273	D-2	0.25	0.18	0.07	—	
SP 274	D-2	0.27	0.17	0.09	—	
SP 275	D-2	0.21	0.21	0.11	—	
SP 276	D-2	0.18	0.15	0.13	—	
SP 277	D-2	0.34	0.25	0.34	—	
SP 278	B-3	0.26	0.23	0.08	—	柱
SP 279	C-3	0.20	0.18	0.09	—	
SP 280	C-3	0.29	0.20	0.16	—	
SP 281	C-3	0.20	0.17	0.14	—	
SP 282	C-2-3	0.35	0.29	0.16	—	柱・礎石
SP 283	C-3	0.22	0.19	0.10	—	
SP 284	D-3	0.21	0.21	0.13	—	柱
SP 285	C-4	0.40	0.19	0.20	—	柱
SP 286	C-4	0.34	0.26	0.16	—	
SP 287	B-2	0.35	—	0.41	—	柱
SP 288	B-2	0.58	—	0.62	—	柱
SP 289	B-2	0.15	—	0.19	—	
SP 290	B-2	0.34	—	0.19	—	
SP 291	C-2	0.46	—	0.22	—	礎石
SP 292	D-2	0.45	0.29	0.39	—	
SP 293	C-2	0.34	—	0.20	—	
SP 294	C-4	0.19	0.18	0.22	—	
SP 295	C-4	0.23	0.17	0.14	—	
SP 296	C-5	0.21	0.20	0.08	—	
SP 297	C-5	0.23	0.19	0.11	—	
SP 298	C-5	0.41	0.28	0.17	—	柱
SP 299	A-3	0.32	0.13	0.18	—	
SP 301	B-4-5	0.24	—	0.24	—	
SP 302	B-5	0.26	—	0.34	—	
SP 303	C-5	0.40	—	0.17	—	礎石
SP 304	C-5	0.22	—	0.10	—	
SP 305	C-3	0.19	0.18	0.09	—	
SP 306	C-3	0.19	0.17	0.20	—	柱
SP 307	C-5	0.18	—	0.19	—	
SP 308	D-5	0.27	—	0.09	—	
SP 309	D-5	0.22	—	0.17	—	
SP 310	D-5	0.15	—	0.31	—	
SP 311	C-5	0.29	0.17	0.14	—	
SP 312	C-5	0.22	0.17	0.17	—	柱
SP 313	C-4	0.20	0.18	0.07	—	

柱穴(6)

遺構名	グリッド	規模(m)			出土遺物 銅 銅線・土器 瓦 瓦片類 鉄 鉄釘類, 瓦・木製品	備考
		長軸	短軸	深さ		
SP 330	E-4	0.62	—	0.26	—	
SP 331	E-2-3	0.31	0.14	0.40	—	柱・礎石
SP 332	D-3	0.28	0.19	0.37	—	柱
SP 333	C-2	0.51	0.42	0.21	—	柱
SP 334	C-4	0.28	0.27	0.25	—	柱
SP 335	D-2	0.26	0.18	0.22	—	
SP 336	D-2	0.40	0.34	0.35	—	柱
SP 337	C-2	0.71	0.71	0.27	—	
SP 338	C-3	0.25	0.16	0.18	—	
SP 339	C-2	0.51	0.42	0.40	—	
SP 340	D-2	0.38	0.30	0.36	—	柱
SP 341	D-2	0.33	0.29	0.25	—	
SP 342	D-2	0.29	0.22	0.21	—	
SP 343	C-4	0.27	0.21	0.17	—	柱・礎石
SP 344	C-4	0.19	0.18	0.18	—	柱
SP 345	C-3	0.37	0.37	0.16	—	柱
SP 346	D-2	0.19	0.17	0.16	—	
SP 347	C-4	0.07	0.07	0.14	—	柱・杭 柱・杭
SP 348	C-4	0.10	0.06	0.45	—	柱
SP 349	D-5	0.25	0.21	0.42	—	
SP 350	D-3	0.22	0.20	0.05	—	
SP 351	D-3	0.32	0.21	0.22	—	
SP 352	C-D-3	0.34	0.31	0.42	—	
SP 353	C-3	0.36	0.31	0.50	—	柱
SP 354	C-3	0.24	0.19	0.28	—	
SP 355	D-4	0.28	0.24	0.30	—	
SP 356	C-3	0.12	0.11	0.18	—	柱
SP 357	C-2	0.28	0.22	0.18	—	柱
SP 358	C-2	0.21	0.18	0.26	—	
SP 359	C-2	0.24	0.17	0.28	—	
SP 360	C-2	0.28	0.25	0.17	—	
SP 361	B-4	0.28	0.20	0.24	—	柱
SP 362	B-4	0.20	0.17	0.28	—	
SP 363	D-3	0.15	0.13	0.18	—	柱
SP 364	C-2	0.19	0.15	0.18	—	柱
SP 365	D-3	0.04	0.04	0.18	—	柱
SP 366	C-2	0.21	0.19	0.11	—	
SP 367	C-3	0.19	0.15	0.27	—	柱
SP 368	C-3	0.13	0.11	0.14	—	柱
SP 369	D-3	0.48	0.42	1.20	—	柱
SP 370	C-4	0.13	0.11	0.19	—	柱
SP 371	C-5	0.32	0.31	0.16	—	柱
SP 372	C-3	0.14	0.12	0.22	—	
SP 373	C-4	0.17	0.13	0.20	—	
SP 375	C-2	0.10	0.09	0.15	—	
SP 376	C-3	0.09	0.08	0.14	—	柱
SP 377	D-3	0.20	—	0.18	—	
SP 378	D-1	0.44	—	0.21	—	

表7 遺物観察表(1)

土器・陶磁器類(1)

報告番号	グリッド	基本層序	遺構名 層位	埋蔵 深度	注量 (cm) () : 埋蔵値	調査	軸面	胎土	焼成	残存部位	産地	備考
1	T1	—	—	陶器	口径:(10.7)、器高:(2.05)、底径:(6.2)	内:ロクロナデ、削り取り 外:ロクロナデ、削り	鉄	やや粗 石莖	良好 やや軟	口~底	越中瀬戸	
2	T1	—	—	土 灯明皿	口径:(11.7)、器高:1.5、底径:(6.8)	内:外:横ナデ、指圧痕		粗 石莖	良好	口~底		
3	T5	—	—	陶器	口径:(50.3)、器高:(8.45)、底径:-	内:ナデ、指圧痕 外:平行タタキ		粗 石莖 雲母	良好	口~肩	九州	
5	D-2	—	SP007 SP023	陶器	口径:(11.5)、器高:3.3、底径:-	内:外:ロクロナデ	長石	密	良好 軟質	口~体	瀬戸美濃 志野	
6	D-2	—	SP023	陶器	口径:(10.0)、器高:3.2、底径:(3.4)	内:外:ロクロナデ 外:削出し	灰	密	良好	口~底	肥前系	
7	C-3	—	SP210 1層	陶器	口径:(9.8)、器高:(1.5)、底径:-	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、削り	灰	やや密	良好	口~体	越中瀬戸	
8	D-2	—	SP023	土 灯明皿	口径:(7.0)、器高:(1.5)、底径:-	内:外:横ナデ、油・煤		密	良好	口~体		
9	C-2	—	SP034 一括	土 灯明皿	口径:-、器高:(2.2)、底径:-	内:外:横ナデ、指圧痕 油・煤		密	良好	口~体		
10	C-2	—	SP049	土 灯明皿	口径:(10.5)、器高:(2.3)、底径:-	内:横ナデ、割線 外:口:横ナデ、指圧痕		密	良好	口~体		
11	C-2	—	SP179	土 灯明皿	口径:-、器高:(1.7)、底径:-	内:横ナデ 外:横ナデ、不定方向ナデ		密	良好	口~底		
12	B-3	—	SP050	陶器	口径:-、器高:(5.1)、底径:-	内:外:ロクロナデ 軸土結核		密	良好 還元	胴	九州	
13	B-3	—	SP050	青花 皿	口径:-、器高:(2.2)、底径:-	内:外:ロクロナデ、染付	透明	密	不良 軟	口	中国	
15	C-3	—	SP025	陶器	口径:-、器高:(1.6)、底径:(7.0)	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、削り	灰	密 石莖	良好	底	瀬戸美濃	
16	C-3	—	SP026	陶器 蓋・提	口径:-、器高:(6.2)、底径:-	内:平行タタキ 外:横文当具板 研磨		密	良好	胴	九州	砥石転用
17	C-4	—	SP191	陶器	口径:-、器高:(2.2)、底径:-	内:ナデ		密	良好 還元	胴	九州	
18	C-3	—	SP026	土 灯明皿	口径:(8.4)、器高:(1.6)、底径:-	内:外:横ナデ		密	良好	口		
19	C-4	—	SP079	土 灯明皿	口径:(9.0)、器高:(1.8)、底径:(4.6)	内:横ナデ 外:横ナデ、不定方向ナデ		密 雲母	良好	口~底		
20	D-5	—	SP138	青花 皿	口径:(9.8)、器高:(2.8)、底径:(2.7)	内:ロクロナデ、染付 外:ロクロナデ	透明	密	良好	口~底		
25	D-4	—	SP126 1層	陶器	口径:(10.0)、器高:(2.1)、底径:(5.6)	内:ロクロナデ、菊花文 輪止め	灰	密 石莖	良好	口~底	越中瀬戸	
26	D-5	—	SP002	青花 碗	口径:-、器高:(2.6)、底径:-	内:外:ロクロナデ 外:染付	透明	密	良好	体	中国	
27	D-2	—	SP039 上層	陶器	口径:(10.9)、器高:(2.3)、底径:(2.8)	内:ロクロナデ、削り取り 外:ロクロナデ、削り	鉄	やや密 石莖	良好 やや軟	口~底	越中瀬戸	
28	D-2	—	SP039 上層	陶器	口径:-、胴径大径:(16.0)、器高:(4.8)	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、削り	鉄錆	やや粗 石莖	良好 やや軟	口~体	越中瀬戸	
29	D-2	—	SP039 上層	土 灯明皿	口径:(9.7)、器高:(1.8)、底径:-	内:横ナデ、割線、焼熱 外:横ナデ、指圧痕		密 雲母	良好	口~体		
30	D-2	—	SP039 上層	土 灯明皿	口径:(10.4)、器高:2.0、底径:(6.0)	内:外:横ナデ、指圧痕 油・煤		密	良好	口~底		
35	D-2	—	SP046 上層	陶器	口径:(11.0)、器高:3.7~4.1、底径:4.3	内:外:ロクロナデ 外:削り出し	灰	やや粗	良好	口~底	肥前系	
51	D-4	—	SP121 下層	陶器	口径:-、器高:(3.3)、底径:-	内:外:ロクロナデ、灰輪	灰	緻密	良好	腰	越中瀬戸	
52	D-4	—	SP121 下層	陶器 鉢	口径:-、器高:(4.85)、底径:-	内:窪目、ロクロナデ 鉄錆輪	鉄錆	やや粗 石莖	良好 やや軟	体	越中瀬戸	
53	D-4	—	SP121 下層	陶器	口径:(10.2)、器高:(1.8)、底径:(6.3)	内:ロクロナデ、鉄錆輪 内:ロクロナデ、灰輪 外:ロクロナデ	灰	密	やや良好	口~底	瀬戸美濃	
54	D-4	—	SP121 上層	陶器	口径:-、器高:(4.65)、底径:-	内:横文当具(凹凸洗) 外:平行タタキ		やや密 石莖	還元	胴	九州	
55	D-4	—	SP121 上層	陶器 鉢	口径:(22.4)、器高:(5.6)、底径:-	内:窪目、ロクロナデ 外:ロクロナデ、縦ナデ		密	良好 やや軟	口~体	越前	
56	D-4	—	SP121 上層	陶器 鉢	口径:-、器高:(4.9)、底径:-	内:窪目、鉄錆輪 外:ロクロナデ、工具痕	鉄錆	密	良好 硬質	体	越前	
57	D-4	—	SP121 上層	陶器 鉢	口径:-、器高:(3.6)、底径:-	内:窪目、ロクロナデ 外:ロクロナデ、工具痕	(鉄錆)	密	良好	底	越前	
58	D-4	—	SP121 上層	陶器	口径:(19.4)、器高:(3.0)、底径:-	内:外:ロクロナデ、鉄輪	鉄	やや粗 石莖	良好	口	越前	
59	D-4	—	SP121 上層	陶器	口径:-、器高:(8.4)、底径:-	内:横ナデ 外:割めナデ		雲母 やや粗	良好 硬質	胴	越前	断面透視あり
60	D-4	—	SP121 下層	陶器	口径:-、器高:(4.0)、底径:(28.0)	内:横ナデ、溝 外:縦めナデ、板ナデ		密	良好	底	越前	
61	D-4	—	SP121 上層	土 灯明皿	口径:(9.0)、器高:(2.2)、底径:(6.0)	内:横ナデ 外:横ナデ、不定方向ナデ		密 雲母	良好	口~底		
68	C-4	—	SP123	陶器 天目茶碗	口径:(10.5)、器高:(2.5)、底径:-	内外:ロクロナデ 鉄輪	鉄	やや密	良好 やや軟	口	瀬戸美濃	

表8 遺物観察表(2)

土器・陶磁器類(2)

報告番号	グリッド	基本図序	遺構名	種類	注量(cm) () 推定値	調整	胎土	胎土	焼成	残存部位	産地	備考
69	C-4	—	SE133 土丸 SE201	陶器	口径:(10.4)、器高:6.55、底径:4.8	内:ロクロナダ 外:削り	灰	密	良好 やや軟	口~底	瀬戸美濃	
70	C-4	—	SE133	土丸	口径:-、器高:(2.2)、底径:-	内:窪、不定方向ナダ 外:不定方向ナダ		密 雲母	良好	口		
72	D-3	—	SE175 土層	陶器	口径:-、器高:(4.35)、底径:(11.0)	内:楕圓、ロクロナダ 外:ロクロナダ、指圧痕 底:糸切り	鉄結	密 石英 長石	良好 軟	体~底	越中瀬戸	
73	D-3	—	SE175 土層	陶器	口径:-、器高:3.15、底径:-	内:馬具~ナダ 外:平行タタキ		密 石英	還元	肩	株洲	
74	D-4	—	SE175	陶器	口径:-、器高:5.8、底径:-	内:楕圓ナダ、炭化物付着 外:ナダ、炭灰		やや密	良好 硬	肩	越前	
75	D-4	—	SE175	陶器	口径:-、器高:13.4、底径:-	内:楕圓ナダ、煤付着 外:板ナダ	(鉄結)	やや密	良好 やや硬	胴	越前	
76	D-4	—	SE175	陶磁器	口径:29.3、器高:7.35、底径:-	内:ロクロナダ、羅目 口:横線織 外:ロクロナダ		やや粗 石英 雲母	不長軟	口~体	越前	
77	D-4	—	SE175	陶器	口径:-、器高:19.25、底径:-	内:同心円文馬具、磨痕 外:平行タタキ、磨痕		密	還元 良好	胴		砥石転用
86	C-5	—	SE201 小杯	陶器	口径:7.7、器高:3.45、底径:4.2	内:外:ロクロナダ 外:削出し	鉄	緻密	良好	口~底	越中瀬戸	
87	C-5	—	SH201 土層	陶器	口径:(10.9)、器高:(1.0)、底径:-	内:外:ロクロナダ 内:ロクロナダ、羅目 口:横線織 外:ロクロナダ、板ナダ 指圧痕	鉄	やや密	良好 やや軟	口	瀬戸美濃	
88	C-5	—	SH201 土層	陶磁器	口径:-、器高:18.4、底径:-	内:外:楕圓ナダ(摩耗)		密	良好	口		
89	C-5	—	SE201 土層	土丸	口径:(12.8)、器高:(1.85)、底径:-	内:外:楕圓ナダ、手づくね		やや粗	良好	口		
90	C-5	—	SE201 土層	土丸	口径:(4.9)、器高:(1.45)、底径:-	内:外:楕圓ナダ、手づくね		やや粗	良好	口		
107	B-3	—	SE213 土層	土丸	口径:(10.4)、器高:1.75、底径:-	内:楕圓ナダ、斜めナダ 外:楕圓ナダ、指圧痕		密 雲母	良好	口		
108	B-3	—	SE213 土層	土丸	口径:(12.4)、器高:(2.0)、底径:(7.0)	内:楕圓ナダ 外:楕圓ナダ、指圧痕		密 石英 雲母	良好	口~底		
109	B-4	—	SE213 土層	土丸	口径:長(4.9)、器高:幅(2.4) 底径:厚(3.2)	削り		やや密 雲母 石英、スサ	良好 やや軟	体	瀬戸美濃	
147	C-4	—	SE214 土層	陶器	口径:(2.3)、底径:-	内:ロクロナダ 外:ロクロナダ、削り	天目	やや密	良好 やや軟	体	瀬戸美濃	
148	C-4	—	SE214	土丸	口径:(11.8)、器高:(1.7)、底径:-	内:外:ロクロナダ	白	密	良好	口	中国	断面接ぎ
149	C-4	—	SE214	土丸	口径:(8.30)、器高:(8.60)、底径:-	内:外:楕圓ナダ、指圧痕		密	良好	口~体		
150	C-4	—	SE214	土丸	口径:(10.7)、器高:(1.65)、底径:(6.9)	内:外:楕圓ナダ、指圧痕		密	良好	口~体		
151	C-4	—	SE214	土丸	口径:-、器高:(0.75)、底径:-	内:外:楕圓ナダ、指圧痕 削~痕		密 雲母	不良 軟	底		
171	E-5	—	SK001	陶磁器	口径:-、器高:(4.0)、底径:-	内:外:ロクロナダ、羅目		やや密	良好	体	越前	
172	C-5	—	SK173 土層	土丸	口径:(10.1)、器高:1.65、底径:-	内外:楕圓ナダ		密 雲母 石英 雲母	良好	口		
173	B-3	—	SK212 土層	土丸	口径:(7.2)、器高:2.0、底径:-	内外:ナダ(摩耗)		密 石英 雲母	良好	口		
174	B-4	—	SK028	陶器	口径:(9.0)、器高:(1.9)、底径:-	内:ロクロナダ 外:ロクロナダ、削り	鉄	密	良好 硬	口	越中瀬戸	
175	C-4	II	—	陶器	口径:(10.8)、器高:(2.1)、底径:(6.0)	内:ロクロナダ、削り取り 外:ロクロナダ、削り	鉄	やや密	不良 やや軟	口~底	越中瀬戸	
176	B-3	—	SK028 土層	陶器	口径:(12.3)、器高:(2.1)、底径:-	内:ロクロナダ 外:ロクロナダ、削り	鉄	密	不良	口	越中瀬戸	
177	B-4	—	SK028 土層	陶器	口径:(10.8)、器高:2.5、底径:(2.9)	内:ロクロナダ、菊花 文、磨止め、削り取り 外:ロクロナダ、削り	灰	密	良好 やや軟	口~底	越中瀬戸	
178	C-4	II	—	陶器	口径:-、器高:(1.65)、底径:(5.2)	内:外:ロクロナダ 外:ロクロナダ、削り	灰	やや粗	やや良 好	底	越中瀬戸	
179	C-3	II	—	陶器	口径:(10.9)、器高:(2.4)、底径:(5.8)	内:外:ロクロナダ 外:削り	灰	密	良好 やや軟	口~体	越中瀬戸	
180	B-2	II	—	陶器	口径:-、器高:(2.15)、底径:(5.6)	内:軸止め、削り取り	灰	やや密 石英	良好 やや軟	口~底	越中瀬戸	
181	D-2	II	—	陶磁器	口径:(20.8)、器高:(2.1)、底径:-	内:外:ロクロナダ	鉄結	やや密	良好 やや軟	胴	越中瀬戸	
182	B-3	—	SK028 土層	陶磁器	口径:(22.1)、器高:(3.4)、底径:-	内:外:ロクロナダ 内:羅目、使用痕、ロク ロナダ 外:ロクロナダ、糸切り	鉄結	密 石英	良好	口	越中瀬戸	
183	C-4	II	—	陶磁器	口径:-、器高:(2.9)、底径:(19.2)	内:羅目、使用痕 外:ロクロナダ、糸切り	鉄結	やや粗 石英	やや良 やや軟	底	越中瀬戸	
184	—	I	—	陶磁器	口径:-、器高:(2.1)、底径:(13.8)	内:羅目、使用痕 外:ロクロナダ 底:糸切り	鉄結	やや粗 石英	良好 やや軟	底	越中瀬戸	
185	C-4	II	—	陶器	口径:(10.8)、器高:(3.9)、底径:-	内:外:ロクロナダ	鉄	やや密 石英	良好	口	越中瀬戸	

表9 遺物観察表(3)

土器・陶磁器類(3)

報告番号	グリッド	遺構名 基本 層序	遺構名 層位	種類 器種	() 推定器	法量(m)	調整	胎土	胎土	焼成	残存部位	産地	備考
186	C-3	II	—	陶 天目茶碗	口径:(9.4)、器高:(4.3)、底径:-		内:ロクロナダ 外:ロクロナダ、削り	天目 鉄錆	密	良好 やや硬	口~体	瀬戸美濃	
187	C-3	II	—	陶 天目茶碗	口径:(11.7)、器高:(5.4)、底径:-		内:ロクロナダ 外:ロクロナダ、削り	天目	やや密	良好 やや軟	口~体	瀬戸美濃	断面接続ぎ
188	C-2-3	II	—	陶 海 飯 皿	口径:(8.7)、器高:(1.8)、底径:-		内:ロクロナダ 外:ロクロナダ、削り	灰	密	良好 やや軟	口~底	瀬戸美濃	
189	B-3	—	S3028 1層	陶 飯 皿	口径:(9.4)、器高:(1.4)、底径:-		内:ロクロナダ 外:ロクロナダ、削り	灰	やや密	良好 やや軟	体	瀬戸美濃	
190	C-4	II	—	陶 飯 皿	口径:-、器高:(1.1)、底径:(2.3)		内:ロクロナダ、削り取の 外:ロクロナダ、削り	灰	やや密	良好 やや軟	口~底	瀬戸美濃	
191	B-4	—	S3028 1層	磁 鉢	口径:-、器高:(3.05)、底径:-		内:外:ロクロナダ		やや密	不良 やや軟	体	越前	
192	C-2	II	—	陶 甕	口径:-、器高:(6.9)、底径:-		内:指圧痕、柳瓶 磁石転用 外:斜めナダ上げ	鉄	やや密 石莖	不良 やや軟	胴	越前	断面接続ぎ
193	C-2	II	—	陶 甕	口径:-、器高:(9.9)、底径:-		内:指圧痕、柳瓶 磁石転用 外:斜めナダ上げ	鉄	密	不良 やや軟 生焼	胴	越前	断面接続ぎ
194	D-2	II	—	陶 甕	口径:-、器高:(3.4)、底径:-		内:指圧痕、横ナダ 外:平行タタキ		やや粗 石莖 雲母	良好 還元	胴	伊州	
195	B-3	II	—	陶 筒形鉢	口径:-、器高:(2.2)、底径:(5.0)		内:ロクロナダ、鉄絵 外:削り	灰	密	良好 硬	底	肥前系	
196	B-2	II	—	陶 筒形鉢	口径:-、器高:(3.3)、底径:-		内:ロクロナダ、横目 外:ロクロナダ		密	良好 硬	胴	備前系	
197	B-3	—	S3028 1層	青 花 碗	口径:-、器高:(1.8)、底径:-		内:外:ロクロナダ 染付	透明	密	良好	口	中国	
198	B-3	II	—	青 磁 碗	口径:-、器高:2.45、底径:-		内:外:ロクロナダ	青	密	良好	体	中国	
199	B-3	II	—	白 磁 碗	口径:(8.9)、器高:(1.35)、底径:-		内:ロクロナダ、輪止め 外:ロクロナダ	白	密	良好	口	中国	断面接続ぎ
200	C-4	II	—	白 磁 碗	口径:(13.0)、器高:1.25、底径:-		内:外:ロクロナダ	白	密	良好	口	中国	
201	B-3	II	—	白 磁 碗	口径:(13.1)、器高:1.15、底径:-		内:外:ロクロナダ	白	密	良好	口	中国	
202	B-2	I	—	土 灯明皿	口径:(10.0)、器高:(1.9)、底径:-		内:外:横ナダ		密	石莖 雲母	良好	口	
203	B-4	—	S3028	土 灯明皿	口径:(7.8)、器高:(1.85)、底径:(4.1)		内:外:横ナダ 指圧痕		密	良好	口~体		
204	B-5	I	—	土 灯明皿	口径:(8.8)、器高:(2.3)、底径:(2.4)		内:外:横ナダ		密	良好	口~底		
205	C-5	II	—	土 灯明皿	口径:(9.10)、器高:(1.70)、底径:-		内:外:横ナダ、指圧痕		密	良好	口~底		
206	B-4	—	S3028	土 灯明皿	口径:(14.4)、器高:2.6、底径:-		内:横ナダ、被熱 外:横ナダ、指圧痕		やや密	良好 やや軟	口~体		
207	D-4	II	—	土 埴輪	口径:(4.6)、器高:(1.55)、底径:-		内:外:ナダ、被熱		やや粗	良好	口~体		
208	C-4	II	—	土 埴輪	口径:(5.2)、器高:(1.65)、底径:-		内:外:ナダ、指圧痕 被熱		やや密	良好 やや軟	口~体		
212	C-3	II	—	瀬 戸 茶 碗	口径:-、器高:2.25、底径:-		内:外:ロクロナダ		密	やや良 還元	口		

石製品(1)

報告番号	グリッド	遺構名 層位	石材 器種	() 推定器	法量(m)	調整
4	C-3	1層	S920	不明	長さ:(6.20) 幅:(3.70)、厚さ:(1.00)	研磨痕 鉄分の多い
24	C-3	1層	S919	砂岩	長さ:(17.40)、厚さ:(3.60)	ノミ
36	D-2	1層	S9047	砂岩	長さ:(28.80)、幅:(11.10) 厚さ:(28.00)	ノミ
37	D-2	1層	S9047	砂岩	長さ:3.6、幅:5.2 厚さ:1.1	2次加工 刀部
62	D-4	下層	S8131	磁石	長さ:(18.30)、幅:(11.30) 厚さ:(32.90)	ノミ
63	D-4	下層	S8131	砂岩	長さ:(20.00)、厚さ:(32.60) 幅:(13.30~13.90)	ノミ
64	D-4	下層	S8131	炭石	長さ:12.7 幅:3.9、厚さ:3.4	研磨
65	D-4	下層	S8131	安山岩	長さ:(8.7)、幅:(10.5) 厚さ:(10.5)	敲打 研磨
66	D-4	下層	S8131	不明	長さ:16.9 幅:14.2、厚さ:3.8	被熱 炭付着
91	C-5	1層	S8201	安山岩	長さ:(20.00) 幅:(15.00)、厚さ:(6.05)	敲打 研磨

石製品(2)

報告番号	グリッド	遺構名 層位	石材 器種	() 推定器	法量(m)	調整
92	C-5	1層	S8201	安山岩	長さ:(15.40) 幅:(17.60)、厚さ:(3.75)	削磨 研磨
93	C-5	1層	S8201	泥岩	長さ:17.7 幅:7.6、厚さ:5.2	研磨
94	C-5	1層	S8201	砂岩	長さ:(18.6) 幅:17.4、厚さ:2.4	研磨
110	B-4	1層	S8213	安山岩	長さ:(4.6)、幅:(4.5) 厚さ:(2.5)	擦痕
111	B-4	1層	S8213	不明	長さ:(7.8)、幅:(6.1) 厚さ:(2.0)	擦痕
112	B-3	1層	S8213	泥岩	長さ:(6.5)、幅:(5.9) 厚さ:(1.2)	研磨
209	B-3	1層	S3028	砂岩	長さ:(18.3)、幅:(10.35) 厚さ:3.0	研磨

表10 遺物観察表(4)

金属製品					木製品(2)							
報告番号	グリッド	基本層序	遺構名層位	種類 種類 () 推定値	質量(m)	報告番号	グリッド	遺構名層位	種類	質量(m) () 推定値	調整	目目
21	C-3	—	SP027	鉄片 筒状	長さ:5.6, 幅:3.9, 厚さ:1.2	98	C-5	SE201	器か	長さ:(10.0) 幅:(4.0, 厚さ:(0.7)	削皮 削り	不明
22	C-3	—	SP043	鉄片 筒状	長さ:5.1, 幅:5.6, 厚さ:2.1	99	E-C-4	SE201	加工材	長さ:(10.50) 幅:2.25, 厚さ:0.15	削り	芯持
23	C-3	—	SP044	鉄 和釘	長さ:(3.0), 幅:(0.45), 厚さ:(0.6)	100	E-C-4	SE201	薄板	長さ:(12) 幅:(2.0, 厚さ:0.1	削り	板目
152	C-4	—	SE214	鉄 和釘	長さ:(5.6), 幅:(0.4), 厚さ:(0.7)	101	C-5	SE201	加工材	長さ:(10.3) 幅:1.4, 厚さ:1.4	斜めカット, 削皮	芯持
210	C-4	II	—	鉄 和釘	長さ:(7.1), 幅:(1.4), 厚さ:(0.3)	102	C-5	SE201	竹片	長さ:10.35 幅:1.1, 厚さ:10.15	削り	—
211	C-4	II	—	鉄 和釘	長さ:(7.6), 幅:(1.1), 厚さ:0.15	103	C-5	SE201	竹片	長さ:15 幅:1.1, 厚さ:10.15	削り	—
						104	C-5	SE201	竹片	長さ:5.3 幅:1.1, 厚さ:0.15	削り	—
						105	C-5	SE201	薄板片	長さ:(2.65) 幅:(0.9), 厚さ:0.05	削り	板目
						106	C-5	SE201	竹片	長さ:2.95 幅:0.7, 厚さ:0.1	削り	—
						113	E-3-4	SE213	付け木	幅:(1.15, 厚さ:0.75)	削り	板目
						114	E-3-4	SE213	付け木	長さ:28.2 幅:1.35, 厚さ:1.2	先端削り, カット 一部炭化残存	芯持
						115	E-3-4	SE213	付け木	長さ:(12.8) 幅:1.1, 厚さ:0.95	先端カット, 炭化	芯持
						116	E-3-4	SE213	付け木	長さ:(13.7) 幅:(10.3) 幅:1.0, 厚さ:2.3	先端削り	芯持
						117	E-4	SE213	木炭	幅:2.2, 厚さ:2	削り, 炭化	芯持
						118	E-3-4	SE213	付け木	長さ:(10.1) 幅:(3.45), 厚さ:(2.8)	削り	板目
						119	E-3-4	SE213	付け木	長さ:(7.6) 幅:1.1, 厚さ:1.1	先端カット 炭化	芯持
						120	E-3-4	SE213	加工木	長さ:(8.2) 幅:(12.2)	カット	芯持
						121	E-3-4	SE213	加工木	長さ:(12.9) 幅:1.4, 厚さ:0.95	削皮削り 部分カット	芯持
						122	E-3-4	SE213	箸	長さ:(10.3) 幅:0.75, 厚さ:0.45	削り 圧痕	板目
						123	E-3-4	SE213	箸	幅:(11.3) 幅:0.8, 厚さ:0.35	削り	板目
						124	E-3-4	SE213	板材	長さ:(15.5) 幅:(11.9)	表・裏面に刀痕状 炭化, 両端カット	板目
						125	E-3-4	SE213	下駄	長さ:15.8 幅:(9.2), 厚さ:1.4	削り, チョウナ痕 裏のホゾノ口	板目
						126	E-3-4	SE213	漆器類	口径:-, 器高:(3.7) 口径:-7.3	全面・漆:朱 削り	板目
						127	E-3-4	SE213	漆器類	口径:(18.6) 器高:(1.3), 口径:-	口縁:漆 その他:朱	板目
						128	E-3-4	SE213	器か	長さ:(6.85) 幅:(3.75), 厚さ:(2.2)	器:高台か	板目
						129	E-3-4	SE213	加工品	長さ:2.2, 幅:1.9 厚さ:0.3-0.6	削り 1字 孔	板目
						130	E-3-4	SE213	櫃か	長さ:5.25 幅:3.3, 厚さ:16.7	削り	板目
						131	E-3-4	SE213	薄板	長さ:(26.75, 幅:(4.05) 厚さ:(0.15)	削り	板目
						132	E-3-4	SE213	薄板	長さ:(24.1) 幅:(2.6), 厚さ:0.1	削り	板目
						133	E-3-4	SE213	薄板	長さ:(16.4) 幅:(3.6), 厚さ:0.2	削り	板目
						134	E-3-4	SE213	薄板	長さ:(14.75) 幅:(1.1), 厚さ:0.15	削り	板目
						135	E-3-4	SE213	薄板	長さ:(14.6) 幅:(1.9), 厚さ:0.15	削り	板目
						136	E-3-4	SE213	薄板	長さ:(13.6) 幅:(2.6), 厚さ:0.15	削り	板目
						137	E-3-4	SE213	薄板	長さ:(14.4) 幅:(1.0), 厚さ:0.1	削り	板目
						138	E-3-4	SE213	薄板	長さ:(12.5) 幅:(1.0), 厚さ:0.2	削り	板目
						139	E-3-4	SE213	薄板	長さ:(10.25) 幅:(1.65), 厚さ:0.2	削り	板目
						140	E-3-4	SE213	薄板	長さ:(9.5) 幅:(1.85), 厚さ:0.25	削り	板目
						141	E-3-4	SE213	薄板	長さ:(9.6) 幅:(2.45), 厚さ:0.15	削り	板目
						142	E-3-4	SE213	薄板	長さ:(13.1) 幅:(4.1), 厚さ:0.15	削り	板目

木製品(1)

報告番号	グリッド	遺構名層位	種類	質量(m) () 推定値	調整	目目
14	E-3-4	SP242	柱材	長さ:10.7 幅:8.55, 厚さ:7.1	削り	芯持
31	D-2	SE039	薄板	長さ:(5.15) 幅:(1.60)	削り	板目
32	D-2	SE039	加工材	長さ:(8.3) 幅:0.7, 厚さ:0.6	削り	不明
33	D-2	SE039	薄板	長さ:(12.15) 幅:0.8, 厚さ:0.5	削り	不明
34	D-2	SE039	薄板	長さ:12, 幅:1.1 厚さ:0.9	部分カット 上下カット	板目
38	D-2	SE047	箸	長さ:(23.3) 幅:0.8, 厚さ:0.6	削り	板目
39	D-2	SE047	箸	長さ:(12.85) 幅:0.65, 厚さ:0.6	削り	板目
40	D-2	SE047	不明	長さ:(5.4) 幅:4.45, 厚さ:0.8	削り 跡残「一」×」	板目
41	D-2	SE047	部材	長さ:(7.35) 幅:(4.20), 厚さ:0.4	削り, 削皮跡, 炭	芯持
42	D-2	SE047	部材	長さ:(12.7) 幅:2.8, 厚さ:1	削皮跡, 切断痕	板目
43	D-2	SE047	木片	長さ:(16.8) 幅:(5.4), 厚さ:1.05	削り	板目
44	D-2	SE047	薄板	長さ:(6.4) 幅:(1.5), 厚さ:0.1	削り	板目
45	D-2	SE047	薄板	長さ:(5.3) 幅:(2.9), 厚さ:0.2	削り	板目
46	D-2	SE047	薄板	長さ:(9.95) 幅:(1.05), 厚さ:0.15	削り	板目
47	D-2	SE047	薄板	長さ:(5.8) 幅:(1.3), 厚さ:0.15	削り	板目
48	D-2	SE047	薄板	長さ:(4.4) 幅:(2.6), 厚さ:0.15	削り	板目
49	D-2	SE047	薄板	長さ:(3.8) 幅:(1.65), 厚さ:0.15	削り	板目
50	D-2	SE047	削片	長さ:(12.1) 幅:(2.0), 厚さ:0.1	削り	板目
67	E-3-4	SE131	加工材	長さ:(8.65) 幅:1.7, 厚さ:1.5	枝カット, 削皮	板目
71	D-4	SE133	木片	長さ:(5.95) 幅:(3.9), 厚さ:(1.25)	削り	板目
78	C-3-3	SE175	容器	長さ:11.4, 厚さ:0.7-2 幅:4.7, 高さ:4.2	チョウナ痕	板目
79	C-3-3	SE175	薄板	長さ:(8.8) 幅:(2.45), 厚さ:0.2	削り	板目
80	C-3-3	SE175	削片	長さ:3.7, 幅:4.05 厚さ:0.1	削り	不明
81	C-3-3	SE175	削片	長さ:5.4, 幅:3.45 厚さ:0.1	削り	不明
82	C-3-3	SE175	部材	長さ:(7.3) 幅:(3.95), 厚さ:1.9	縦に四角孔 上面:4箇所, 削り	板目
83	C-3-3	SE175	加工材	長さ:(34.2) 幅:2.55, 厚さ:2.5	枝カット	芯持
84	C-3-3	SE175	加工材	長さ:(4.7), 幅:3.05 幅:3.8, 厚さ:3.05	枝カット	芯持
85	C-3-3	SE175	加工材	長さ:(44.1) 幅:3.6, 厚さ:3.5	部分的に削り	芯持
95	C-5	SE201	漆器類	口径:180, 器高:(1.8) 厚さ:0.35	両面削	板目
96	C-5	SE201	鏡	長さ:(20.55) 幅:6.65, 厚さ:1.4	削り, 長方形孔 上面:縦打痕	板目
97	C-5	SE201	加工材	長さ:(14.15) 幅:(3.9), 厚さ:(1.7)	枝カット 孔	不明

表11 遺物観察表(5)

木製品(3)						
実測 番号	グリッド	通称名 層 包	器種	重量(m) ()推定値	調査	注目
143	B-3-4	SE213	薄板	長さ:(12.4) 幅:(3.4)、厚さ:0.15	削り	板目
144	B-3-4	SE213	薄板	長さ:(11) 幅:(3.3)、厚さ:0.2	削り	板目
145	B-3-4	SE213	薄板	長さ:(9.5) 幅:(2.7)、厚さ:0.15	削り	板目
146	B-3-4	SE213	薄板	長さ:(9)、幅:(4.3) 厚さ:0.15	削り	板目
153	B-C-4	SE214	付け木	長さ:(20.75) 幅:1.45、厚さ:1.5	削り、先端炭化 樹皮	芯持
154	B-4	SE214 下層	部材	長さ:(16.9) 幅:2、厚さ:0.8	削り 漆	5ヶ所木釘
155	B-4	SE214 下層	加工材	長さ:(4.5) 幅:1.7、厚さ:0.85	削り	芯持
156	B-4	SE214 下層	箸	長さ:(6.3) 幅:0.75、厚さ:0.6	削り	板目
157	B-C-4	SE214	箸	長さ:(10.85) 幅:0.95、厚さ:0.6	圧痕 削り	板目
158	B-C-4	SE214	箸	長さ:(13.05) 幅:0.45、厚さ:0.35	削り	板目
159	B-C-4	SE214	加工材	長さ:(10.4) 幅:1.25、厚さ:1.1	枝カット	芯持
160	B-4	SE214 下層	加工材	長さ:(2.1) 幅:2、厚さ:0.88	削り	不明
161	B-4	SE214 下層	把手	長さ:15.35 幅:5.75、厚さ:0.85	削り	板目
162	B-C-4	SE214	蓋	長さ:(12.2) 幅:(6.65)、厚さ:0.25	削り	板目
163	B-C-4	SE214	下駄	長さ:(18.4) 幅:(10.35) 高さ:7.6、書高:4.6	削り、3箇所穿孔 溝溝を縦断穿孔	芯持
164	B-C-4	SE214	加工材	長さ:(23) 幅:3.8、厚さ:4.25	炭化、樹皮、松明	芯持
165	B-C-4	SE214	桶粉木	長さ:(31.25) 幅:3.3、厚さ:3.3	削り、下層:押痕	板目
166	B-C-4	SE214	加工材	長さ:(32.3) 幅:5.55、厚さ:5.1	炭化、削り 上層:3箇所抉り	芯持
167	B-C-4	SE214	板材	長さ:(24.15) 幅:(2.95)、厚さ:0.6	削り	板目
168	B-C-4	SE214	蓋	長さ:27.7 幅:12.7、厚さ:1.55	削り、2枚の板を接 合:3箇所のみ、接合 材により接合	板目
169	B-4	SE214 下層	薄板片	長さ:(1.9) 幅:(3.4)、厚さ:0.1	削り	板目
170	B-4	SE214 下層	薄板片	長さ:(1.4) 幅:(2.9)、厚さ:0.1	削り	板目

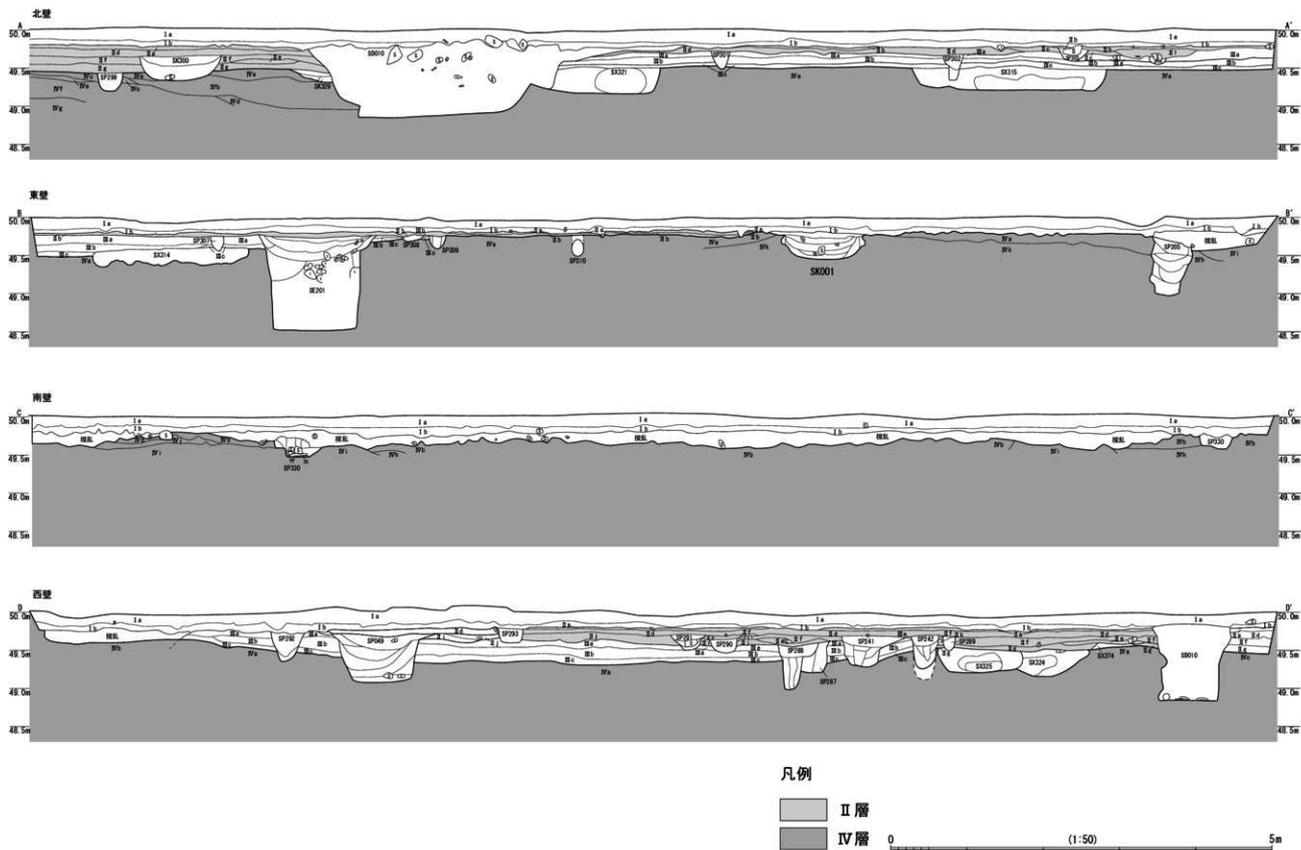
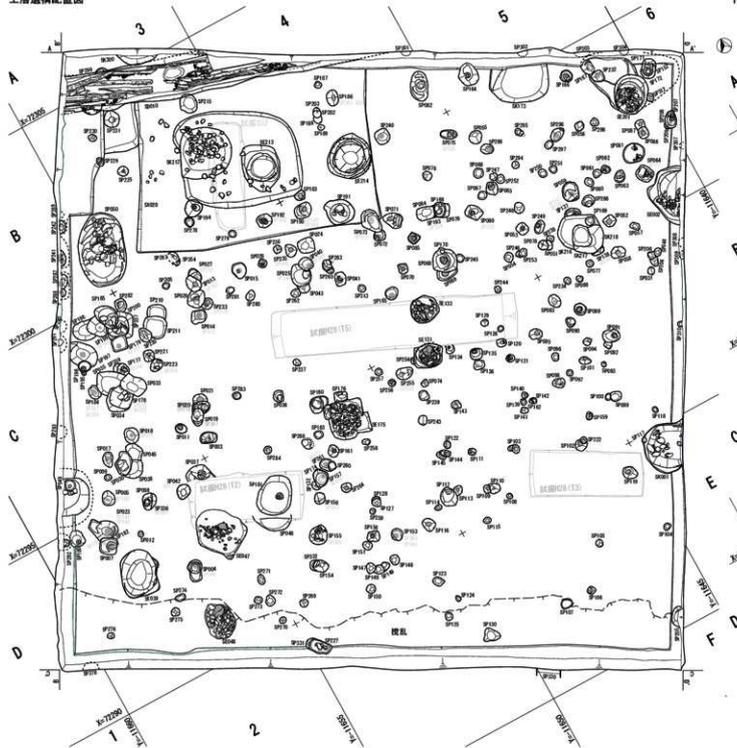


图8 調查区土層断面图

上層遺構配置図



下層遺構配置図



図 11 遺構配置図

第4章 自然科学分析

1 試掘調査 (T7) 出土炭化材の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤茂・安昭彦・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹

小林紘一・Zaur Lomtadze・中村賢太郎

(1) はじめに

増山城城下町遺跡は富山県砺波市増山に位置する。今回増山城城下町遺跡内において鉄塔の建替え工事が行われることとなり、砺波市ではこれに先立ち試掘調査が行われた。試掘調査の結果、T7 において土塁跡が検出された。ここでは、土塁が構築された年代を明らかにするために、土塁跡を構成する盛土層から出土した炭化材について、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った。

(2) 試料と方法

試料は T7 において土塁跡 (盛土最下層、深度 35cm) から出土した炭化材 1 点である。試料は現地において周囲の土ごと採取し、室内で炭化材のみを選別した。測定試料の情報、調製データは表 12 のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表 12 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-32131	調査区: T7 遺構: 城下町土塁跡 層位: 盛土最下層 深度: 35cm	種類: 炭化材 試料の性状: 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2%, 水酸化ナトリウム: 1.0%, 塩酸: 1.2%)

表 13 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-32131	-27.24 \pm 0.19	4071 \pm 22	4070 \pm 20	2831-2822 cal BC (5.9%) 2630-2572 cal BC (58.0%) 2512-2504 cal BC (4.6%)	2837-2815 cal BC (9.7%) 2673-2565 cal BC (75.0%) 2525-2496 cal BC (10.7%)

(3) 結果

表 13 には同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、図 36 には暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際に、この年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

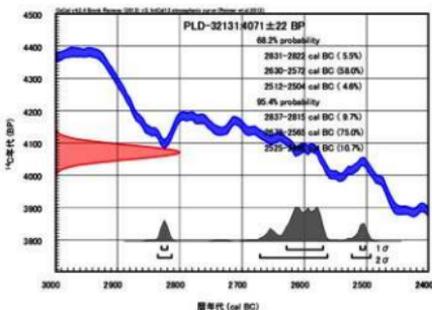


図 36 暦年較正結果

表 14 富山県小矢部市桜町遺跡における串田新式系土器に伴う¹⁴C年代
(狩野 2008 表 1 を引用改変)

土器型式	測定試料	測定コード	¹⁴ C年代
串田新Ⅱ	土器附着炭化物	Beta-166316	4330±40 ¹⁴ C BP
串田新Ⅱ	土器附着炭化物	Beta-166317	4150±40 ¹⁴ C BP
前田・岩崎野	土器附着炭化物	Beta-166318	3960±40 ¹⁴ C BP
中津式系	土器附着炭化物	Beta-166319	4480±40 ¹⁴ C BP

表 15 縄文時代中期後半～後期前葉の土器型式と
¹⁴C年代との対応関係 (工藤 2012 表 10-1 より引用改変)

大別	土器型式	¹⁴ C年代	測定例のある遺跡	
中期	後半	加曾利1	4490-4300 ¹⁴ C 年代値	TW No. 226遺跡、三次田遺跡、柳内遺跡
		加曾利2	4290-4100 ¹⁴ C 年代値	柳内遺跡、竜田3号遺跡、赤津遺跡
		加曾利3	4200-4100 ¹⁴ C 年代値	大塚遺跡、西ノ貝塚
		加曾利4	4100-4000 ¹⁴ C 年代値	赤津遺跡、二の丸遺跡、伊勢山遺跡、中小前田遺跡
		称名中1	4000-3800 ¹⁴ C 年代値	柳尾山遺跡、道前久保遺跡
後期	前葉	称名中2	3600-3300 ¹⁴ C 年代値	宇佐保遺跡
		堀之内1前	3000-2700 ¹⁴ C 年代値	宇佐保遺跡、三輪野山遺跡、高山遺跡、TW No. 243遺跡
		堀之内2前	2700-2500 ¹⁴ C 年代値	宇佐保遺跡、分庄地遺跡

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い(¹⁴Cの半減期5730±40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.2(較正曲線データ: IntCal13)を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

(4) 考察

土器跡の盛土最下層出土の炭化材は、¹⁴C年代が4070±20 ¹⁴C BP、2σ暦年代範囲(確率95.4%)が2837-2815 cal BC (9.7%)、2673-2565 cal BC (75.0%)、2525-2496 cal BC (10.7%)であった。この年代は、狩野(2008)が示した縄文時代中期後半の串田新式系土器に伴う¹⁴C年代(表14)、工藤(2012)が示した縄文土器型式と¹⁴C年代との対応関係(表15)、及び小林(2008)が示した縄文土器型式と暦年代との対応関係(表16)を参照すると、縄文時代中期末ごろに相当する。

表 16 縄文時代中期後半～後期前葉における
土器型式と暦年較正年代との対応関係
(小林 2008 より引用改変)

大別	土器型式	暦年較正年代	
中期	後半	加曾利I	2950～2860 cal BC ころ
		加曾利2古	2960～2800 cal BC ころ
		加曾利2新	2800～2760 cal BC ころ
		加曾利3	2760～2570 cal BC ころ
		加曾利4	2570～2470 cal BC ころ
後期	前葉	称名寺	2470～2300 cal BC ころ
		堀之内1	2290～2030 cal BC ころ
		堀之内2	2030～1870 cal BC ころ

増山城が機能した中世～近世の年代に対して、縄文時代中期は明らかに古過ぎ、土器の構築年代とは考えにくい。よって、土器跡出土の炭化材は、縄文時代中期末ごろの層を掘削した際に土に含まれていたものが、土器跡の最下層に土と共に盛られた可能性が考えられる。あるいは、土器最下層としていた層が縄文時代中期末頃の層で、その上に土器が構築された可能性が考えられる。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 「Bayesian Analysis of Radiocarbon dates」 『Radiocarbon』 51(1) 337-360
- 狩野隆 2008 「串田新式・大杉谷式土器」 『総覧縄文土器』 480-485 アム・プロモーション
- 小林謙一 2008 「縄文時代の暦年代」 『縄文時代の考古学2-歴史のものさし』 257-269 同成社
- 工藤雄一郎 2012 「後氷期の考古編年と¹⁴C年代」 『旧石器・縄文時代の環境文化史 高精度放射性炭素年代測定と考古学』 212-229 新泉社
- 中村俊夫 2000 「放射性炭素年代測定法の基礎」 『日本先史時代の¹⁴C年代』 3-20 日本第四紀学会
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Halldason, H., Hajdas, J., Hatt, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. 2013 「IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP」 『Radiocarbon』 55(4) 1869-1887.

2 暗渠 (SD010) 出土木材の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一

Zaur Lomtatidze・中村賢太郎

(1) はじめに

富山県砺波市に位置する増山遺跡の溝跡より検出された木材について、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った。

(2) 試料と方法

試料は、戦国時代の層を切る溝跡から出土した木材である。溝跡の覆土下部から加工された木材が複数本並んだ状態で出土した。これらの木材のうち、樹皮の残る 1 本を選び、樹皮直下の最終形成年輪を採取して試料とした (PLD-34353)。測定試料の情報、調製データは表 17 のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS: 型製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

(3) 結果

表 18 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、

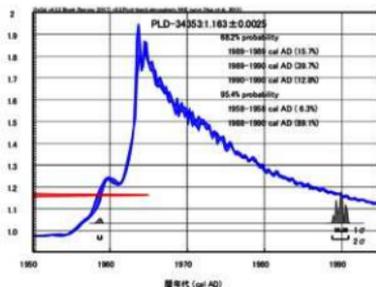


図 37 暦年較正結果

1950 年の大気中の ^{14}C 濃度を 1 と計算した試料の ^{14}C 濃度を表す $F^{14}\text{C}$ 値、暦年較正結果を、図 37 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 \pm 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出するこ

表 17 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-34353	遺構：溝跡 器種：加工木、溝構築材？ 年輪数：28年	種類：生材 試料の性状：最終形成年輪(1-5年輪目) 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)

表 18 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-34353	-24.86 \pm 0.24	-1213 \pm 17 F14: 1.1630 \pm 0.0025	-1215 \pm 15	Post-bomb NH2 2013: 1989-1989 cal AD (15.7%) 1989-1990 cal AD (39.7%) 1990-1990 cal AD (12.8%)	Post-bomb NH2 2013: 1958-1958 cal AD (6.3%) 1988-1990 cal AD (89.1%)

とである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.3 (較正曲線データ: Post-bomb atmospheric NH_2) を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

(4) 考察

溝跡から出土した木材は、2 σ 暦年代範囲が 1958-1958 cal AD (6.3%) および 1988-1990 cal AD (89.1%) であった。この結果は、木材が伐採された(枯死した)年代が、現代であることを示している。溝跡から出土した木材が地下に設置された暗渠の部材であれば、溝跡(暗渠)の構築年代は 1958 年以降と考えられる。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- Hua, Q., Barbetti, M., Rakowski, A.Z. (2013) Atmospheric Radiocarbon for the Period 1950-2010. *Radiocarbon*, 55(4), 1-14.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会。
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haffidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869-1887.

3 井戸 (SE213) 出土種子の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一
Zaur Lomtadze・小林克也・中村賢太郎

(1) はじめに

富山県砺波市に位置する増山遺跡の井戸跡 SE213 より検出された種子について、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った。なお、測定試料については、種実同定も行われている(種実同定の項参照)。

(2) 試料と方法

試料は、戦国時代の井戸跡 SE213 内を埋める堆積物より検出されたヒョウタン仲間種子 1 点 (PLD-35360) である。測定試料の情報、調整データは表 19 のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

(3) 結果

表 20 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、図 38 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1 \sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

表 19 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-35360	遺構: SE213	種類: 生の種実 (ヒヨウタン仲間) 試料の性状: 種子 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)

表 20 放射性炭素年代測定及び暦年校正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に校正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-35360	-26.73 \pm 0.22	345 \pm 19	345 \pm 20	1490-1522 cal AD (27.5%) 1573-1603 cal AD (24.8%) 1609-1630 cal AD (16.0%)	1468-1530 cal AD (38.0%) 1542-1635 cal AD (57.4%)

暦年校正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い(^{14}C の半減期5730 \pm 40年)を校正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年校正にはOxCal4.3(校正曲線データ: IntCal13)を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年校正曲線を示す。

(4) 考察

井戸跡 SE213内を埋める堆積物より検出されたヒヨウタン仲間種子(PLD-35360)は、2 σ 暦年代範囲が1468-1530 cal AD (38.0%) および 1542-1635 cal AD (57.4%)であった。この暦年代範囲は、15世紀後半～17世紀前半で、戦国時代～江戸時代の初めに相当する。

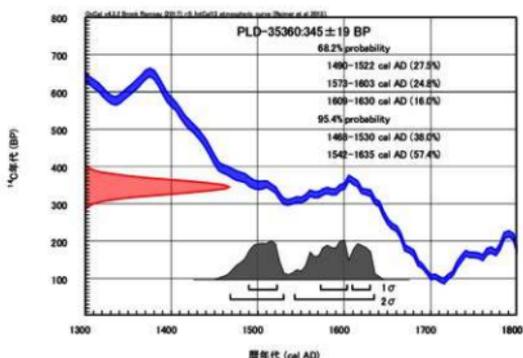


図 38 暦年校正結果

参考文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 「Bayesian Analysis of Radiocarbon dates」『Radiocarbon』51(1) 337-360.
- 中村俊夫 2000 「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の ^{14}C 年代』3-20 日本第四紀学会。
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. 2013 「IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP」『Radiocarbon』55(4) 1869-1887

4 井戸 (SE213) の花粉分析

森雅志 (パレオ・ラボ)

(1) はじめに

富山県砺波市増山に所在する増山遺跡において、古植生を検討するために土壌試料が採取された。以下では、試料について行った花粉分析の結果を示し、考察を行った。なお、同一試料を用いて大型植物遺体分析も行われている。

(2) 試料と方法

分析試料は、SE213 から採取された黒褐色 (10YR2/2) の植物遺体混じり有機質シルト 1 点である。この試料について、以下の方法で花粉分析を実施した。

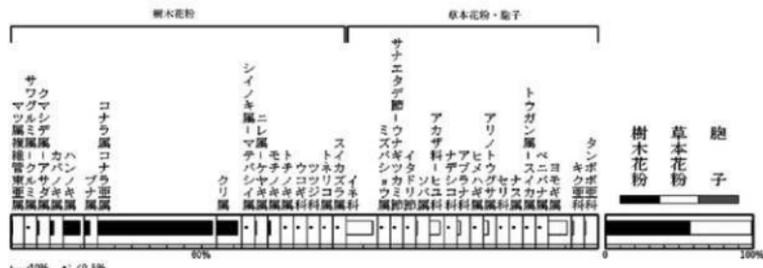
試料 (湿重量約 3g) を遠沈管にとり、10% 水酸化カリウム溶液を加え 10 分間湯煎する。水洗後、46% フッ化水素酸溶液を加え 1 時間放置する。水洗後、比重分離 (比重 2.1 に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離) を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理 (無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 の割合の混酸を加え 20 分間湯煎) を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。この残渣よりプレパラートを作製した。プレパラートは樹木花粉が 200 を超えるまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。また、保存状態の良い花粉を選んで単体標本 (PLC2325 ~ 2335) を作製し、写真 8 に載せた。

(3) 結果

分析試料から検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉 16、草本花粉 17 の総計 33 である。これらの花粉・胞子の一覧表を表 21 に、花粉分布図を図 39 に示した。花粉分布図では、樹木花粉の産出率は樹木

表 21 産出花粉胞子一覧表

学名	和名	
樹木		
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属緑葉実室葉属	2
<i>Pterocarya-Juglans</i>	アワグルミ属-クルミ属	1
<i>Carpinus-Desrya</i>	クマシダ属-アサダ属	3
<i>Betula</i>	カバノキ属	5
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	25
<i>Fagus</i>	ブナ属	8
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	169
<i>Castanea</i>	クワ属	31
<i>Castanopsis-Panania</i>	シノキ属-マナシイ属	1
<i>Ulmus-Zelkova</i>	ニレ属-ウケヤク属	2
<i>Ilex</i>	ホトトギス属	4
<i>Acoculax</i>	トドノキ属	1
Araliaceae	ウコギ科	1
Ericaceae	ツツジ科	1
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	1
<i>Lonicera</i>	スイカズラ属	1
草本		
Gramineae	イネ科	69
<i>Lysichiton</i>	ミスバショウ属	1
<i>Polygonum sect. Persicaria-Echinochloa</i>	チヌエタダ属-ウナギツカミ属	1
<i>Polygonum sect. Reynoutria</i>	イタドリ属	2
<i>Paspalum</i>	イネ属	3
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	27
Caryophyllaceae	ナゲシコ科	1
Brassicaceae	アブラナ科	7
<i>Polygala</i>	ヒヨドリバナ属	1
<i>Helianthus</i>	アキノトウゴウ属	13
Scitaceae	セリ科	1
<i>Solanum</i>	ナス属	1
<i>Besicnasa-Citrullus</i>	トウガン属-スイカ属	1
<i>Carthamus</i>	ベニバナ属	1
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	48
<i>Tubuliflorae</i>	キク亜科	6
<i>Liguliflorae</i>	タンポポ亜科	3
Arboreal pollen	樹木花粉	256
Nonarboreal pollen	草本花粉	186
Spores	シダ植物胞子	-
Total Pollen & Spores	花粉・胞子総数	442
unknown	不明	4



樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は産出花粉胞子総数を基数として百分率で算出した。

図 39 SE213 における花粉分布図

花粉総数を、草本花粉・胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。また、図表においてハイフン(-)で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。

樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属の産出が突出しており、66%の産出率を示す。次いでクリ属が12%、ハンノキ属が10%の産出率を示す。草本花粉では、イネ科やアカザ科・ヒユ科、ヨモギ属の産出が目立つ。さらに、ソバ属やトウガン属・スイカ属、ベニバナ属、アブラナ科など、栽培植物を含む分類群が産出している。

(4) 考察

検鏡の結果、分析試料にはコナラ属コナラ亜属が多く含まれ、クリ属を伴っていた。コナラ属コナラ亜属やクリ属は二次林要素の闊樹を含む分類群として知られているため、戦国時代当時の増山遺跡とその周辺にはナラ類やクリなどからなる二次林が広がっていたと思われる。また、近辺の日の当たる明るい場所には、イネ科やアカザ科・ヒユ科、ヨモギ属といった草本類が分布を広げていたと思われる。さらに、湿地林要素であるハンノキ属の産出も確認できるため、増山遺跡周辺の一部には湿地的環境の場所があり、そうした場所にハンノキ属が生育していたのであろう。草本花粉で産出したミズバショウ属なども湿地的環境の場所に生育していた可能性があり、湿った日の当たる場所にはアリノトウグサ属なども生育していたと考えられる。

また、ソバ属をはじめ、ベニバナ属やトウガン属・スイカ属、アブラナ科、ナス属など、栽培植物を含む分類群の産出も確認できた。大型植物遺体分析ではソバやナスが産出しており、ソバ属やナス属とした花粉は、ソバやナスからもたらされた可能性が考えられる。ベニバナ属やトウガン属・スイカ属、アブラナ科の花粉

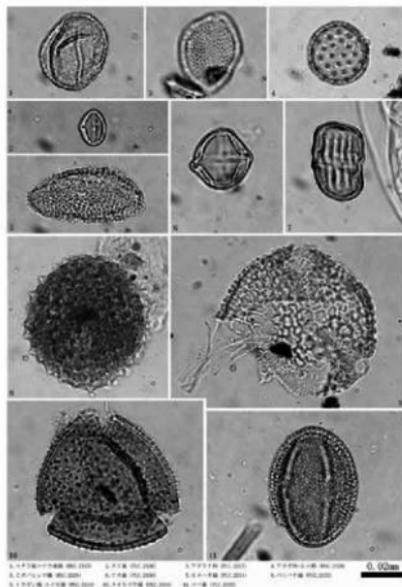


写真8 SE213から産出した花粉化石

の形態で種を特定するのは難しいが、これらの花粉を供給した植物としては、ベニバナや冬瓜、スイカ、大根、蕪などの栽培植物が挙げられる。さらに、イネ科花粉については、周辺に生育していた野生種のイネ科植物からもたらされた他に、大型植物遺体分析で多産しているイネの籾殻に付着していたイネ花粉が検出されている状況も考えられる。こうした栽培植物を含む分類群の花粉は、井戸周辺に存在していた耕作地からもたらされた可能性の他に、廃棄された井戸に栽培植物遺体を破棄したために得られた可能性なども考えられる。

5 井戸 (SE213) から出土した大型植物遺体

バンドリ スダルシャン・佐々木由香 (パレオ・ラボ)

(1) はじめに

富山県砺波市に所在する増山遺跡は、河岸段丘上に立地する戦国時代から江戸時代初めにかけての城下町である。ここでは井戸跡から出土した大型植物遺体を同定し、食用などとして利用された植物や、遺跡周辺における栽培状況および植生について検討する。なお、同じ遺構の試料を用いて花粉分析と放射性炭素年代測定も行われている (第4章3参照)。

(2) 試料と方法

試料は、SE213から採取された堆積物である。なお、ヒョウタン仲間種子の放射性炭素年代測定の結果、1468-1530 cal AD (38.0%) 及び 1542-1635 cal AD (57.4%) の暦年較正年代が得られている。発掘調査現場での試料採取は、株式会社上智によって行われた。

水洗は、200ccの堆積物を対象に最小0.5mm目の篩で行った。試料の抽出および同定は、実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても1個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。計数が難しい分類群については、おおよその産出数を記号(*)で表記した。試料は、砺波市教育委員会に保管されている。

(3) 結果

同定した結果、木本植物の針葉樹ではアカマツ葉の1分類群、広葉樹ではコナラ未熟殻斗とヒサカキ属種子、キブシ種子、エゴノキ核の4分類群、草本植物ではオモダカ属果実とホタルイ属果実、メヒシバ属有ふ果、ヒエ属有ふ果・炭化有ふ果、イネ炭化初・初殻・炭化初殻、エノコログサ属有ふ果、スズメノヒエ属有ふ果、キケマン属種子、アリノトウグサ属種子、アサ核、メロン仲間種子、ヒョウタン仲間果実・種子、ソバ果実、イヌタデ果実、ウシハコベ種子、アカザ属種子、ナス種子、ナス属種子、シソ属果実の19分類群、シダ植物

表22 産出花粉胞子一覧表

分類群	遺構名 SE213	
	時期	戦国時代
	水洗量(cc)	200
アカマツ	葉	(2)
コナラ	未熟殻斗	(1)
ヒサカキ属	種子	5
キブシ	種子	(1)
エゴノキ	核	(3)
オモダカ属	果実	1
ホタルイ属	果実	3
メヒシバ属	有ふ果	3
ヒエ属	有ふ果	9 (9)
	炭化有ふ果	1
イネ	炭化初	1
	初殻	97
	炭化初殻	1
エノコログサ属	有ふ果	1
スズメノヒエ属	有ふ果	1
キケマン属	種子	39 (3)
アリノトウグサ属	種子	2
アサ	核	(3)
メロン仲間	種子	1
ヒョウタン仲間	果実	(++)
	種子	19 (8)
ソバ	果実	(2)
イヌタデ	果実	1 (1)
ウシハコベ	種子	2
アカザ属	種子	16 (1)
ナス	種子	2 (1)
ナス属	種子	4 (2)
シソ属	果実	3 (2)
不明	芽	(1)
ワラビ	炭化裂片	(7)
子囊菌	炭化子囊	48
昆虫		(++)

*:1-9、++:10-49
(括弧内は破片数)

のワラビ炭化裂片1分類群の、計25分類群が見いだされた。このほかに不明の芽が得られ、一括した。大型植物遺体以外には、炭化した子囊菌が得られた。また、昆虫遺体も得られた (表22)。

SE213から得られた種実ではイネが多く、ヒエ属とキケマン属、ヒョウタン仲間、アカザ属が少量、ヒサカキ属とナス属、シソ属、ワラビがわずかに得られた。それ以外の分類群は、産出数が3点以下であった。産出数が3点以下の種実のうち、栽培植物は、アサとメロン仲間、ソバ、ナスであった。

次に、得られた主要な分類群の記載を行い、図版に写真9に示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田(2003)に準拠し、APG IIIリストの順とした。

(1) ヒエ属 *Echinochloa* spp. 有ふ果・炭化有ふ果

イネ科

暗褐色で、紡錘形。基部と先端はやや尖る。縦方向に細かい顆粒状の模様がある。内頰は膨らまず、外頰は中央部が最も膨らむ。長さ 2.8mm、幅 2.0mm。

(2) イネ *Oryza sativa* L. 炭化籾・籾殻・炭化籾殻

イネ科
炭化籾の側面観は長楕円形。縦方向に明瞭な 2 条の稜線があり、基部は突出する。表面には規則的な縦方向の顆粒状突起がある。長さ 6.5mm、幅 4.0mm。籾殻は長さ 7.0mm、残存幅 1.4mm。

(3) エノコログサ属 *Setaria* sp. 有ふ果 イネ科

茶褐色で、上面観は楕円形、側面観は長楕円形で先端がやや突出する。アワよりも細長く、乳頭突起が皺状を呈する。長さ 1.7mm、幅 0.9mm。

(4) アサ *Cannabis sativa* L. 核 アサ科

褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は倒卵形で

側面に稜がある。下端にはやや突出した楕円形の大きな着点がある。表面には脈状の模様がある。長さ 4.2mm、残存幅 3.7mm。

(5) メロン仲間 *Cucumis melo* L. 種子 ウリ科

淡褐色で、上面観は扁平、側面観は倒卵形。表面は平滑で、基部は突出せず直線状の隆線となる。藤下(1984)は、種子の大きさからおおむね次の 3 群に分けられるとしている。長さ 6.0mm 以下の雑草メロン型、長さ 6.1~8.0mm のマクワウリ・シロウリ型、長さ 8.1mm 以上のモルディカメロン型である。増山遺跡の SE213 の種子は、長さ 8.4mm、幅 3.7mm の 1 点のみで、モルディカメロン型の大きさであった。また細長く、扁平のため、栽培種のキュウリである可能性もある。

(6) ヒョウタン仲間 *Lagenaria siceraria* (Molina)

Standl. 果実・種子 ウリ科



スケール 1-5, 9-13: 1mm, 6-8: 5mm

1. ヒメコログサ属 2. イネ籾炭化 3. イネ籾殻 4. エノコログサ属炭化有ふ果 5. アサ科 6. メロン仲間種子 7. ヒョウタン仲間果実
8. ヒョウタン仲間種子 (D=25360) 9. ツバネ属 10. アサ科果実 11. アサ科 12. アサ果実 13. シシ果実

写真 9 増山遺跡の井戸 (SE213) から産出した花粉化石

果実は暗赤茶色で、破片のため全体形は不明。表面は平滑で、やや光沢がある。最大の破片で、残存長13.7mm、残存幅7.5mm、残存厚0.6mm。種子はやや淡黄褐色～褐色で、上面観は扁平、側面観は逆三角形。やや湾曲して左右は非対象。先端はW字状で、基部から先端まで、浅く広い溝が2本走る。壁はややスポンジ質。長さ16.0mm、幅7.9mm。

(7) ソバ *Fagopyrum esculentum* Moench 果実 タデ科

暗褐色で、完形ならば上面観は三稜形、側面観は先端がやや尖る紡錘形。残存長3.8mm、残存幅3.2mm。

(8) アカザ属 *Chenopodium* spp. 種子 ヒユ科

黒色で、上面観はやや扁平、側面観は円形。種皮は強い光沢があり、硬い。着点の一端がやや突出し、中心部方向にむかって浅い溝がある。長さ1.2mm、幅1.3mm。

(9) ナス *Solanum melongena* L. 種子 ナス科

淡褐色で、上面観は長楕円形、側面観はいびつな円形。着点は明瞭に窪む。種皮細胞の細胞壁が屈曲し、それが網目状隆線を構成する。長さ2.7mm、幅3.1mm。

(10) ナス属 *Solanum* spp. 種子 ナス科

淡褐色で、上面観は扁平、側面観は楕円形。表面には細かい畝状突起をもつ網目状隆線がある。長さ1.9mm、幅2.1mm。

(11) シソ属 *Perilla* spp. 果実 シソ科

暗赤褐色で、いびつな球形。端部に着点がある。表面には、低い隆起で多角形の網目状隆線がある。エゴマ以外のシソ属である。長さ1.3mm、幅1.1mm。

(4) 考察

SE213から抽出した大型植物遺体を同定した結果、栽培種ではイネとアサ、メロン仲間、ヒョウタン仲間、ソバ、ナスが得られた。量的にはイネの籾殻が多く、籾摺り後の籾殻が使われなくなった井戸に廃棄された可能性や、周辺にあった籾殻が入り込んで自然堆積した可能性などが考えられる。畑作物の産出数は少ないが、種類数は多かった。メロン仲間は1点のため、詳細な検討ができなかったが、栽培植物のモモルディカメロンかキュウリの可能性がある。このほかに、アカザ属も種類によっては利用可能である。また、キブシは黒色の染料に用いられるが、これらの植物が増山遺跡で実際に利用されていたかどうかは不明である。

次に、井戸周辺の古植生について検討する。木本植物では、針葉樹のアカマツや落葉広葉樹のコナラ、キブシ、エゴノキ、常緑広葉樹のヒサカキ属がわずかずつ産出している。これらの木本植物は井戸周辺に生育していたと考えられるが、産出数も種類数も少ないため、林分は少なかつたと推定される。草本植物では、井戸周辺の道端や荒地、畑地にキケマン属やメヒシバ属、イヌタデ、ウシハコベ、ナス属、シソ属など、やや湿った道端や田の畔などにはアリノトウグサ属などが生育していたと考えられる。また井戸内にはオモダカ属やホタルイ属などの抽水植物が生育していた可能性がある。

また、堆積物からは昆虫遺体が多く得られており、合わせて分析を行えば、当時の環境や人間活動との関わりがより詳しく検討できるようになると考えられる。

参考文献

- 米倉浩司・梶田忠 2003 「BG Plants 和名-学名インデックス (YList)」 <http://ylist.info>
- 藤下典之 1984 「出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法」 『古文書財に関する保存科学と人文・自然科学一総括報告書』 638-654 同明舎

6 井戸(SE213)出土の魚類遺体

吉永亜紀子(日本動物考古学会員)

井戸SE213の16層から水に浸かった状態で魚類椎骨が1点出土した(以下当資料)。図40・41に当報告で用いる魚類骨格名称、図42に当資料、計測箇所および計測値を示した。計測にはデジタルノギス(NTD12P-15PMX,Mitutoyo)を用いた。被熱により若干収縮しているため、被熱前は計測値よりも数mm程大きい椎骨であったと考えられる。被熱のため全体が白色を呈し、神経棘および横突起、椎体部尾側の一部が欠損していたが、著しい変形や収縮がなく形態の観察が可能であったため、現生標本群と比較検討を行った結果、タイ科(Sparidae gen. et sp. Indet.)腹椎と考えられた。タイ科にはマダイをはじめ数種が含まれ、現代の富山湾においても主にマダイ・チダイ・キダイ・クロダイの漁獲がある(武野1993・富山県水産試験場編1998)。しかし、タイ科椎骨の形態は非常に似通っていることから、属以下の同定は行わず科までの同定にとどめた。

被熱による収縮も考慮のうえ多々良ほか(1962)を参照した体長復元では、当資料はおよそ体長40～50cmのタイ科個体由来だと推定される。体長の異なるタイ科現生標本群と当資料の形態およびサイズの比較からは、同様の体長に由来する第6～8腹椎のいずれかであると考えられる(図43)。遺跡出土のタイ科頭骨や腹椎には、解体・調理に伴うカットマークが観察されることが知られているが、当資料では見られなかった。被熱した魚類遺体は、近隣の近世遺跡では金沢城跡遺跡(河北門2011・堂形2012)等からも出土例がある。

(1) 海産魚の消費・食文化

各地の中世都市遺跡出土魚類遺体の分析からは、マダイへの明確な嗜好が捉えられており、この時期にマダイを好む食文化の一般化が窺えるという。近世に入り、漁業技術の発展に伴って出土魚種が増加傾向の中にあっても、江戸遺跡を中心に出土が最も目立つのはマダイである(福泉2008)。大阪や江戸ではクロダイ属の出土も見られるが、中世以降西日本では「赤い鯛」であるマダイ、キダイの出土が特徴的であり、選択的

に消費されていたことが指摘されている(久保1999・丸山2013)。北陸の中近世食文化については、文献資料を中心に指摘が行われてきたが、近年になって金沢・富山と江戸の出土動物遺体の集成および未報告資料の再検討が試みられており(畑山編2015・東京大学理蔵文化財調査室編2017)、また2000年以降継続的に実施されている富山城および富山城下町の発掘調査では、近世の食料残滓である動物遺体が出土している(納屋内2010等)。その成果から、富山城下町においても江戸時代を通してマダイを含むタイ科魚類の利用が特徴的に認められることが分かってきた(納屋内2014a・b)。また、江戸時代中期の料理書『黑白精味集』に記されている魚の格付け「上魚・中魚・下魚」との比較からは、祝宴等「ハレ」の場の食料残滓とは限定できないものの、マダイを中心として「上魚」に格付けされている魚類が多く出土する傾向も指摘されている(納屋内2017)。越中魚津漁業図絵(図45)では、赤く彩色されたタイが散見され、各種網漁や延縄漁の主要漁獲対象であったことが窺える。魚津に限らず富山湾沿岸部一帯でこのような各種網漁や延縄漁が想定され、タイが漁獲されていたと考え得る点と出土魚類遺体分析結果は調和的である。

増山城跡では、2002年安室屋敷北第(Ⅸ郭)トレンチ発掘調査から出土した炭化遺体がDNA分析によりイネと同定され、16世紀中葉～後半の植物質食料の一端を明らかにする成果が報告されているが(利波・野原編2003)、海産資源利用や食文化の様相は、動物遺体がこれまで確認されていなかったこともあり不明であった。近年の動物考古学的成果を鑑みるならば、これまで中近世都市遺跡や金沢城・富山城および城下町の出土魚類遺体分析において指摘されてきた海産魚の消費・食文化と同様の様相を背景として、より内陸に位置する増山城下町へも当資料が持ち込まれた可能性が示唆される。また、金沢城・富山城および城下町出土魚類遺体は17～19世紀遺構出土資料であり、16世紀末～17世紀初頭とされる層位から出土した当資料は、北陸における中近世の海産魚の消費・流通・食文化を考察する上でやや古い時期に位置付けられる資料である。

(2) 海産魚の流通

15世紀後半～16世紀初頭、神保氏が増山城を支



図40 マダイ骨格図と名称
(落合編 1994 を改変)

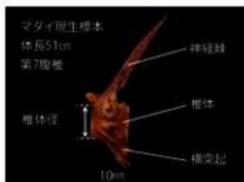


図41 腹椎左側と名称

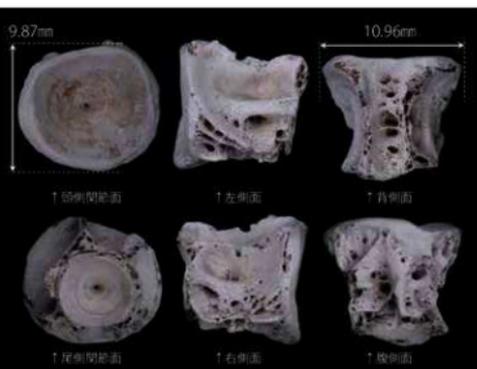


図42 出土魚類遺体と計測箇所および計測値

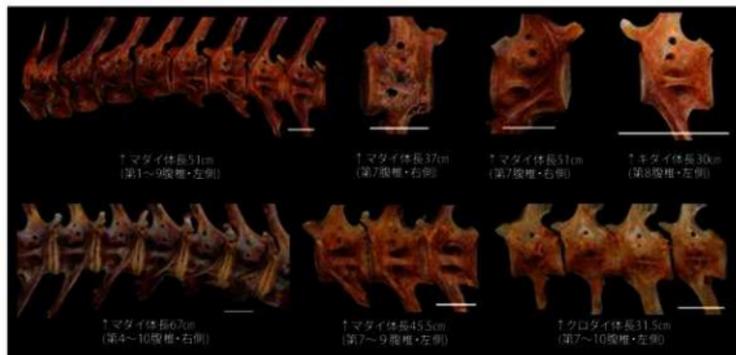


図43 タイ科現生標本群腹椎の形態とサイズ(スケールはすべて10mm・慶應大学民族考古学研究所蔵)



図44 中世の越中西部(仁木・崎貫編 2015 に加筆)

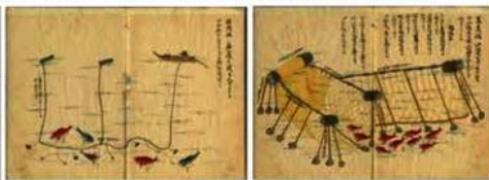


図45 越中魚津飛業図繪(天明5年)

城とした理由の一つに、和歌川を通じ放生津と結ばれていたという点が指摘されている(図44・佐伯・野原編 2008)。和歌川を含む複数の中小河川と陸上の街道は、放生津を中心として交通網を形成し、16世紀以降政治的拠点としての機能を失って以降も、放生津は漁業・廻船業を中心とした拠点的港町に発展する(仁木・崎貫

編 2015)。増山下町における和歌川の水運も、時代を通してその重要性は変わらなかったと考えられ、増山裏亀山遺跡では近世初頭における居住空間の存在とともに和歌川を利用した荷揚げ場に該当する可能性が指摘されている(野原編 2004)。文献資料からは、16世紀中頃～17世紀の越飛交易において、越中から当遺跡よ

り更に内陸部である飛騨へ鯛を含む様々な魚貝類が運ばれ、魚商人の往来があったことや、加賀藩領内で捕れた上魚は金沢へ集約することが御定であった一方で、遠路により痛魚となるため適宜富山・飛騨・越後へ売捌かれていたこと、放生津に末魚問屋があったこと等海産物流通の様相が明らかとなっている(高瀬1990)。このような当時の海産物流通の様相を鑑みるならば、当遺跡は現在の富山湾から20km程内陸に位置するが、和田川の水運や周辺の街道を通じて当資料が持ち込まれた可能性が示唆される。

(3) まとめ

当資料1点をもってして考察を行うことは慎むべきであるが、当遺跡における海産魚の消費・流通・食文化について示唆に富む資料であることから、北陸における近年の動物考古学的成果とこれまでの増山城下町に関する調査、文献史学からの指摘を鑑み若干の考察を行った。動物遺体は有機物であるため一般的に遺存し難い考古資料であるが、当資料のように湧水に浸かった状態など一定の環境下では出土が見込まれる。増山城下町の大部分は水田およびダム下となっており、今後も発掘調査に際し動物遺体が出土する可能性が期待される。

謝辞

本報告を行うにあたり、佐藤孝雄先生(慶應義塾大学)、納屋内高史氏(富山市教育委員会議蔵文化センター)から貴重な助言を頂戴し、慶應義塾大学文学部民族考古学研究室には所蔵現生魚類標本の使用を許可して頂きました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

引用参考文献

- 『越中魚津風業図絵(天明5年)』石川県立図書館所蔵
 落合明編1994『魚類解剖大図鑑』緑書房
 久保和士1999『動物と人間の考古学』真臨社
 黒澤一男2008『金沢城跡本丸階段2004-1(2003年)地点の動物遺体の同定』『金沢城跡埋蔵文化財発掘調査報告書1』石川県金沢城跡調査所

- 佐伯安一・野原大輔編2008『増山城跡総合調査報告書』砺波市教育委員会議蔵編1991『富山県指定跡地増山城跡報告書』砺波市教育委員会議蔵上野原高瀬編1990『加賀藩流通史の研究』桂書房
 高橋教・松本美由紀・金井慎司2012『樹種同定・微細物分析』『金沢城跡2-2野形(第3・4次調査)』石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター
 武野泰之1993『富山湾におけるマダインの年齢と成長』『日本海ブロック試験研究集録29号』水産庁日本海区分水産研究所
 多々良真・山口義昭・林和夫1962『脊椎骨椎体長による体長体重復原のための研究』『内海区分水産研究所研究報告』
 桶泉岳二2008『遺跡の発掘』『人と動物の日本史1動物の考古学』吉田弘文館
 東京大学埋蔵文化財調査室編2017『東京大学埋蔵文化財調査室 調査研究プロジェクト3 江戸藩邸と国元・金沢の食生活 - 動物考古学の研究成果から -』東京大学埋蔵文化財調査室・加賀藩食文化史研究会
 利波区裕・野原大輔編2003『平成14年度増山城跡総合調査概報 増山城跡VI』砺波市教育委員会議蔵編1998『富山湾の魚たちは今』桂書房
 納屋内高史2010『富山城下町(町人地)出土の動物遺体』『富山市考古資料館報No.47』富山市考古資料館
 納屋内高史2012『近世富山城下町出土の動物遺存体 - 2006年度、2008年度調査出土資料の紹介 -』『富山市教育委員会議蔵文化財センター所報第13号』富山市教育委員会議蔵文化財センター
 納屋内高史2014a『動物遺存体同定』『富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書 - 西町南地区市街地内開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 -』富山市教育委員会議蔵文化財センター
 納屋内高史2014b『動物遺存体分析について』『富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書 - 一番町共同ビル(仮称)新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -』富山市教育委員会議蔵文化財センター
 納屋内高史2017『出土動物遺体から見た近世富山城下町の食生活』『東京大学埋蔵文化財調査室調査研究プロジェクト3 江戸藩邸と国元・金沢の食生活 - 動物考古学の研究成果から -』東京大学埋蔵文化財調査室・加賀藩食文化史研究会
 仁木宏・綿貫友希編2015『中世日本海の流通と恵問』清文堂出版株式会社
 野原大輔編2004『林道増山城跡線路掘工事に伴う緊急発掘調査報告書 - 増山夷山遺跡発掘報告』砺波市教育委員会議蔵編2014『貝・骨分析』『金沢市金沢城下町(丸の内7番地点)1』石川県教育委員会議蔵編2015『近世金沢の食文化 - 遺跡に眠る動物たち -』
 富山智史編2017『浴場の生きた19世紀 金沢の食生活』『東京大学埋蔵文化財調査室 調査研究プロジェクト3 江戸藩邸と国元・金沢の食生活 - 動物考古学の研究成果から -』東京大学埋蔵文化財調査室・加賀藩食文化史研究会
 パレオ・ラボ2011『出土した動物遺存体』『金沢城跡・河北門』石川県金沢城跡調査研究所
 丸山真史2013『近世・京都の魚食文化の特徴 - 近世三都の魚貝類の比較を通じて -』『動物考古学第30号』動物考古学研究会

7 木製品の樹種同定

小林克也(パレオ・ラボ)

(1) はじめに

富山県砺波市の増山遺跡から出土した木製品や木材の樹種同定を行なった。なお、一部の試料については塗膜分析も行われている(第4章7参照)。

(2) 試料と方法

試料は、SE039、SE047、SE175、SE201、SE213、SE214、SE242の7基から出土した生の木製品及び木材計25点である。いずれも、戦国時代の井戸跡と考えられている。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行なった。

樹種同定は、材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柎目)について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパレートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて鏡檢及び写真撮影を行なった。

(3) 結果

同定の結果、針葉樹ではマツ属複維管束亜属とスギ、ヒノキ、サワラの4分類群、広葉樹ではモクレン属とエノキ属、クリ、スダジイ、コナラ属アカガシ亜属(以下、アカガシ亜属)、コナラ属コナラ節(以下、コナラ節)、ハンノキ属、アサダ、モチノキ属の9分類群、さらに単子葉のマダケかハチク1分類群の、計14分類群がみられた。ヒノキが6点で最も多く、スギが4点、マツ属複維管束亜属が3点、サワラとモクレン属、エノキ属、

クリ、スダジイ、アカガシ亜属、コナラ節、ハンノキ属、アサダ、モチノキ属、マダケかハチクが各1点であった。なお、試料No.139-2の漆器椀は、柎目面しか切片が採取できなかったため、広葉樹の同定にとどまった。同定結果を表23に、一覧を表24に示す。

以下に、同定された材の特徴を記載し、写真10に光学顕微鏡写真及び試料の写真を示す。

(1) マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon*
マツ科 写真10 1a-1c(No.121)

仮道管と垂直及び水平樹脂道、放射柔細胞および放射仮道管で構成される針葉樹である。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管によって構成される。放射仮道管の内壁の肥厚は鋸歯状であり、分野壁孔は窓状となる。

マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育しやすい。材質は類似し、重硬で切削等の加工は容易である。

(2) スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don ヒノキ科
写真10 2a-2c(No.126)、3a-3c(No.146)

道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ2~15列となる。分野壁孔は孔口が大きく開いた大型のスギ型で、1分野に普通2個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で、切削などの加工が容易な材である。

(3) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.)
Endl. ヒノキ科 写真10 4a-4c(No.135)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、高さ1~15列である。分野壁孔はトウヒ~ヒノキ型で、1分野に2個みられる。

ヒノキは福島県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材はやや軽軟で加工しやすく、強度に優れ、耐朽性が高い。

表23 樹種同定結果

試料/樹種	付け木		下駄		漆器		漆器		加工		合計
	木口	板目	柎目								
マツ属複維管束亜属	1										3
スギ					2	1					4
ヒノキ	1	1							1		6
サワラ										1	1
モクレン属	1										1
エノキ属	1										1
クリ									1		1
スダジイ									1		1
コナラ属アカガシ亜属									1		1
コナラ属コナラ節									1		1
ハンノキ属				1							1
アサダ	1										1
モチノキ属									1		1
広葉樹					1						1
マダケ/ハチク											1
合計	1	4	1	1	2	3	1	1	3	2	25

(4) サワラ *Chamaecyparis pisifera* (Siebold et Zucc.)

Endl. ヒノキ科 写真10 5a-5c(No.111)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部はやや薄く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は同性で、1~6細胞高となる。分野壁孔はやや開いて斜めを向いたヒノキ型となり、1分野に2個みられる。

サワラは岩手県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材は軽軟で加工しやすく、水湿によく耐える。

(5) モクレン属 *Magnolia* モクレン科 写真10・11

6a-6c(No.148)

小型の道管が単独ないし2~3個複合してやや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、道管交互壁孔は階段状となる。放射組織は上下端1列が直立する異性で、幅1~2列となる。

モクレン属にはホオノキ、コブシなどがある。代表的なホオノキは、山間の肥沃なところに散生する落葉

高木の広葉樹で、材は軽軟で硬くなく、切削その他の加工は極めて容易である。

(6) エノキ属 *Celtis* アサ科 写真11 7a-7c(No.142-3)

年輪のはじめに大型の道管が数列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が多数複合して斜線状に配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1~3列が方形となる異性で、幅1~5列となる。放射組織には鞘細胞がみられる。

エノキ属にはエノキやシダレエノキなどがあり、代表的なエノキは本州から九州にかけての温帯から暖帯に分布する落葉高木の広葉樹である。材はやや硬い。まとまって生育することはなく、現在では薪炭材などに利用される程度である。

(7) クリ *Castanea crenata* Siebold. et Zucc. ブナ科

写真11 8a-8c(No.152-2)

年輪のはじめに大型の道管が1~3列並び、晩材部では徐々に径を減じる道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状である。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列である。

クリは、北海道の石狩、日高地方以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で、耐朽性が高い。

(8) スダジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino)

Hatus. ex T.Yamaz. et Mashiba ブナ科 写真11

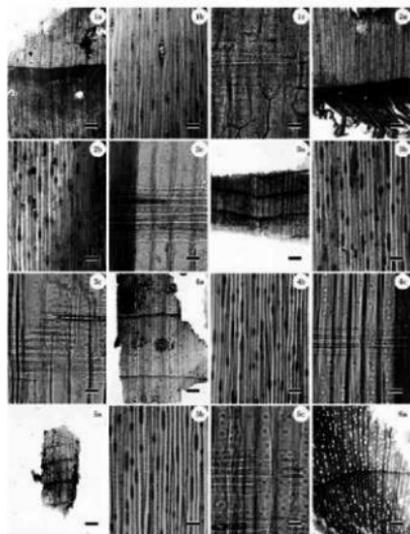
9a-9c(No.152-1)

年輪のはじめに大型の道管が断続的に並び、晩材部では径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列となる。

スダジイは暖帯から亜熱帯に分布する常緑高木の広葉樹である。重さと強さは中庸で、やや耐朽性があるが、切削加工は困難ではない。

(9) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen.*Cyclobalanopsis* ブナ科 写真11 10a-10c(No.152-3)

厚壁で丸い大型の道管が、放射方向に配列する放射



1a-1e. マツ属常緑針葉樹亜属(No.111), 2a-2e. スギ(No.120), 3a-3e. スギ(No.142), 4a-4e. エノキ(No.142-3), 5a-5c. サワラ(No.111), 6a. モクレン属(No.148)
a) 放射組織(スケール=20 μm), b) 環孔材(スケール=100 μm), c) 散孔材(スケール=25 μm)

写真10 木製品及び木材の光学顕微鏡写真(1)

孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属アカガシ亜属は、材組織の観察では道管の大きなイチイガシ以外は種までの同定ができない。したがって、本試料はイチイガシ以外のアカガシ亜属である。アカガシ亜属にはアカガシやツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬かつ強韌で、耐水性があり、切削加工は困難である。

(10) コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科
写真11・12 11a-11c(No.154)

年輪のはじめに大型の道管が1~2列並び、晩材部では急に径を減じた、薄壁で角張った道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属コナラ節にはコナラやミズナラなどがあり、

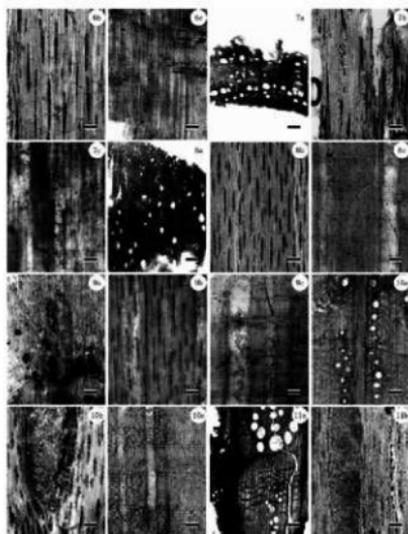
温帯から暖帯にかけて広く分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なミズナラの材は、やや重く強韌で、切削加工はやや難しい。

(11) ハンノキ属 *Alnus* カバノキ科 写真12

12a-12c(No.139-1)

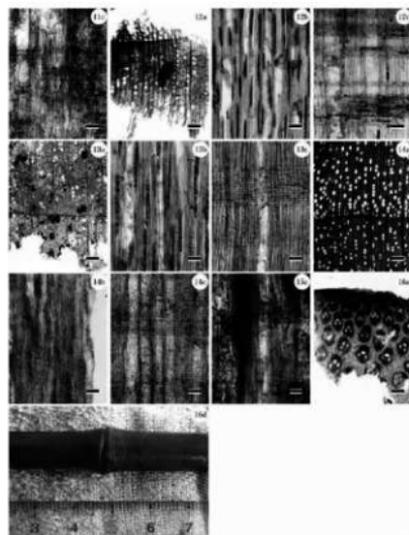
小型の道管が単独ないし2~3個複合して密に散在する散孔材である。道管は10~20段程度の階段穿孔を有する。放射組織は同性で単列となるが、試料が小さかったために集合放射組織の有無が確認できなかった。したがって、ハンノキ亜属とヤシャブシ亜属の識別ができず、ハンノキ属とした。

ハンノキ属にはハンノキ亜属とヤシャブシ亜属がある。ハンノキ亜属の代表種であるハンノキは平地の湿地や河川などの湿潤地に多い落葉高木の広葉樹で、ヤシャブシ亜属の代表種であるヤシャブシは本州、北海道などの温帯から亜寒帯にかけて分布する落葉小高木の広葉樹である。



11a. ミズナラ属(No.140), 11b. コナラ属(No.141-142), 11c. アカガシ属(No.143-144), 11d. アカガシ属(No.145-146), 11e. アカガシ属(No.147-148), 11f. アカガシ属(No.149-150), 11g. アカガシ属(No.151-152), 11h. アカガシ属(No.153-154), 11i. アカガシ属(No.155-156), 11j. アカガシ属(No.157-158), 11k. アカガシ属(No.159-160), 11l. アカガシ属(No.161-162), 11m. アカガシ属(No.163-164), 11n. アカガシ属(No.165-166), 11o. アカガシ属(No.167-168), 11p. アカガシ属(No.169-170)

写真11 木製品及び木材の光学顕微鏡写真(2)



12a. ハンノキ属(No.139), 12b. ハンノキ属(No.140-141), 12c. ハンノキ属(No.142-143), 12d. ハンノキ属(No.144-145), 12e. ハンノキ属(No.146-147), 12f. ハンノキ属(No.148-149), 12g. ハンノキ属(No.150-151), 12h. ハンノキ属(No.152-153), 12i. ハンノキ属(No.154-155), 12j. ハンノキ属(No.156-157), 12k. ハンノキ属(No.158-159), 12l. ハンノキ属(No.160-161), 12m. ハンノキ属(No.162-163), 12n. ハンノキ属(No.164-165), 12o. ハンノキ属(No.166-167), 12p. ハンノキ属(No.168-169)

写真12 木製品及び木材の光学顕微鏡写真(3)

(12) アサダ *Ostrya japonica* Sarg. カバノキ科

写真 12 13a-13c(No.133)

小型の道管が単独ないし 2～7 個放射方向に複合してやや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、1～4 列となる。

アサダは北海道中南部から九州にかけての温帯から暖帯上部に分布する落葉高木の広葉樹である。材は硬で割れにくく、切削加工等は困難である。

(13) モチノキ属 *Ilex* モチノキ科 写真 12

14a-14c(No.140)

小型の道管がほぼ単独でやや密に散在する散孔材である。道管は 20～40 段程度の階段穿孔を有する。放射組織は上下端 1～3 列が直立する異性で、幅 1～5 列となる。

モチノキ属にはモチノキやクログメモチなどがあり、一般的なモチノキは宮城県、山形県以南の本州、四国、九州などの暖帯の沿海地に多く分布する常緑高木の広葉樹である。材はやや重硬で、切削加工は中庸である。

(14) 広葉樹 Broadleaf-wood 写真 12 15c(No.139-2)

試料は漆器椀で、木口面および板目面の切片採取が行えず、柁目面のみ切片を採取した。道管は単穿孔を有する。放射組織は上下端 1～3 列が直立する異性である。

(15) マダケカハチク *Phyllostachys reticulata* (Rupr.)

K.Koch or *Phyllostachys nigra* (Lodd. ex Loud.) Munro var. *henonis* (Bean ex Mitford) Stapf ex Rendle 写真 12

16a・16d(No.155)

向軸側の原生木部、その左右の 2 個の後生木部、背軸側の節部の三つで構成される維管束が散在する単子葉植物の程である。維管束の配列は不整中心柱となる。維管束鞘の細胞は厚壁であり、向・背軸部に関わりなく厚くなる。肉眼観察では、節が二重に廻るのが確認できる。

マダケは青森県、岩手県の中部以南に分布し、ハチクは北海道以南に分布する。共に屈曲性、弾力性、剥離性、加工性、耐久性などに優れており、様々な用途

表 24 樹種同定結果一覧表

試料No.	報告No.	産地名	科属	樹種	本取目
111	40	S0047	不明	オシロイ	柁目
114	38	S0947	スギ	スギ	北毛蘭出
121	78	SE1175	落葉	マツ属複雑管束亜属	北毛蘭出
126	96	SE201	樺	スギ	柁目
133	130	SE213	樺	アサダ	北毛蘭出
134	125	SE213	下駄	マツ属複雑管束亜属	柁目
135	142	SE213	樺	スギ	北毛蘭出
136	122	SE213	樺	ヒノキ	北毛蘭出
139-1	126	SE213	漆器椀	ハンノキ属	横木取り
139-2	127	SE213	漆器椀	広葉樹	横木取り
140	128	SE213	樺	モチノキ属	北毛蘭出
142-1	121	SE213	付け木	マツ属複雑管束亜属	北毛蘭出
142-2	122	SE213	付け木	ヒノキ	北毛蘭出
142-3	123	SE213	付け木	エノキ属	支持丸木
144	129	SE213	加工材	ヒノキ	漆器椀
146	162	SE214	樺	スギ	柁目
147	158	SE214	樺	ヒノキ	北毛蘭出
148	153	SE214	付け木	モクレン属	支持丸木
151	163	SE214	下駄	ヒノキ	柁目
152-1	164	SE214	加工材	スズシロ	支持丸木
152-2	166	SE214	加工材	ク	支持丸木
152-3	165	SE214	付ね材	コナラ属アカガシ亜属	北毛蘭出
152-4	168	SE214	動物遺骨	スギ	柁目
154	14	SE242	材	コナラ属コナラ節	支持丸木
155	188	S0039	材	マダケまたはハチク	

に利用されている。

(4) 考察

樺はアサダであった。アサダは硬硬で割れにくい樹種であり(伊東ほか, 2011)、樺に適した樹種と考えられる。富山県の戦国時代の木製品集成では、樺かにマツ属複雑管束亜属とヒノキ属が確認されている(伊東・山田編, 2012)。

付け木は、マツ属複雑管束亜属とヒノキ、モクレン属、エノキ属であった。マツ属複雑管束亜属は油が多くて燃焼性が高い樹種であり、ヒノキも着火性が良い。またモクレン属とエノキ属は、薪炭材としても利用される樹種である(伊東ほか, 2011)。北陸地方の中世以降の付け木では、マツ属複雑管束亜属とスギ、ヒノキ、アスナロといった針葉樹が利用されている(伊東・山田編, 2012)。

鎌は、スギであった。スギは木理通直で真っすぐに生育し、加工性の良い樹種である(伊東ほか, 2011)。富山県で出土している戦国時代の鎌としては、梅原胡摩堂遺跡でクリの鎌が 1 点みつかっている。

下駄は、マツ属複雑管束亜属とヒノキであった。両樹種はスギと同様の材質で、加工性が良い(伊東ほか, 2011)。富山県で出土している戦国時代の下駄では、マツ属複雑管束亜属とヒノキ以外にも、スギなどの針葉樹のほか、多様な広葉樹も利用されている(伊東・山田編, 2012)。

漆器椀は、ハンノキ属と広葉樹であった。ハンノキ

属は軽軟で加工性が良いという材質を持つ（伊東ほか、2011）。富山県で出土している戦国時代の漆器碗では、ケヤキやブナ属、トチノキが多くみられるが、ハンノキ属ハンノキ亜属もわずかながら確認されている（伊東・山田編、2012）。

容器はマツ属複雑管束亜属、曲物蓋？はスギ、箸はスギとヒノキであった。加工性の良い樹種が利用されていたと考えられる。富山県で出土している戦国時代の曲物にはスギやヒノキ属の樹種が、箸にはスギとヒノキが利用されている（伊東・山田編、2012）。

柱は、コナラ節であった。コナラ節は堅硬な樹種であり（伊東ほか、2011）、柱材として選択的に利用されていた可能性がある。なお、富山県で出土している戦国時代の柱では、コナラ節のほかにクリやトネリコ属シオジ節といった硬い樹種が多くみられる（伊東・山田編、2012）。

杭は、クリとスダジイ、アカガシ亜属であった。クリとスダジイ、アカガシ亜属はいずれも堅硬な樹種であり（伊東ほか、2011）、杭として堅硬な樹種が選択的に利用されていたと考えられる。なお、富山県で出土している戦国時代の杭では、マツ属複雑管束亜属やアスナロ属といった針葉樹や、クリやハンノキ属といった多様な広葉樹が利用されている（伊東・山田編、2012）。

薄板と加工品はヒノキ、不明はサワラとモチノキ属、竹はマダケかハチクであった。ヒノキとサワラは加工性の良い樹種であり（伊東ほか、2011）、モチノキ属は比較的堅硬な樹種である（平井、1996）。用途によって堅硬な樹種、加工性の良い樹種を使い分けていた可能性がある。

参考文献

- 平井信二 1996『木の百科—解説編—』642p、朝倉書房。
 伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂 2011『日本有用樹木誌』238p 海青社
 伊東隆夫・山田昌久編 2012『木の考古学—出土木製品用材データベース—』449p 海青社

8 漆器碗の塗膜分析

竹原弘展・藤根久・米田恭子・小林克(パレオ・ラボ)

(1) はじめに

砺波市増山に所在する増山遺跡より出土した戦国時代の漆器碗について、塗膜薄片を作製し、塗膜構造と材料について検討した。

(2) 試料と方法

分析対象は、戦国時代の井戸 SE213 より出土した漆器碗 1点である（表 25、写真 13-1）。なお、胎部は横木取りのハンノキ属製である（詳細は樹種同定の項参照）。塗膜片を少量採取し、分析試料とした。分析にあたっては、小林が試料採取、藤根が赤外分光分析、米田・竹原が薄片作製、竹原が顕微鏡観察・X線分析を行い、竹原が報告をまとめた。

分析は、表面の漆成分を調べるために赤外分光分析を行った。また、塗膜構造を調べるために薄片を作製して、光学顕微鏡と走査型電子顕微鏡による観察及び X線分析を行った。

赤外分光分析は、手術用メスを用いて黒色塗膜表面から薄く削り取った試料を、押し潰して厚さ 1mm 程度に裁断した臭化カリウム (KBr) 結晶板に挟み、油圧プレス器を用いて約 7 トンで加圧整形し、測定試料とした。分析装置は日本分光 (株) 製フーリエ変換型顕微赤外分光光度計 FT/IR-410、IRT-30-16 を使用し、透過法により赤外吸収スペクトルを測定し、生漆の吸収スペクトルと比較・検討した。

塗膜観察用の薄片は、高透明エポキシ樹脂を使用し、包埋し、薄片作製機および精密研磨フィルム (#1000) を用いて厚さ約 50µm 前後に仕上げ、まず走査型電子顕微鏡 (日本電子株式会社製 JSM-5900LV) による反射電子像観察を行った。さらに、赤色塗膜層を対象として、電子顕微鏡に付属するエネルギー分散型 X線分析装置 (同 JED-2200) による定性・簡易定量分析を行った。その後、再度精密研磨フィルム (#1000) を用いて厚さ約 20µm 前後に調整した後、生物顕微鏡を用いて塗膜構造の観察を行った。

表 25 分析対象一覧表

試料 No.	出土 遺構	時期	器種	樹種	木取り	採取部位
139-1	SE213	戦国時代	碗	ハシノキ属	横木取り	外面黒色・赤彩文様部

表 26 生漆の赤外吸収位置とその強度

吸収No.	生漆		ウルシ成分
	位置	強度	
1	2925.48	28.5337	
2	2854.13	36.2174	
3	1710.55	42.0346	
4	1633.41	48.8327	
5	1454.06	47.1946	
6	1351.86	50.8030	ウルシオール
7	1270.86	46.3336	ウルシオール
8	1218.79	47.5362	ウルシオール
9	1087.66	53.8428	
10	727.03	75.3890	

表 27 赤色塗膜層の X 線分析結果 (mass%)

塗膜層	C	SO ₃	HgO
c2層	73.00	7.64	19.35

表 28 塗膜分析結果

試料No.	器種	採取塗膜	下地	塗膜層
139-1	碗	外面黒色塗膜・赤文様	炭粉渋下地	c1層 透明塗層、赤色塗層 (水銀朱)

(3) 結果及び考察

写真 13 に、塗膜薄片の生物顕微鏡写真と、走査型電子顕微鏡反射電子像を示す。図 46 に、赤外吸収スペクトルを示す。図の縦軸は透過率 (%R)、横軸は波数 (Wavenumber (cm⁻¹); カイザー) である。スペクトルはノーマライズしてあり、吸収スペクトルに示した数字は、生漆の赤外吸収位置を示す (表 26)。また、表 27 に赤色塗膜層の X 線分析結果を示す。

塗膜薄片では、炭粉と柿渋からなる下地 b 層、透明塗層 c1 層、赤色塗層 c2 層が観察された (写真 13)。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの吸収 (吸収 No.6 ~ 8) が明瞭に認められるほか、ウルシオールの吸収以外の吸収も一致し、漆と同定された (図 46)。赤色塗層 c2 層からは、X 線分析で水銀 (HgO)、硫黄 (SO₃) が検出され (表 27)、水銀朱の使用が確認された。塗膜の特徴を表 28 に示す。

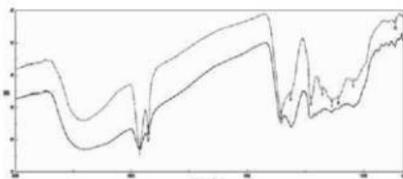
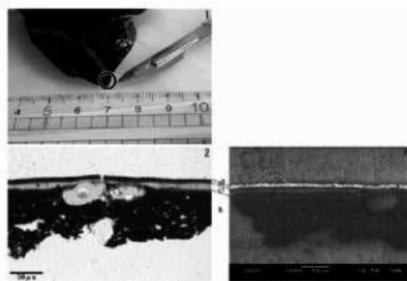
図 46 塗膜層の赤外分光スペクトル (実線: 塗膜層
点線: 生漆、数字: 生漆の赤外吸収位置)

写真 13 漆器塗膜構造

(4) おわりに

増山遺跡の戦国時代の井戸から出土した漆器碗について塗膜分析を行い、塗膜構造や材料について検討した。その結果、炭粉渋下地の上に透明漆が 1 層塗られる構造と考えられた。さらに、赤色の文様部は水銀朱を用いた赤色塗層が 1 層塗られていた。

9 井戸 (SE046・131) 出土礫 の石材同定

藤根 久 (パレオ・ラボ)

(1) はじめに

増山遺跡は、富山県砺波市増山に位置する。調査では、戦国時代から江戸時代初頭の井戸から円礫が多量に出土した。ここでは、井戸から出土した円礫について、肉眼観察による石材同定を行った。

(2) 試料と方法

試料は、増山遺跡の2基の集石土坑から出土した円礫である(表29)。ハンマーを用いて採取した岩石チップを分析試料とした。

石材の同定は、主に肉眼及び実体顕微鏡による組織・構成鉱物等の観察を行った。なお、実体顕微鏡を用いて代表的な石材の表面組織を撮影した。

(3) 結果

2基の集石土坑から同定された岩石種は、1) 砂岩、2) 泥岩、3) 凝灰岩、4) 流紋岩、5) 安山岩、6) 花崗岩、7) 玉髓、8) 石英の8種類であった(表30)。

両集石土坑に共通して検出された岩石種は、砂岩、凝灰岩、流紋岩、安山岩、花崗岩、石英の6種類であった。

最も多く検出された岩石は流紋岩であり、分析No.1 (SE046) で114個(80.3%)、分析No.2 (SE131) で72個(60.5%)であった。次いで安山岩であり、分析No.1 (SE046) で16個(11.3%)、分析No.2 (SE131) で26個(21.8%)であった。

両井戸の礫には、礫種において大きな違いはないが、流紋岩と安山岩の出現頻度に違いが見られた。

以下に、同定した岩石のうち、典型的な岩石の特徴について記載した。岩石の記載は、色調や構成鉱物、および岩石組織の特徴等について行った。

表29 分析試料とその詳細

分析No.	試料	試料数	時期	分析
1	SE046 土坑(円礫)	112	中世から近世初期	肉眼・実体顕微鏡による石材同定
2	SE131 土坑(円礫)	119		

1) 砂岩 (写真14-1)

白色～灰色～黄白色～黒灰色の細粒砂からなる岩石である。

2) 泥岩 (写真14-2)

黒灰色の泥質粒子からなる岩石である。

3) 凝灰岩 (写真14-3)

灰白色～黄色～赤褐色の軽石混じりの岩石である。一部はやや軟質岩石からなる。

4) 流紋岩 (写真14-4)

白色～灰白色～黄色～赤褐色～暗緑灰色～オリーブ黒色などの斑状組織を呈する岩石である。一部の岩石では流理構造を示す。

5) 安山岩 (写真14-5)

黒色～黒灰色の斑晶質の岩石である。

6) 花崗岩 (写真14-6)

石英、長石、輝石類で構成される等粒状組織を示す岩石である。

7) 玉髓 (写真14-7)

赤褐色の均質なガラス質鉱物である。

8) 石英 (写真14-8)

透明の鉱物である。

(4) 考察

遺跡は、射水丘陵の西端、第四紀更新世の中位段丘・隆起扇状地堆積物の上に立地する(図47)。丘陵の西側には、主に小矢部川と庄川が運搬して堆積させた扇状地が広がる。これら両河川の流域には、共通して第三紀中新世の泥岩(図47の凡例OmやHbm, Kmなど)、砂岩(図47の凡例OsやTsなど)、凝灰質泥岩(図47の凡例Tm)、安山岩質溶岩(図47の凡例Ia)、流紋岩質溶岩(図47の凡例Kr)のほか、白亜紀～古第三紀の流紋岩類、飛騨古期深成岩類の花崗岩類が分布する。

遺跡が立地する中位段丘・隆起扇状地堆積物は、主に庄川によって運ばれてきた岩石が堆積すると考えられる。遺跡の東側には庄川の支流である和田川が流下するが、中位段丘・隆起扇状地堆積物を含めて、中新世堆積層分布域に流域をもつ。なお、中新世堆積物は、火山岩類以外は比較的軟質な岩石であり分解するため、礫種としては反映されていない可能性が高い。

和田川は、中位段丘・隆起扇状地堆積物内を流域と

する河川であり、河床礫は庄川によって運ばれた段丘礫と同じと考えられる。

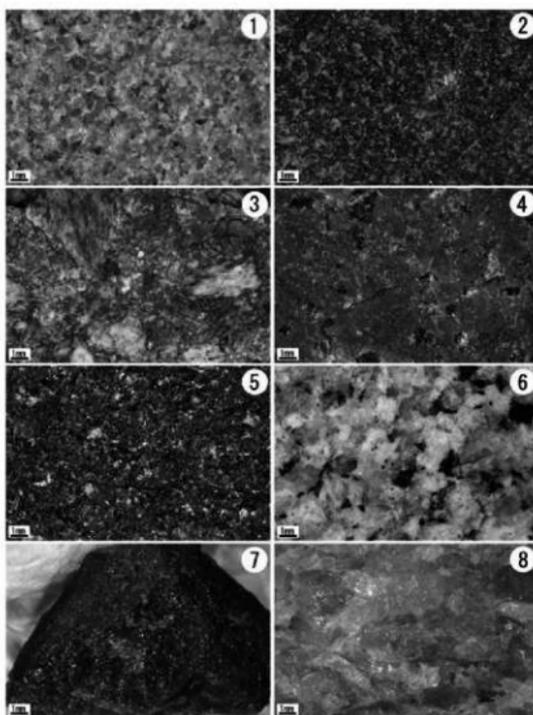
よって、井戸の礫は、庄川あるいは和田川のいずれの河川礫を用いたかについては、区別できないと考えられる。

参考文献

藤井昭二・相馬恒雄・後藤道治・神島利夫・清水正之・金子一夫
1992『10万分の1富山県地質図および説明書』内外地図株式会社 201p

表 30 各遺構の礫の岩石種

大分類	中分類	岩石名	分類No.1 (SE046)		分類No.2 (SE131)	
			個数	割合%	個数	割合%
単層石層	段丘砂	1 砂岩	2	1.4	3	4.2
		2 泥岩		6.0	1	0.8
六段石層	大山砂層	3 凝灰岩	4	2.8	7	5.9
		4 凝灰岩	114	80.3	72	60.3
		5 安山岩	36	11.3	26	21.8
		6 花崗岩	4	2.8	3	2.5
		7 玉髄		0.0	1	0.8
		8 石英	2	1.4	4	3.4
計			142	100.0	119	100.0



1. 砂岩 2. 泥岩 3. 凝灰岩 (軽石質) 4. 凝灰岩 5. 安山岩 6. 花崗岩 7. 玉髄 8. 石英

写真 14 石材の実体顕微鏡写真

第5章 総括

1 遺物の様相

本調査の遺物は、土器・陶磁器、土製品、石製品、金属製品、木製品が出土している。土器・陶磁器は越中瀬戸・瀬戸美濃・珠洲・越前・肥前系・備前系・中国・土師質土器・土師器、土製品は埴壇・土壁、金属製品は鉄製和釘・銅製鉢、木製品は下駄・蓋・箸・漆器・播粉木・加工材・部材等がみられる。ここでは、増山城下町から出土した遺物について、器種構成、器種の特徴、編年についてまとめる。

(1) 器種構成

ここでは土器・陶磁器を中心とした各器種及びその構成についてみていく。図48は、器種と生産地についての割合を求めグラフ化したものである。

既述したとおり、土器・陶磁器は多様な生産地から本城下町にもたらされていることが分かる。本調査における産地別の割合は、瀬戸美濃が3割、越中瀬戸が

2割とこの2つの産地で5割を占める。続いて、土師器が2割、越前が1割、珠洲・肥前系・備前系・土師質土器・中国は各1割未満である。このことから、越中瀬戸・越前・珠洲の地元周辺からもたらされたものが中心となり、肥前系・備前系・中国で補充している。瀬戸美濃が越中瀬戸を上回っているのは、当時瀬戸美濃が流行していたこと、越中瀬戸が流通する以前から城下町が形成され、瀬戸美濃が越中瀬戸より長期間使用されていたこと等が考えられ、越中瀬戸と瀬戸美濃について多くの疑問が残る。

次に、各器種とその構成についてみていく。本調査で確認できる器種は碗(小杯・天目茶碗・丸碗等を含める)・皿(丸皿・内壳皿・折縁皿等を含める)、播鉢、灯明皿、壺・甕、その他(筒形香炉等を含める)である。以下、器種と生産地との関係についてまとめる。

器種

碗・皿(供器具) 越中瀬戸2割と瀬戸美濃5割が主体で、肥前系1割未満と中国2割が補充する。主体の

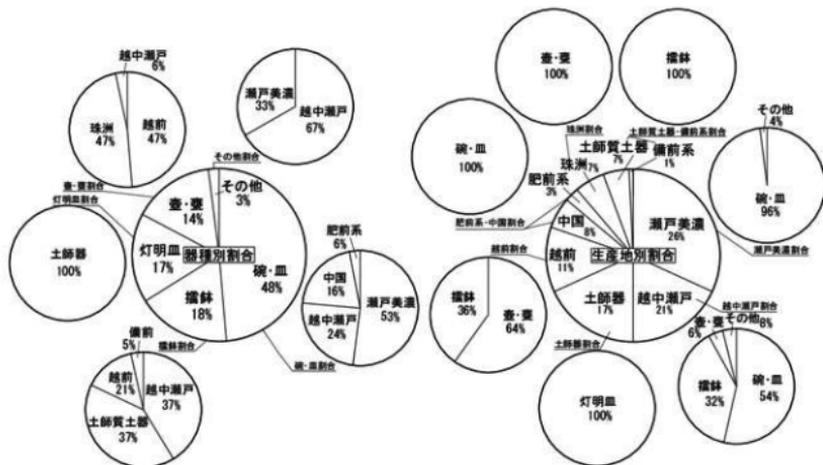


図48 器種と生産地の構成図

越中瀬戸と瀬戸美濃は当時の消費地において区別されていたのか疑問である。

播鉢(調理具) 越中瀬戸4割と土師質土器4割と越前2割が主体で、備前系1割未満が補完する。

灯明皿(灯明具) 土師器のみ。

壺・甕(貯蔵具) 珠洲5割と越前5割が主体で、越中瀬戸1割未満が補完する。珠洲は砥石に転用されていることが多く、貯蔵具として使用されていたのかは疑問である。

その他 越中瀬戸6割と瀬戸美濃4割。

生産地

越中瀬戸 碗・皿5割、播鉢3割、壺・甕とその他各1割。

瀬戸美濃・肥前系・中国 碗・皿のみ。

越前 播鉢4割、壺・甕6割である。

珠洲 壺・甕のみ。器種と同様。

土師質土器・備前系 播鉢のみ。

土師器 灯明皿のみ。

以上の結果、器種と生産地との間には関連性を窺い知ることができる。

(2) 編年

本調査では、土器・陶磁器の中で越中瀬戸と瀬戸美濃が主体を占め、編年が整理されている瀬戸美濃を軸とする。また、第2章の表3で掲載した増山城と城下町の歴史年表と図49を対比して編年を考えたい。また、各土器・陶磁器の編年対応表を表31に掲載した。以下、土器・陶磁器の第1期から第V期について説明する。

第1期

16世紀前葉までを第1期とし、大窯1段階までである。表3では、1362(貞治元)年から16世紀前葉の神保長職氏が富山城を築城する以前に相当する。第1期は、歴史的事項においても増山城と直接関係しているのか不明瞭な時期でもある。本調査では珠洲の壺・甕が出土し、14～16世紀と推定されるが、いずれも小破片のため城下町に伴うものかは不明で、砥石に転用されているものが多く、破片として城下町に持ち込ま

れた可能性も考えられる。また、本調査では大窯1段階天目茶碗(186)が整地層から出土している。しかし、この時期に相当する遺物は1点のみで、生産地での編年は大窯1段階であるが、城下町で使用されたのはもう少し後になってからで、伝世品と考えるのが妥当であろう。

第II期

16世紀中葉から後葉を第II期とし、大窯2～3段階である。表3では、1543(天文二)年から1581(天正九)年に相当する。

本調査では、丸皿(53)、灰皿(15)、内壳皿(190)が出土し、15は大窯2～3段階、53・190は大窯3段階と推定され、出土量は極少量である。越前・土師質土器・中国・土師器は概ね16世紀後半と推定され、図49では幅をもたせて表示した。

当時は神保長職氏が増山城を富山城の支城としていた時期で、増山城が神保氏の本城としての役割を果たすのは1562年(永禄五)からである。このことから、本調査での遺物の希薄化は史実と連動する可能性があり、増山城は詰城として有事の際に一時的に使用される城に過ぎず、恒常的に居住することは少なかったと考えられる。上杉氏や一向一揆氏による動乱の中にあつた時点では、城下町は未発達だったと推察される。

第III期

16世紀後葉から17世紀初頭を第III期とし、概ね大窯4段階である。表3では、1583(天正十一)年から1615(元和元)年に相当する。

第III期に入ると、本調査において遺物量が増加する。出土遺物の大半が第III期に含まれる。肥前系と備前系は第III期で、越前・土師質土器・中国・土師器は生産地の編年も考慮しているため、第II期から幅をもたせているが、その他の状況から第III期の可能性が高い。

1583年に佐々成政氏が越中を平定してようやく落ち着くが、まもなくして佐々氏が羽柴氏に反旗を翻し、1585(天正十三)年に降伏するまで動乱に逆戻りする。同年に前田氏が増山城に入って以降安定していたと考えられる。出土遺物と歴史的事項から、佐々氏と前田氏が増山城に入って以降に、城下町が形成されていっ

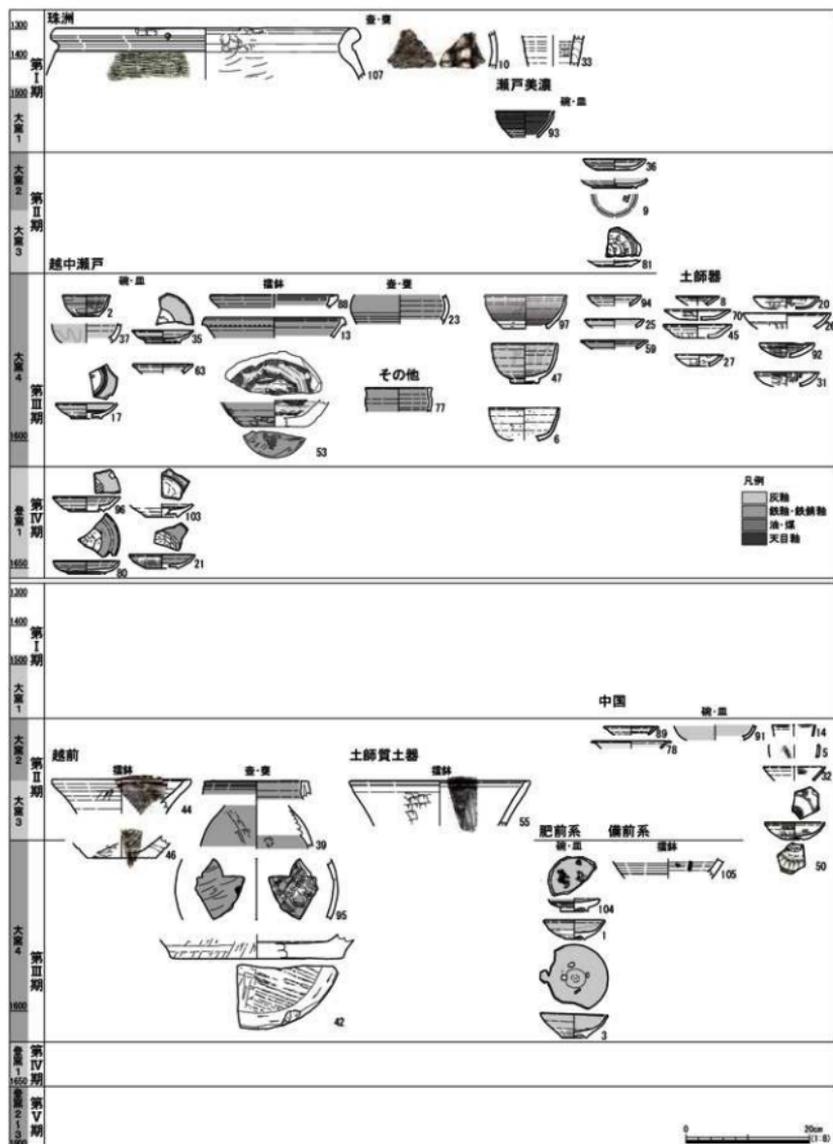


図 49 城下町の編年図

たと推察される。第Ⅲ期が大きな画期に位置付けられる。

第Ⅳ期

17世紀前葉から中葉を第Ⅳ期とし、登窯1段階である。表3では1615(元和元)年から1663(寛文三)年に相当する。

本調査では、越中瀬戸のみ少量確認でき、その他はみられない。越中瀬戸は内売皿(27・175・179・180)で、175は付高台、180は三角高台にケズり出す。180は軸止めを持つが、その他は軸止めがみられない。第Ⅲ期は比較的焼成が良好で、25は胎土が磁器のような白色であったが、第Ⅳ期のものは焼成が不良で、生焼け状態である。

資料的な制限はあるものの、このことは増山城下町から増山村に変化した可能性を示唆している。

第Ⅴ期

本調査ではみられなかったが、次に説明する昭和50・52年調査において出土した17世紀後半以降の遺物である。ここでは増山村が用水沿いに移動する17世紀後半以降を第Ⅴ期として設定しておく。

小結

最後に、過去の増山遺跡の出土遺物との比較検討を行い、増山遺跡出土遺物のまとめとしたい。

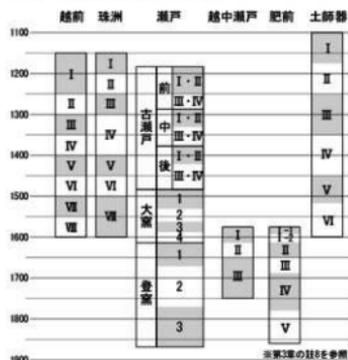
昭和50・52年調査では、越中瀬戸・瀬戸美濃・珠洲・越前・肥前系陶磁器・中国(青花・白磁)・土師器・土師質土器、煙管、石臼等が出土している。土器・陶磁器では越中瀬戸が主体である。

越中瀬戸 碗・皿・向付・搦鉢・徳利・火入等がみられる。本調査と器種が若干異なっており、時期も概ね第Ⅳ期に相当する。

瀬戸美濃 碗・皿・搦鉢・茶入等がみられる。瀬戸美濃の割合は越中瀬戸に対して少ない。時期は概ね第Ⅱ・Ⅲ期に相当する。

珠洲・越前・土師質土器・中国・土師器 本調査と概ね同様で、珠洲は第Ⅰ期、越前・土師質土器・土師器は第Ⅲ期、中国は第Ⅱ・Ⅲ期に相当する。土師器は灯明皿と考えられる。

表31 土器・陶磁器編年対応表



肥前系陶磁器 本調査では陶器のみで第Ⅲ期に相当するが、昭和52年調査では磁器がみられ、第Ⅲ・Ⅳ期に相当する。また、磁器では17世紀後半から19世紀にかけてのものもみられるが、遺構に伴うかどうか確認できないので、今後の課題である。増山村の一部が用水沿いの新しい村に移動せず、残っていた可能性も考えられ、現在も増山遺跡の西端に宅地が1軒確認できるのもその名残りであろうか。

煙管・石臼 石臼は本調査においても出土しているが、煙管は出土していない。18世紀前半の煙管と推定されている。

以上から、器種構成は本調査と概ね一致し、越中瀬戸(碗・皿・向付、徳利、搦鉢、壺・甕、香炉、火入等)、瀬戸美濃(碗・皿、茶入)・珠洲(壺・甕)・越前(搦鉢、壺・甕)・肥前系陶器(碗・皿、甕)・中国系青花・青磁・白磁(碗・皿)、土師器(灯明皿)・土師質土器(搦鉢)、石製品(石臼・砥石)、金属製品(和釘・鉢・煙管)、木製品(漆器椀・皿、箸、蓋、下駄、各種部材等)が増山城下町の器種構成とまとめることができる。

本調査との相違点 昭和50・52年調査は第Ⅲ期が少量で、第Ⅳ期が主体となり、加えて、本調査ではみられなかった17世紀後半以降の遺物が出土している点である。このことは、本調査が城下町の範囲内の東端で増山城に近く、昭和52年調査が城下町内の西端で増山城から遠いことと関係しているのであろうか。

(片山博道)

2 土塁の復元と城下の形成過程

これまで増山城下町は昭和50-52年の試掘調査の成果などをもとに、小地名調査の成果や従前図を援用しつつ解明が試みられて来た。このたび実に39年振りには本発掘調査を行い、多くの情報を得る事が出来た。新発見もあれば、既存の解釈を追認する結果もある。本節では主な成果についての総括を行う。

(1) 土塁の復元試案

増山城下町の大きな特徴の一つが土塁の存在である。富山県内の城下町で唯一残る土塁として知られる。今回、この土塁の北側を試掘調査する機会を得た。またとない好機である。詳細は第1章に譲り、ここで土塁の復元作業を試みたいと思う。

現存する土塁は、和田川に突き出る舌状台地の先端を横断するように存在し、城下町の主要道路「下町大道」の南側にある。既往の小地名調査¹もほ場整備前の地形

- 1 高岡 徹 2008「城下町の形成」『増山城跡総合調査報告書』砺波市教育委員会、野原大輔 2014「増山城下町の構造と景観復元」『守護所シンポジウム 20 清須 新・清須会議資料集』など
- 2 佐伯安一 1991「付録三 増山の小地名調査」『富山県指定史跡 増山城跡調査報告書』砺波市教育委員会



図50 ほ場整備事業前土塁断面模式図
(砺波市教育委員会 1969「砺波市の文化財」より転載)

表 32 土塁規模の諸元

遺構名	延長	比高差**	比高差***	単位 (m)			
				最大幅(下端)	最小幅(下端)	最大幅(上端)	最小幅(上端)
土塁(現存)	84.4	4.0	2.0	10.0	3.9	5.5	1.1
土塁(復元)	58.3*	—	—	—	—	—	—
土塁(現存+復元)	154.0*	—	—	—	—	—	—

*は推定値 ** 東側(和田川側)の比高差 *** 西側(寺土原側)の比高差



図51 土塁周辺の小地名図
(砺波市教育委員会 2008「増山城跡総合調査報告書」より転載)

図によって、現存の土塁の北にかつて片割れが存在した事が指摘されていたが、これまで城に注目が集まり土塁はその稀少性に比べて積極的に論じられる事は少なかった。昭和50-52年の試掘調査では、土塁にトレンチが掘られ、簡易な断面図が作られた(図50)。土塁の断面規模を知り得る唯一の手掛かりである。これによると、規模は東側の比高差4.0m、西側の比高差2.0m。

土塁盛土と空堀 試掘調査ではT6・T7で2条の溝を確認した。水底堆積物が無いことから、機能時は流水がなかったと考えられる。埋土の堆積状況から短期間のうちに人為的に埋められたとも推察され、この溝は断面形状から2本合わせて1つの空堀と捉えたい。また、T7東側で土塁の盛土層が確認された。以上の状況証拠から、溝は空堀、そして空堀の東側に土塁が存在した可能性が高いことが判明した。

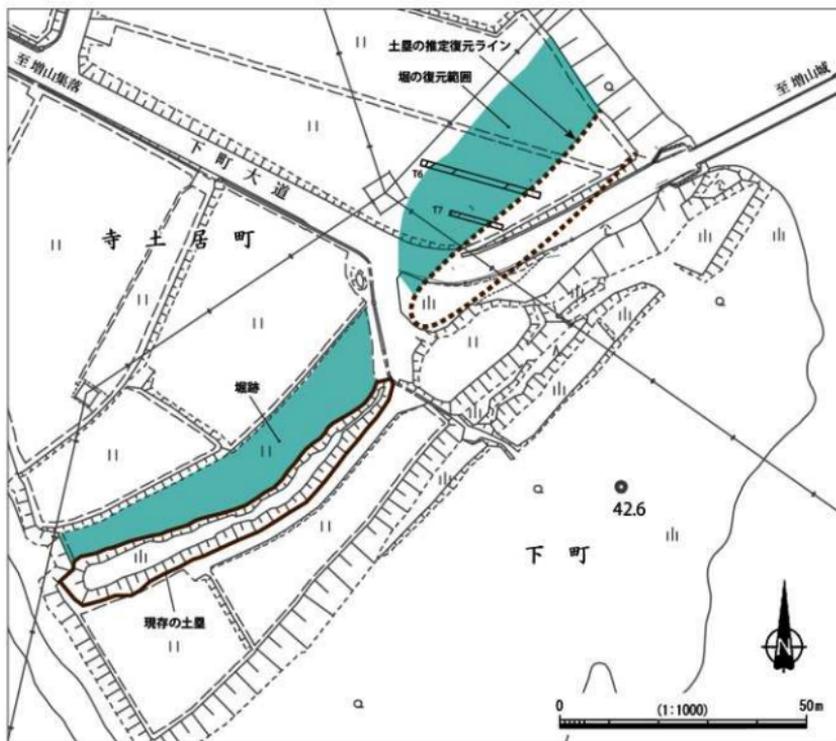


図52 土塁の復元図 S=1:1,000

肝心なのは、その年代である。盛土層中の炭化物で放射性炭素年代測定を試みたが、年代値は縄文中期を示した。戦国期から大きく乖離する年代値だが、縄文中期の地層が自然堆積する層位でない事は明らかで、逆に盛土層である蓋然性が高まった。

以上の結果を踏まえて、土塁を図上復元したのが図52である。土塁の規模に関する数値は表32の通り。

現存の空堀の幅(上端)は、水田の形状から約5～12mと推定される。復元の空堀は、試掘データを元に推定すると最大幅(上端)が約16mとなる。

喰違虎口 2本の土塁を復元すると位置関係は直線的に並ぶのではなく、やや喰い違い状となる。地形図では下町大道がここでS字状にクランクしており、土塁の間は「喰違虎口」であった可能性がある。

土塁の役割 土塁は、西側に堀を持つ。つまり、西からの防御を意識して構築されており、下町と城を守る役割がある。併せて下町側との比高差が寺土居町側の倍もあり、東側の防御性も十分にある。空堀に視点を置くと、土塁は増山城の防御線の最外郭、つまり総構(惣構)の役割が思い浮かぶ。下町側との比高差に視点を置くと、城下町の「町曲輪」的機能が看取される。

上城戸・下城戸 これは全くの予見に過ぎないが、土塁は城下の東西2箇所に存在したのではないかと、越前一乗谷朝倉氏遺跡では城下に上城戸と下城戸があり、谷が最も狭くなる箇所に取付く。増山の場合、現存の土塁を上城戸と仮定すると、八兵衛谷の頂部近くに土塁と思いき旧地形があり、下町大道も若干クランクしている。ここに下城戸の可能性を見出したい。

表 33 歴史年表

西暦	和暦	出来事
1590	天正十八	小田原攻め
1591	〃 十九	御土居構築
1595	文禄四	小丸山城の総構完成
1599	慶長四	金沢城内惣構構築
1610	〃 十五	金沢城外惣構構築

構築時期 今のところ、不明といわざるを得ない。

試掘で盛土層を確認出来たが、放射性炭素年代測定は土塁構築年代の判断材料となり得なかった。

高岡徹氏は「増山城下町の変遷模式図」で、土居(土塁)の構築を16世紀後半、佐々成政期に置いた³。時期に異論はないが、瀬戸美濃を軸とする遺物の編年観(第5章)を俯瞰すると土塁は第Ⅲ期に造成され、その構築者は佐々氏よりも前田氏とみた方が蓋然性が高いように思われる。今後、土塁の発掘やその他史料の出現を待って構築時期を見定めた。

3 高岡徹 2008「4 城下町の形成」『増山城跡総合調査報告書』砺波市教育委員会

(2) 調査成果のまとめ

このたび城下町の中心部分を掘る、稀有な機会を得た。調査面積が狭小なので、淡い期待を抱きつつ調査を進めたが、処理し切れない程の情報を得ることが出来た。ここで改めて調査成果をまとめておきたい。

考古学的成果 試掘調査では、土塁の盛土層と土塁に伴う空堀を確認した。2本の土塁が対になり、喰い違い状に配置される可能性を見出した。残念ながら構築時期を知り得ることは出来なかったが、遺構・遺物の年代と軌を一にすると解釈される。ここでは、前田氏が構築した可能性を指摘しておく。

遺構 16世紀後葉から17世紀前葉の遺構を確認した。掘立柱建物4棟以上(柱穴338基)、土坑8基、井戸10基、計356基の遺構である。狭い調査区に高密度で遺構が分布する状況で、時期は極めて短期間である。特徴として柱穴の重複、井戸2～3基のまと



図 53 城下町の復元図

表 34 瀬戸美濃を軸とした増山城下町編年表

編年	年代	遺物量	出土遺物	城主・城代
第Ⅰ期	～16世紀前半 (1363～1542)	極少量	珠洲	神保
第Ⅱ期	16世紀中葉～後葉 (1543～1581)	極少量	瀬戸美濃	神保 上杉 一向一揆
第Ⅲ期	16世紀後葉 ～17世紀前半 (1583～1615)	多量	瀬戸美濃 越中瀬戸 越前・中国 土師器等	佐々 前田
第Ⅳ期	17世紀前半～中葉 (1615～1663)	少量	越中瀬戸	—
第Ⅴ期	17世紀後半以降 (1664～)	少量	—	—

まり、整地層が多数あることが挙げられ、建物の建て替えと整地を何度も行った様子が窺える。

遺物 調査面積に比べて瀬戸美濃の出土量が多く、当初は越中瀬戸との判別が難しかったが、藤澤良祐氏の鑑定によりその多くが瀬戸美濃と判明した。おかげで、瀬戸美濃を軸とした城下町の編年を組むことが出来た。大枠はこれまでの遺跡消長と大差ないが、編年が確立した瀬戸美濃を基にすることで、細かな年代を与えることが出来た(表34)。ただし、これは生産地の編年を適用したもので、搬入や伝世を考えると時期は少し下る可能性がある。

自然科学分析の成果 放射性炭素年代測定では、土塁の盛土最下層の炭化材が縄文時代中期末頃、暗栗(SD010)出土木材が1958年以降、井戸(SE213)出土のヒョウタン仲間種子が15世紀後半～17世紀前半との年代値を得た。

城下町機能時の古環境を復元するため、花粉分析・種子分析を行った。井戸(SE213)の花粉分析では、コナラ属コナラ亜属が多く、クリを伴う状況から周囲に二次林が広がることが推定された。また、イネ科やアカザ科の花粉から周囲に草本類が広がることや、ハンノキ属・ミズバショウ属・アリノトウグザ属の花粉から、湿地的環境が存在することが推定される。栽培植物としてはソバ属・ペニバナ属・トウガン属・アブラナ科・ナス属の花粉が産出され、イネの栽培のほか冬瓜、スイカ、大根、蕪などの栽培が推定される。井戸(SE213)

出土の大型植物遺体分析では、イネ・ヒエ属・キケマン属・ヒョウタン仲間・アカザ属・ヒサカキ属・ナス属・シソ属・ワラビの種子が産出され、栽培植物としてアサ・メロン仲間・ソバ・ナスがあり、量的にイネの粉殻が多く、糊摺りの後の粉殻が井戸に廃棄または井戸に流入したものと思われる。畑作物の産出数は少ないが、種類数が多い。また、昆虫遺体の分析を進めれば、当時の環境をさらに復元できるという。

ほかに魚骨が1点出土した。被熱により収縮しており、体長40-50cmのタイ科腹椎と推定される。

井戸出土の木製品25点の樹種同定を行い、ヒノキ・スギ・マツ属複雑管束亜属などが確認された。木製品の種類による分析では、樫は堅硬な樹種であるアサダ、付け木はマツ属複雑管束亜属・ヒノキ・モクレン属・エノキ属で油分が多く燃焼性が高い樹種を用いている。ヒノキは着火性高い。鎌はスギで、加工性の良い樹種を使っている。梅原胡摩堂遺跡でクリの鎌が1点出土している。下駄はマツ属複雑管束亜属とヒノキ。漆器椀はハンノキ属と広葉樹。ハンノキ属は軽軟で加工性が高い。そのほかに柱はコナラ節で堅硬な樹種を選んでいる。

漆器椀の塗膜分析では、炭粉渋下地の上に透明漆が1層塗られる構造と推測する。赤色の文様部は水銀朱を用いた赤色漆層が1層塗布されていた。

井戸(SE046・131)出土の石材同定では、流紋岩や安山岩が多数を占め、他に凝灰岩・花崗岩・砂岩・石英が確認され、庄川や和田川の運搬物と推定される。

(3) 城下町の形成過程

面的調査で明らかとなった遺構の濃密な分布は、高い集住性を意味するのだろう。疎集とは程遠い状況である。

城下町の都市機能 城下町は戦国時代から江戸時代にかけて成立した都市形態であり、戦国城下町では家臣団の集住や市町の吸収が一部では進んだが、全家臣が集住した訳ではなく、商工業者の多くが在地に居住したままだった。画期となったのは織豊政権で、「織田信長が1576年(天正4)建設を始めた安土では、家臣団

4 宮崎勝美2007「城下町」『歴史考古学辞典』吉川弘文館

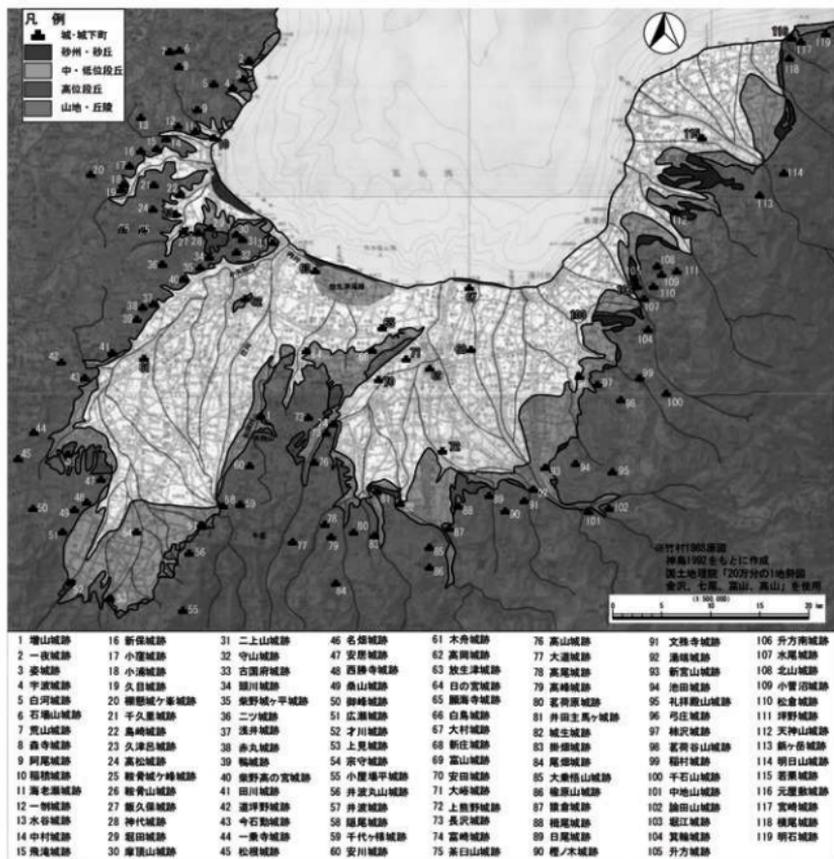


図 54 富山県における城と城下町の分布図

集住の徹底が図られるとともに、楽市・楽座や免税政策により商工業者の誘致が進められ、武家屋敷と町屋を一体化させた城下町が整備され、「豊臣秀吉もこれに続いて大阪・伏見などを統一政権の中心にふさわしい城下町として整備し、近世城下町の基礎をつくりあげた」という。増山城下町はどの段階に位置付けられるのだろうか。

城下町のプラン 増山の場合、家臣団の屋敷は城下の下町、城内の御所山屋敷～池ノ平等屋敷にかけての区域が候補に挙げられる。侍屋敷(龍波)という地名があるが、

位置的に考えて城主居館の可能性はある。

市に関わる地名や痕跡が見当たらないので、近在の市(中田・柳瀬)が吸収されることなく存続したのであろう。商工業関係では、鉄匠町という地名や絵物師の存在から窺えるように、ある程度の集住は進んでいたものと思われるが、大工・鍛冶・染物などの手工業者の気配がない。城下町の中心はあくまで寺土居町(=城戸の内)で、いわば寺町である。通常、城下町では寺町を都市防衛のため外縁部に配置される事例が多く、寺

5 前編註 宮崎 2007

種類	11c	12c	13c	14c	15c	16c	17c	18c	19c
掘立建物									
土庫									
城壁									
土庫									
土庫									
城下町									
土庫									
城下町									
掘立建物									
土庫									
城壁									
土庫									
城下町									
掘立建物									
土庫									
城壁									
土庫									
城下町									

図 55 越中国の中近世建物

(北陸中世考古学研究会 2004『掘立柱建物から礎石建物へ』
配布資料を転載)

土居町に寺を集めたのも同様の理由ではなかろうか。

概観すると、増山城下町は寺町や土庫など計画的秩序性が一部で窺えるものの、市の吸収や商工業者の集住が未発達であるため、中世から近世に至る過渡的な様態であったと捉えたい。

城下町の隆盛と衰退 遺物から導かれた年代は16世紀後葉から17世紀前葉であり、織豊政権期を中心に町の形成が進んだと理解できる。この時期に突発的に町作りが始まった訳ではなく、16世紀中葉から後葉にわずかに遺物が出土するので、何らかの萌芽的な動きがあったのだろう。ただし、この時期に町が隆盛を迎えるのは、大きな動きが背景にあったと考えたい。佐々成政が増山城を拠点化したこと、前田氏が砺波郡を領有後に増山城・木舟城の二城体制を敷いたことである。

いずれにしろ城下は廃城とともに終焉を迎え、農村化した。その後、1663年(寛文三)に段丘上に莽谷野用水が開鑿され、翌年に増山新村が村立てされて移住が進み、幕末までには現在のように段丘上に街村が形成された。今回の調査区は、まさに城下の形成から衰退、農村化した時期にあたる。

その過程で、建物の複数回の建て替えや何度も行われた整地をどう解釈すればいいのだろうか。一般に掘立柱建物の耐用年数は20-30年といわれるので、多く見積もっても2回程度で十分である。増山城特有の事情として為政者の交替が多くなされたが、仮にこのこ

6 矢守一彦 1988『一 近世城下町プランの基調』『城下町のかたち』筑摩書房

7 安力川恵子 2008『2 増山村と増山新村』『増山城跡総合調査報告書』砺波市教育委員会

とを反映しているとすると遺物の編年と若干ズレが生じる。

城下町の形成過程の中で、町の近在には人の手で管理された二次林があり、近くに草本類が繁る土地や湿地帯があり、イネやソバなどの多くの種類の植物が栽培された。加えて、タイ科という嗜好性の高い魚が内陸の城下町にもたらされ、豊かな食生活を送っていたことがわかった。城下町の人々が住む環境の一端を知ることができ、妙に親近感が感じられる。

さて、県内の城下町に目を転じると、調査事例は驚くほど少ない。木舟城の城下町である開懸大滝遺跡(高岡市)は、存続年代が16世紀中頃～末と極めて短く、増山に似る。調査地点は鋳物師や鍛冶師が住む町の可能性が指摘され、建物を54棟を復元している。平野部の城下町であるがほぼ同時期に存在したことから前田氏が関わった町という共通点もあり、今後詳細に比較検討すべき対象である。今回の調査を端緒に、越中国の中世山城と城下の在り方が解明されることを望む。

今後の課題 今回の発掘により、城下町の様相の一端が明らかとなったが、城下寺院の創建時期と考古学的年代にズレがある。考古学的には16世紀後葉から17世紀前葉までの30～40年程しか存続しないが、寺院の創建時期はさらに年代が遡るのはなぜか。

他方、建物群の性格の解明、土庫の構築時期と機能の解明、昆虫遺体の分析を通しての古環境復元の補足など残された課題はあるが、一歩ずつ研究を進めて中世城下町の実像に迫りたい。

(野原大輔)

8 (財)富山県文化振興財団 2000『開懸大滝遺跡・地崎遺跡発掘調査報告書』

<参考文献>

- 河合久則 1990『付二 増山城下の寺院』『砺波市史資料編1』
久々忠義 1991『10 増山城下町遺跡の発掘調査(昭和52年)から』『富山県指定史跡 増山城跡調査報告書』砺波市教育委員会他
佐伯哲也 2013『77. 増山城』『越中中世城郭図集』桂書房
高岡 徹 1990『増山城と中世の城館』『砺波市史資料編1』
高梨清志 2004『越中(富山県)の様相』『掘立柱建物から礎石建物へ』北陸中世考古学研究会
野原大輔 2010『越中の争乱と増山城—現状と課題 2010—』『富



増山城と城下町 1 (南から)



増山城と城下町 2 (北から)

写真図版 2 調査地近景



1 面城下町近景 (南から)



2 面近景 (西から)

写真図版 3 基本層序



調査区北壁土層断面 (南から)



調査区西壁土層断面 (東から)



調査区南壁土層断面 (北から)



調査区東壁土層断面 (西から)



川層土層断面 (東から)



北壁土層断面西端 (南から)



西壁土層断面中央 (東から)



東壁土層断面南端 (西から)

写真図版 4 整地層 (SX028)



SX028 検出状況 (南から)



西壁土層断面中央 (東から)



西壁土層断面中央 (東から)



1.SP003 礎石検出 (南から)



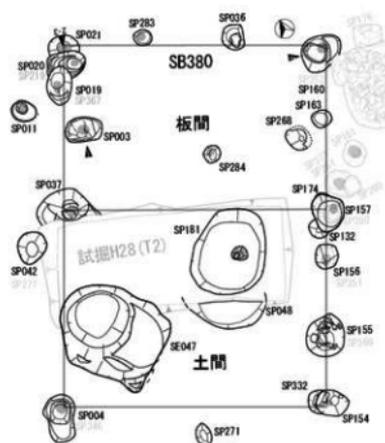
2.SP020 断面 (北から)



3.SP219 断面 (北から)



4.SP160 断面 (西から)



写真図版 6 区画 2(SB381・382)



1.SP242 断面・柱材検出(東から)



2.SP050 断面(東から)



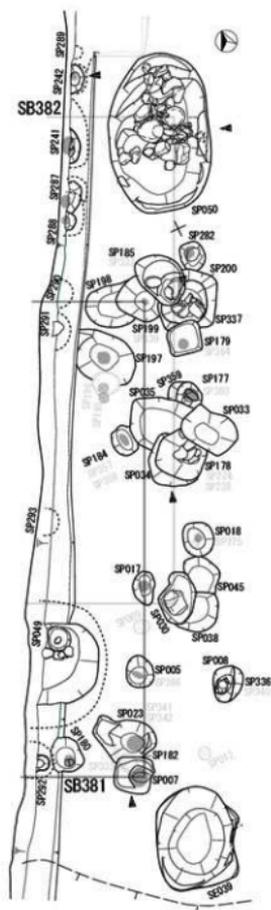
3.SP034・178・228 断面(南から)



4.SP200 断面(北から)



5.SP007 断面(南から)





1.SP025 断面 (南から)



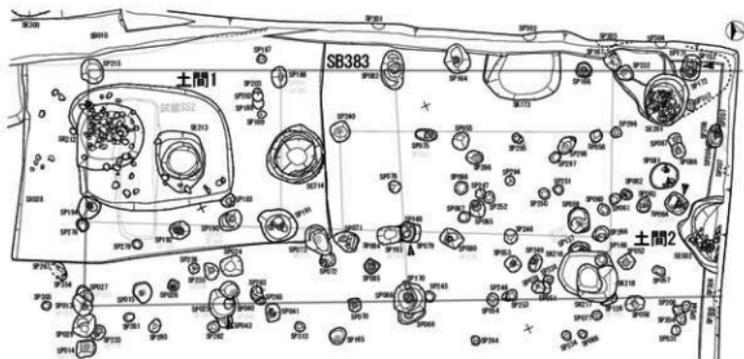
2.SP152・171・172 断面 (東から)



3.SP064 礎石・根石検出 (北から)



4.SP168 根石検出・SP079・84・193 (南から)



写真図版 8 区画 4(SB384)



1.SP119 断面 (南から)



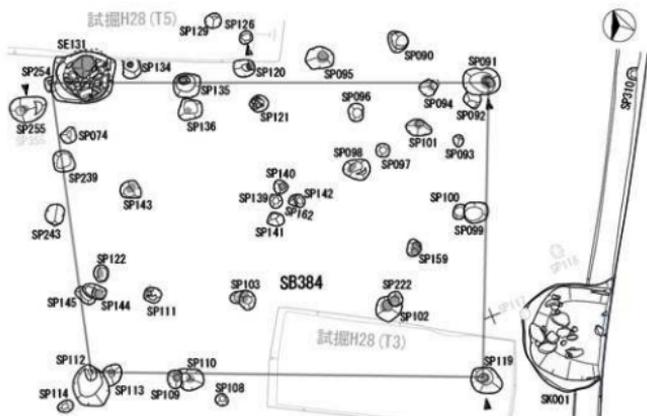
2.SP091 断面 (南から)



3.SP255 断面 (北から)

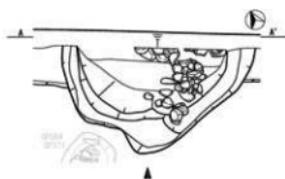


4.SP126 遺物出土状況 (南から)





1.SE002 曝出土状況 (西から)



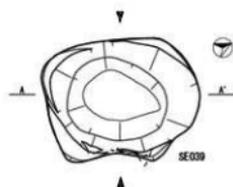
1.SE039 断面 (東から)



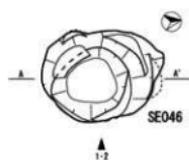
2.SE039 完掘 (西から)



1.SE046 曝出土状況 (東から)



2.SE046 完掘 (東から)





1.SE047 裸出土状況 (南から)



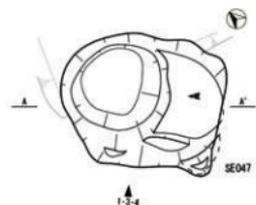
2.SE047 石白出土状況 (東から)



3.SE047 断面 (南から)



4.SE047 完態 (南から)



1.SE131 断面 (南から)



2.SE131 裸出土状況 (北から)



3.SE131 石白出土状況 1 (北から)



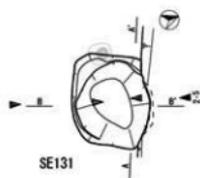
4.SE131 石白出土状況 2 (南から)



5.SE131 完掘 (北から)



1.SE133 断面 (東から)



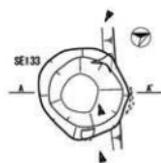
2.SE133 裸出土状況 (東から)



3.SE133 陶器腕出土状況 (東から)



4.SE133 完掘 (北から)





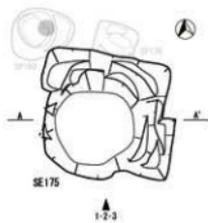
1.SE175 露出土状況 (南から)



2.SE175 断面 (南から)



3.SE175 完掘 (南から)



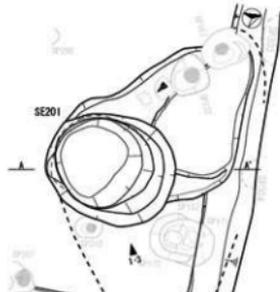
1.SE201 断面 (東から)



2.SE201 露出土状況 (北から)



3.SE201 完掘 (東から)





1.SE213 断面 1 (南から)



2.SE213 遺物・礫出土状況 (南から)



3.SE213 断面 2 (南から)



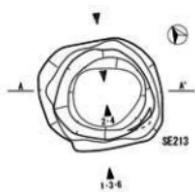
4.SE213 有機物出土状況 (南から)



5.SE213 有機物出土状況 2 (北から)



6.SE213 完掘 (南から)



7.SE213 完掘 冠水状況 (南から)

写真図版 14 井戸 (SE214)



1.SE214 断面 1 (南から)



2.SE214 炭化物集中範囲 (東から)



3.SE214 木製品出土状況 1 (南から)



4.SE214 断面 2 (南から)



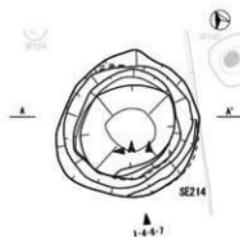
5.SE214 木製品出土状況 2 (東から)



SE214 発掘 (南から)



7.SE214 発掘 冠水状況 (南から)





1.SK001 礫出土状況 (西から)



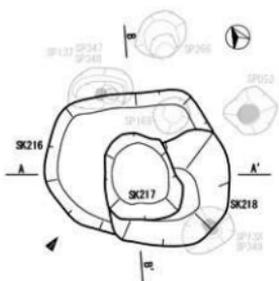
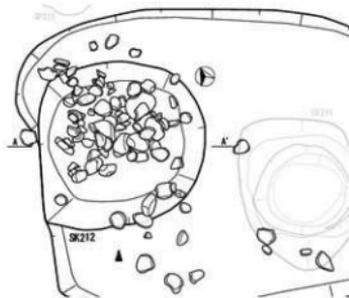
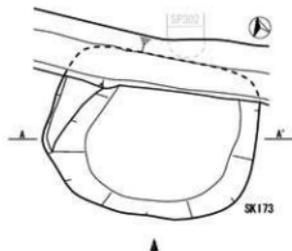
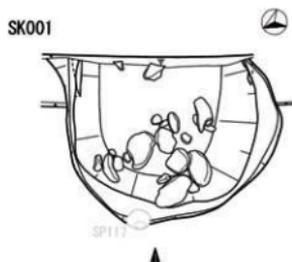
1.SK173 断面 (南から)



1.SK212 礫出土状況 (南から)



1.SK216・217・218 断面 (南西から)





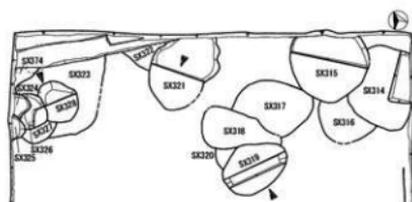
1. 向って左から SX328・326・324 (北から)



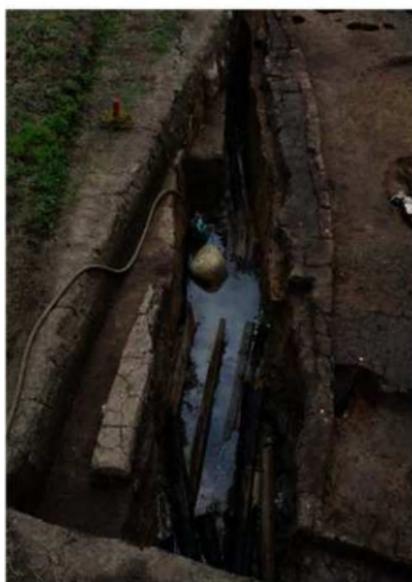
2. SX321 断面 (北から)



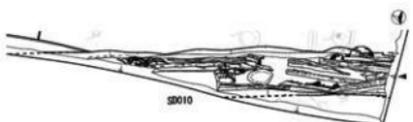
3. SX319 断面 (南から)

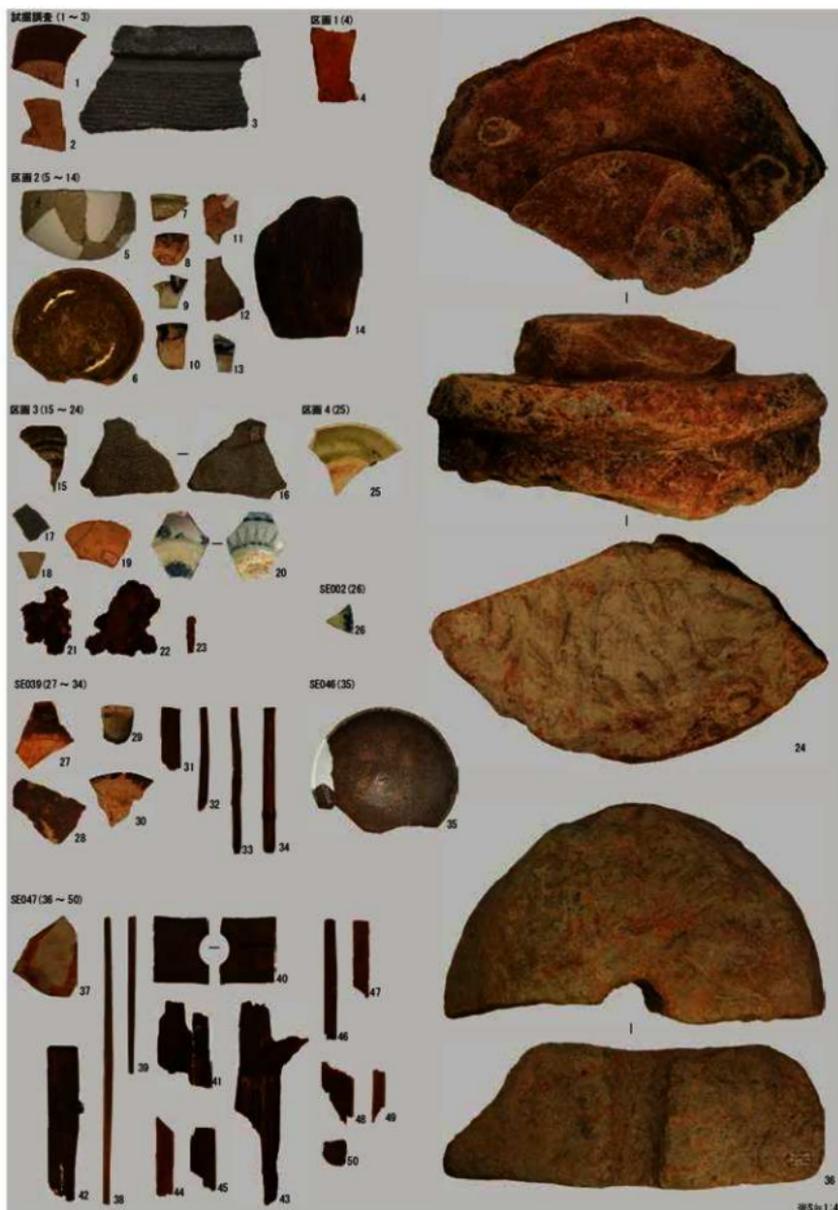


4. SX314 断面 (西から)



1. SD010 木材出土状況 (西から)





写真図版 18 出土遺物 (2)





写真図版 20 出土遺物 (4)



SE214、SK001・173・212、遺構外

報告書抄録

ふりがな	ますやま じょうかまち せんごくき しゅうらく ちょうき							
書名	増山城下町における戦国期集落の調査							
副書名	室牧線鉄塔建替 (No. 62 ~ No. 62-2) 他工事に伴う埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編者名	野原大輔 (砺波市)、片山博道 (上智)、吉永亜紀子 (日本動物考古学会員) 中村賢太郎・伊藤茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtadize 森雅志・バンダリ スダルジャン・佐々木由香・小林克也・竹原弘展・藤根久・米田恭子 (パレオ・ラボ)							
編集機関	①砺波市教育委員会 ②株式会社上智							
所在地	①〒932-0393 富山県砺波市庄川町青島 401 TEL 0763-82-1904 FAX 0763-82-3521 ②〒939-1351 富山県砺波市千代 176 番地の 1 TEL 0763-33-2085 FAX 0763-33-2558							
発行機関	北陸電力株式会社 富山支店 総務部 用地チーム							
所在地	〒930-8543 富山県富山市桜橋通り 3-1 TEL 076-441-2511 FAX 076-442-8869							
発行年月日	西暦 2018 年 3 月 30 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号					
ますやまじょうかまち 増山遺跡	上智大学と公立ますやま 富山県砺波市増山	162086	208027	36 度 39 分 05 秒	137 度 02 分 11 秒	20170403 ~ 20170619	485.70 1 画 259.04 2 画 223.66	室牧線鉄塔建替 (No. 62 ~ No. 62-2) 他工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
増山遺跡	城下町	戦国～ 江戸初期	掘立柱建物・礎石建物 井戸・土坑	陶器 (瀬戸美濃・越中瀬戸・越前・珠洲) 中国磁器 (青磁・白磁・青花) 土師器 (灯明皿) 石製品 (石臼・砥石) 金属製品 (鉢、釘) 木製品 (下駄・蓋・付木)			16 世紀後葉から 17 世紀前葉の建物を 検出 備前系の加賀作見 窯産の播磨が出土	
	散布地	奈良・平安時代		須恵器杯				
要約	<p>増山遺跡では、調査以前、土塁より東側の字下町が城下町とされていたが、過去の調査において、柱穴・土坑・井戸等が検出されたことにより、城下町の範囲が土塁より西側まで広がることが明らかになった。</p> <p>今回の調査では、16 世紀後葉から 17 世紀前葉の掘立柱建物 (柱穴群)・井戸・土坑と整地層、時代不明の樹木痕、現代の暗渠が確認された。また、各遺構や整地層からは 14 世紀から 17 世紀前葉の陶磁器・土師質土器・土師器・石製品・木製品・金属製品が出土した。陶磁器の生産地は越中瀬戸、瀬戸美濃、越前、珠洲、肥前系、備前系、中国と多くの生産地から本遺跡に搬入されている。特筆すべき点は掘立柱建物と井戸である。井戸は屋上と屋外があり、掘立柱建物の板間と土間が想定される。特に井戸からは豊富な湧水を調査時においても確認し、そのため、木製品が多数出土した。その中には、製品の他に、木や竹を削った破片、小枝を取り除いた自然木等、何らかの作業をしていた様子が窺われる。また、土間には掘り込んで整地している部分も確認された。遺物では備前系の加賀作見窯産の小破片が出土し、北陸における備前研究に一石を投じた。</p> <p>その他、下層調査では深い谷地形と樹木の痕跡を確認し、調査区周辺が森林であったと想像される。</p> <p>本調査は、戦国期から近世への移行期に形成・衰退・村落化した城下町の貴重な調査で、今回は狭い調査区であったものの、約 400 基近くの遺構が検出されたことはそのことをよく物語っており、その重要性が指摘される。</p>							

本書の仕様

- 判型……………A 4判
- 頁数……………110頁
- 組版……………写真植字(13級明朝基本)
- 印刷……………オフセット印刷
- 製版……………挿写真(白黒, Sトーン)
写真図版 FMスクリーン印刷
- 用紙……………表紙 アートポスト紙 153kg
本文 書籍用紙 46.5kg
写真図版 アート紙 70.5kg
- 製本……………左無線綴じ
- 表紙加工…マットP.P.(ポリプロピレン)加工

増山遺跡発掘調査報告

増山城下町における戦国期集落の調査

—室牧線鉄塔塔替(No.62～No.62-2)他工事に伴う埋蔵文化財調査報告書—

2018年(平成30)3月30日発行

- 編 集 砺波市教育委員会
〒932-0393 富山県砺波市庄川町青島401
TEL 0763-82-1904 FAX 0763-82-3521
URL:<http://www.city.tonami.toyama.jp/>
- 株式会社上智
〒939-1351 富山県砺波市千代176番地の1
TEL 0763-33-2085 FAX 0763-33-2558
URL:<http://www.johchi.co.jp/>
- 発 行 北陸電力株式会社
-

- 印刷・製本 中央印刷株式会社
〒930-0817 富山県富山市下奥井1-4-5
TEL 076-432-6572 FAX 076-432-2329
URL:<http://www.c-printing.com/>
-